

中の單語又は成句を用ひて作文せしめる。

第二種の作文に就いては、多數生徒の思想又は語句を蒐めて一種の混成文を作るも可ならん。例へば先づ『春』といふ題を與へ置きて、生徒をして色々の作家の詩文を読ましめ、學校に來れる時クラスに於て之を記憶より言はしめ、教師は之を蒐めて次第に一つの統一ある文を板上に作る方法も、興味ありて有效なるべしと語れる女教師ありき。他の意見少くして格別記すべきものなし。第三種の自由作文に關する論議は都合によりて省略せらる。

次に教授は書取教授法の意見を發表して曰く、(1) 少くも一週一回行ふべし。度数の多きだけよし。(2) 書取を行ひたる後直ちに生徒等をして誤字を訂正せしむべし。(3) 順序—第一回のリーディングは唯聽かしむるため、第二回はペンを取つて書くため、但し第一回と第二回のリーディングの間暫く猶豫を與ふべし。第三回は訂正のためなりと。

尙ほ注意として加へて曰く、(1) 各語を機械的に讀むべからず。讀む時調子と表情とを要すべし。(2) 書取の教材は架空的の事柄を避けて生徒に縁近き題材を選むべし。殊に初學者に對しては未だ讀みたることなき書籍より材料を採るべからずと。

附屬リンカーン・スクール

四月二十五日澤柳・小西博士等の一行、歐洲より來りて紐育市の教育視察に着手せんとするに會したるを以て、其の一行に加はりて一日參觀せり。校長より同校に於ける一般的教育の主義及び施設の

説明あり。要するに此の學校は教育上の新意見・方法等を實驗せんとする研究所なり、此の日ハイスクール程度の四年級男女十二人ばかり講堂の廣潤なるプラットフォームに登り、卓を圍んで一人づゝ隨意に詩文の暗誦又は演説をなし居たり。短きは三四分、長きは五六分なりしが、仲々立派なる成績なりき、我國の學校に於ても、クラスに於て時々斯の如き方法を工夫して生徒の發表力を助長するも良法ならんと感じり。

二十八日余は單獨にて再び訪問せり。初めに參觀せるは小學科四年級にして佛人男教師の擔任なり。『ダイレクト・メソッド』を以て佛語にて教へ、生徒をして佛語にて發表するやう導けり。尤も教師は英語に堪能にして、生徒の理解を補ふべく英語の説明を時々加へたり。教材として用ひたるは塗板上に掲げたる學校の教室の繪にして、一人の男教師が教授する所を表はすものなり。教師は此の畫に依りて生徒と問答を行へり。佛語の問答終りて教師は以上問答せる主要の點を塗板に書いて知識を精確ならしめたり。

次の時間は矢張佛國婦人教師にして、英語に堪能の人の授業なり。小學科第三年、十四五人のクラスなり。カードを用ひて單語記憶の練習を行ひたるが、生徒各自の前に一枚づゝの畫カードを與へ置き、教師カードの單語を一つづゝ讀み上げて、之に相當する畫を持てる生徒をして、その自己の所有するものなる事を言はしむる方法にして、兒童の注意力と記憶とを敏捷ならしむるの利益ありと思はしめたり。

ヴァッサー女子大學

此の大學は明治の初年日本女學生の始めて留學せる所にして、故大山公爵捨松夫人・瓜生大將夫人等が少女時代に學べる女子大學なり。先づ第一年二學期の授業を參觀せり。教師は佛人の男子にして多年米國に居住して英語に自在なりと雖も、文法上の問答を佛語にて行ひ、稍難解の所を英語にて説明し、學生は大概佛語にて答へたり。次に佛語主任教授ホワイト女史の三學年の佛文學史の講義を傍聽せり。その佛語は實に流暢にして米人たるを忘れしむるの概あり。一時間の講義中一の英語の口より洩れたるを認めず。學生の質問應答悉く佛語なりき。女史は殆んど毎年夏期を利用して巴里に遊び、常に清新なる佛語に親むことを努めつゝありと云ふ。豫め學長マクケラン博士との會見を請うて談話を交換せり。其の時余は日本に於ける英語教授上の困難を述べて博士の意見を叩けるに、博士三つの案を示せり。(1) 文部省は教養ある外國教師を視學委員に委嘱し、各地の中等學校を少くも三ヶ月に一回づゝ巡回して英語の授業を參觀せしむべし。(2) 夏期又は冬季の講習會を開設して教師等の修養に便せしむべし。(3) 教室に於ては生徒をして必ず外國語を以て話すことを要求すべし。尙博士語を繼いで曰く、自分も曾てコンスタンチノーブルに於て英語を教へて困難を感じたる體驗を有するが故に、其の間の消息を十分了解せり。併し以上の三條件を提げて進まば、終に困難は除去せらるべしと。

次に學長の信頼せる一教授ストレーベ女史と語學教授上の談話をなせり。女史は『ダイレクト・メソッド』の主張者にして、その意

見に依れば、譯讀を以て語學を教へては到底自然なる發達を遂ぐるの望なかるべし。自分は多く繪畫を掲げて之に依つて練習するを常とせりとて、余を女史の教室に伴ひ行き、平生用意し置ける數多のプリントを示したり。余は繪畫を利用して會話的に英語を教ゆるは望ましき所なれども、日本の學校に於ては一定の讀本を夫々採用して之を教授する習慣あれば、教科書に縁遠き畫を使用するは不可能なりと云ひたるに、勿論教科書に關係なき畫のみを用ゆるは不可なりと。(序に日本の英語其他の外國語教科書には多くの挿畫あるが故に、之を十分利用して語學の練習を行ふには好都合なり。教師等の此の點に一層の考慮を要するものあり)

最後に獨逸語主任教授の上級の授業を參觀せり。六十歳位の女史にして、主に一・二節づゝ讀ましめ、その果して解するや否やを試むる爲め、種々獨乙語を以て質問をなし、又教師より説明を加へたり。終りに文法上の練習を暫く行つて了れり。

紐育デヴィット・クリントン・ハイスクール

此の學校は紐育市男子ハイ・スクールの最大なるものなり。目下生徒7000人を有し、到底同時に教授するの餘裕なきを以て、二部教授を行ふ。併し斯の如き尨大なる學校を管理する校長の手腕に敬意を表せざる能はず。日本の中學校に於ては600人乃至1000人の生徒を管理するさへ困難なるが、是れ半ばは、此の自由國の青年が師長に對して却つて從順なる氣風あるに職由するが如し。佛語の教師のみにても十八名にして、主任は米人なり。佛人は僅に一人のみ。此

の點に於て日本の中學校に於て邦人教師全勢力を有すると同一なり。但し米人教師も外國教師も孰れも大學卒業者にして B.A. 又は M.A. の學位を有せり。先づ主任フランク氏のクラスを參觀す。教科書はドクトル・マラー氏編著『サン・ファミユ』なり。五人の生徒各自分擔せるパラグラフの英譯を塗板に書けり。其の間に教師は他の生徒等を逐次指名して本を音讀せしめ、次に教師は同一の箇所を範讀し、了りて佛語を以て本に就いて種々の質問を行ひたるが、生徒も亦佛語を以て答へたり。之を終りて先に塗板に書ける生徒等の譯文訂正をクラス全體にて行ひたるが、教師は始終之を指導訂正せり。最後に教室用の地圖を披いて、生徒をして地點などを指摘し且つ説明せしめたり。

次に婦人教師の授業を見たり。約五十人のクラスなり。簡易なる動詞の練習にして、多數の生徒をして出で、板上に例文を書かして之を訂正したるが、教師は大抵英語を用ひて佛語は極めて稀なり。生徒も亦全然英語のみを以て質問・應答せり。我が邦の中等學校に於て往々目撃するところと大差なかりき。

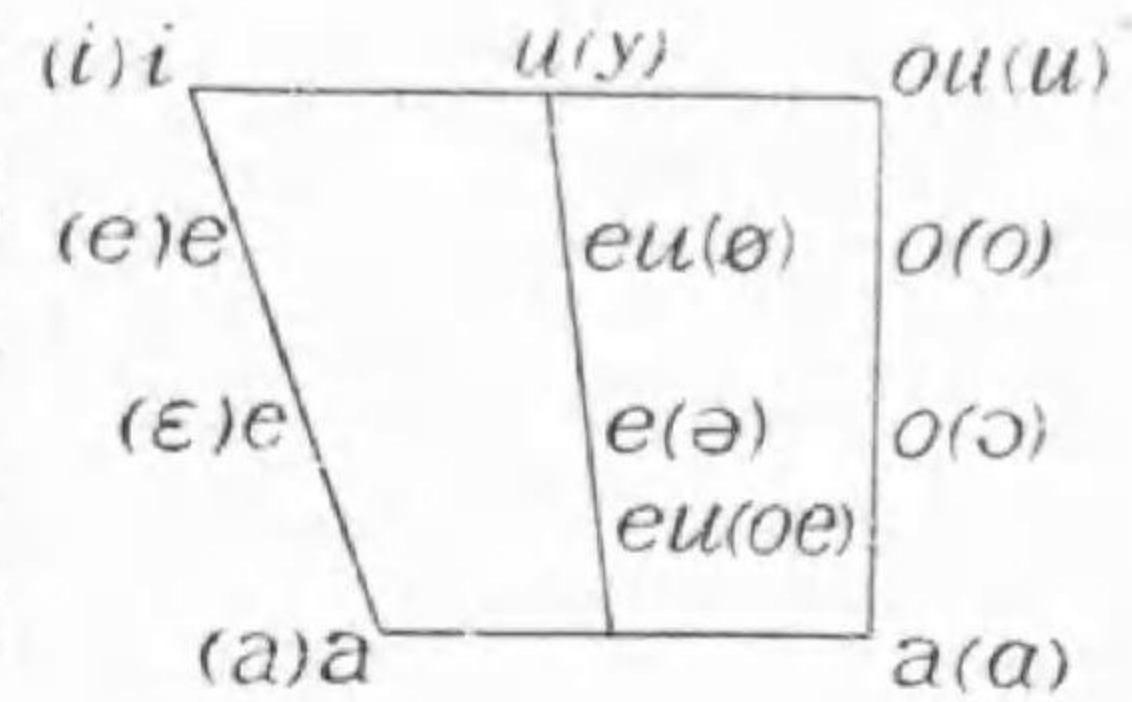
ワッドレー女子ハイ・スクール

紐育市最大女學校の一なり。生徒員數4000人、佛語科主任は男子にして佛人なり。余は態々米人教師のみの授業を參觀したしと申込み。初めに觀たるは一女教師の組にして、先づクラスをして唱歌二篇を齊唱せしめたるが、教師も共に歌へり。次に塗板上に文法の應用練習を行ひ、終りて口授せる佛文を口上にて譯せしめたるが、

競争的に擧手して答ふる生徒も可なり多く見受けたり。又口授せる英語の短文を佛語に口譯する練習も相當に上出來なり。以上は二學年なりき。

次にウイルソン女史の授業を參觀したるが、之も亦二學年なり。女史は本より佛文を讀み聴取を以てそれを英語に譯せしめたるに、概して良成績なり。次に『サウンド・ドリル』を行ひたるが、下の圖を畫けり。

此の表に依つて約12分間ばかり母音の練習を嚴重に行ひたる後組を二班に分ち、各方面に長を指名し、長をして隨意にその選ぶところの生徒を己が側に立たしめ、互に同數の生徒が相對立して教師の



口授する佛文の間に交互に答へしめ、答ふる能はざる者は直に降参して席に着き、最後に立てる數の多き方を以て勝となすの仕方なり。随分活潑なる練習なりき。女史機智縦横にして授業振りも親切なり。二人の黒人の生徒に對しても、些の嫌味なく取扱ふ有様は敬服の至りなりと云ふべし。

次にグードリッチ女史の三學年の授業を參觀せり。佛文教科書中の可なり長き二節を數行に分ち、生徒をして讀ましめたる後、女史は佛語を以て其の内容に就きて問ひ、生徒の之を解するや否やを確め、且佛語を以て始終説明を加へつゝ進行せり。尤も折々英語を以て説明を補ひ了解を助けたるを認めたり。

最後にサッソー女史の獨乙語の教授を參觀せり。教師は本を読み生徒をして英語に口譯せしめたるが、良く答ふる者數名を見受けた。次に文法に移りて疑問代名詞を教へたるが、その説明には英語多くを占めたり。終りに女史英語の單語又は短文を読み上げ、生徒をして獨乙語を以て答へしめたり。

蘇國グラスゴー學校視察

(前略) グラスゴーに赴き先づ教育局を訪問、局長クラーク氏に面會し、一般の教育狀況を聴き後その紹介を以てアルバート・ロード・アカデミーに行き、三教師の佛語教育の有様を參觀せり。初め主任教師エリコット氏と語れる時、余は君の學校に於て或一定の『メソッド』に依りて教授するやと問へるに、氏答へて曰く、吾等は紋切型の『メソッド』を用ひず、新舊兩派の長を採り短を捨て、適度なる方法を以て生徒の實力を養成せんと欲す。徒らに會話法のみ據らず云々。校長に案内せられて五級の佛語のクラスを參觀せり。主任エリコット氏の擔當にして、ラ・フォンテーンの『フェブル』を用ひ居たり。先づ六七人の生徒をして書中の詩を読みしめ、然る後之を英語に譯せしめたるが、日本の學校に於けると同一方法なり。次に教師は佛語を以て本に就きて種々の質問をなせるが、生徒は矢張佛語を以て應答せり。可なり流暢なる佛語を使用する生徒あり。此の組は男生三人、女生十二人なりしが、概して女生の應答見事なれども、三人の男生は孰れも應答不活潑なりき。次に文法の練習を行ひたるが、各生夫々之に應答せり。尙教師は佛語にて説明

を加へたり。

第二時限(前半)二學年を觀る。教師生徒に命じて donner 動詞の變化をなさしめ、次に教師は教材の範讀をなし生徒をして之に倣はしめ、了りて數節づゝに分ちて英語に譯せしめたり。後半に參觀せるは女子二年生にして女教師の擔當なりき。範讀の後生徒をして齊唱せしめ、次に數節に分ちて各生をして英語に譯せしめたり。教師の範讀は中々見事なり。生徒の讀む時種々の應用を命じたり。通じて佛語を使用する場合多きを占む。此の校に於ては、女生の應答男生のそれに比して遙に勝れるを見たるは意外に感ぜられたり。

英國ソマーセット州バス市學校

蘇國より倫敦に歸來せるは九月一日なり。豫て知友の紹介に由りてバス市郊外モンクトン・クーム・スクールの參觀を計畫しありしを以て、該校に交渉を遂げ、同月二十五日倫敦を發してバス市に赴けり。校長カーン氏は牛津大學の出身にして牛津・劍橋・倫敦等の諸大學出身の學士を同僚として中等教育に従事す。生徒約180名悉く之を寄宿舎に收容して最も堅實なる品性教育を施せり。二十六日校長の案内にて五級B組の佛語授業を觀る、擔當者はオーエン學士なり。先づ新語句を塗板に書いてその意味を説明し、了りて本を開いて各生をして讀み且つ譯せしめたり。別に新しき工夫を見ず。

次に四級の作文教授を參觀したり。ステーヴンソン學士有史以前英國諸島に居住せる民族に關して約15分間講話をなし、了りて生徒をして其の事柄を自己の言葉にて作文せしむる法にして、一種の

『レプロダクション』なり。余は机間巡視をなすに、概して成績良好なり。各生二枚乃至三枚の作文を書けり。

二十七日朝五級の佛語授業を參觀す、教授グードリッチ學士は倫敦大學の出身にして、佛・獨の近代語に精通すと云ふ。學士は前日生徒等をして書取らしめたる教材を自ら讀みて、生徒の筆記中の誤りを訂正せしめ、次に新教材を書取り、數行づゝに分ちて讀み且つ譯せしめたり。最後に文法 *Passé défini* と *Imparfait* の規則を各自のノートに筆記せしむるに英語を以てなせり。之は先づ生徒をして文法に就いて大體の觀念を有たしむるの要あるが故なりと、教師余に語れり。第三時限に四級に於ける作文授業を觀るにナイト・アドキン學士の擔當にして、教師はフェアリー・テールズの由つて起れる所以を面白く講話し了りて、生徒をしてその内容を作文せしめたるが、前出の作文教授と同一方法なり。

一夕校長夫妻と共に種々教育上の問題を談話せる時、余は英國の學校に於て遊戯を以て青年の品性陶冶の基礎とするの意義を試みに問へるに、夫妻互に答へて云ふ。吾々の學校は概してラグビー式フットボールを學校遊戯の主なる一つとしつゝあるが、彼の遊戯に於ては競技者二方に分れて、各々己の側の爲に戰友相互に助け合つて競ふものなるが故に、自然に共同一致の精神を養ふべく、又最後の勝を獲んとして戰ふ間に勇氣と忍耐の徳を練り、又一切教師の干涉なくして運動を終始するが故に、知らず識らず獨立自治と規律の精神を訓練せらるべし。吾等の學校に於ては共同精神の發揮を重んじて、一二人の拔群なる競技者を獎勵せず云々と。味はふべき言葉な

りと感ぜり。

廿七日午後同校少年部を訪ふ。此の學校はモンクトン・ダウンの丘上に在りて四方の光景形容の辭に苦むほどに美なり。校舍といひ位置と言ひ高等部のそれに比して遙に勝れたるを知る。校の周圍約二十エーカーの地は此の學校に屬する由なり校長イースターヒールド氏は、劍橋大學の出身にして『プライズマン』の名譽を有し、後佛國巴里のソロボヌ大學に學びて優等の成績を擧げたる人なり。年齢六十一二歳に見受けらるゝ快活なる老教育家なり。一見舊知の如き親みを感じしむるものあり。余を遇するに異邦の人を迎ふる態度なく、全く異邦より歸り來れる兄弟を遇するが如き趣あり。生徒八十名ばかり全體寄宿舎に收容せり。イースターヒールド氏は獨身にして令妹専ら主婦の役を勤めつゝあり。午後八時半頃イースターヒールド氏に案内せられて寄宿舎の各室を巡察したるが、初めに觀たる寢室には八名の兒童已に燈を消して就床し居たり。老師の入り來るや、皆欣然として床上に半ば身を起して快活に迎へたり。老師は兒等の頭を撫しつゝ言葉を掛けて後『グッド・ナイト』を告げて次の室に行き前と同様に兒童等を慰撫しつゝ又第三室に入る。かくて約半時ばかりにして豫て余の爲に用意せる校長室の隣にある室に伴ひ來る。校長の寢室は終夜扉を開放して一年中休暇の時を除くの外閉づることなしと云ふ。其の何故なるやを尋ねたるに、兒童等をして何時も己の許に來たりて求むるところを訴へしめんが爲なりと答へた。

廿九日第一時限一年B組を視る。ブラウン女史の擔當なるが、生

徒をして佛語にて室内の器物を指摘せしめたり。次に組を二班に分ちて室の兩側に立たしめ、塗板にある英語を佛語にて言はしめ、誤りあれば自己の席に就き、最後に立つ者の多き側を以て勝となすの競争なり。第二限一年A組ホートン教師擔任。生徒をして男性女性の二語を思ひ出すまゝに言はしめ、次に佛語にて父の子を何と云ふか、兵士の馬、父の馬等を佛語にて言はしめ、次に室内の四つの器具を佛語にて指摘せしめ、更に身體の四部、頭・體・手・足等を言はしめたり。次に二年A組校長イースターヒールド氏の授業振りを見る。師は佛語にて一年の四季を何と云ふかと問ひ、之に就きて暫く練習し了りて掛圖を示し、佛語にて汝等は何を見るやと問ふ。「私は雪球を見る」「私は男兒を見る」「私は大人を見る」私は大人と子供と雪球を見る」等の練習をなす。

概して此の少年部の語學教授は新式教授法所謂『ダイレクト・メソッド』を用ひて具體的に生徒を啓發することに努めつゝあり。校長の教授振り最も快活にして且つ巧みなるを認めたり。

キングスワード・スクール

バス市に在り。1748年ジョン・ウエスレー（有名なる宗教改革者）の創立にして爾來連綿として繼續し來れり。初めは教育者の子弟を専ら養成する機關なりしが、今は一般の青年のために開放し、卒業生は多く牛津・劍橋其他の大學に入ると云ふ。校長ウートン氏の案内にて先づ三級の佛語教授を視たり。サブジャンクテブ・ムードの動詞の練習をなし、次に書取を行ひたるが、教師一度通讀して二

度目に書取らしめ、終りに生徒をして本を開いて自己の誤りを訂正せしめたるが、概して良好なる成績なるを知れり。第二時限に一年の佛語のクラスを參觀す。教師は塗板に新語句を書き置き生徒をして教室内の實物、テーブル・窓・ケシゴム・本等を指して言はしめ、次に生徒を二分して室の兩側に立たしめて『スペルリング』の競争をなし、誤れる者は直ちに己の席に就きて勝負をなすの學技なり。他の學校に於て見たると同一方法なり。

次の時間に五級の英文學を參觀す。教科書は牛津大學出版の少年詩集なり。生徒をしてウオズウオスの詩を數行づゝ音讀せしめたる後、教師範讀しながら難句及び詩の全體の意味を説明せり。此の時余は試みに教師に向つて、生徒は詩の韻律法を解するやと問ひたるを以て、直ちに生徒に其の意を傳へたるに、之を知る者可成り多數なり。教師は韻律法の講義に時の後半を費せり。

此の日土曜日にして半日の授業なるを以て、校舎の視察をなす。茲にその二三を記すべし。(1) 生徒は全部舎生にして其の數240名。(2) 大なる室に20人程の寢臺ありて監督の教師接近せる小室に起臥す。(3) 食堂には數人の教師一段高所の卓に就く。(4) 最上級の生徒一人づゝ卓の一方に就けり。(5) 校長食事の時壇上に立ちて四方を監督し、且つ舎内の事柄に關する布達・注意等をなせり。(6) 生徒は日中寢室に入るを得ず、圖書室・教室又は運動場・水泳室等にあるを常とす。(7) 身體故障ある者は病室に在りて校醫の保護を受く。(8) 夕に自修室（大廣間）にて教師指導の下に勉強す。(9) 日曜日は全生徒二つに分れて教師引率の下に市内二ヶ所の教會に行き

て禮拜す。(10) 校長は家族と共に校内に住居す。

校長ウートン氏は劍橋大學出身にして頭腦明晰、極めて嚴格の人なり。或は峻嚴に過ぐる處なきにあらず。何となれば校長食堂の高所に立ちて生徒を監督する間、彼等は不斷戦々競々として落着かざる趣あり。校長自ら余に洩したる言葉にも察せらるゝ所あり。以前は校長も生徒と共に食事をなしたれども、生徒等不安の状あるを見て近來は暫く監督して他の同僚に任せおくと云へり。

ブリストル市クリフトン・カレーヂ

此の校は英國パブリック・スクール中録々たるものの一つなり。元帥ヘーグ將軍は該校の出身にして現に學校の名譽總理たり。校長キング博士は牛津大學の出身にして文學博士なり。職員本校四十一名・少年部七名・豫科四名都合五十二名、悉く大學出身者にして M.A. 又は B.A. の學位を有す。生徒員數本校 550 人、少年部 145 人なり。校長の紹介に由りて英語主任教授及び佛語主任教授に面會し、初めに本校三年の英語科を參觀せり。沙翁の『冬物語』を読み居たり。多くの生徒をして讀ましめたるが、一時間 89 頁を通讀せり。文字・意義の如きは殆んど顧みるところなく、生徒をして話中の人物に就いて時々問答せるに過ぎず。日本人の教師の立場より見れば、斯の如き授業をなして何の効果あるやを疑はしむるものなきにあらずと雖も、主任教授の語るところに依れば、此の校に於て沙翁を讀むは、生徒をして沙翁の大體に通ぜしめ、話中の人物の顯著なるもの、例へば『マクベス』劇のマクベスとマクベス夫人の性格を一

通り解せしめ、文學の趣味を悟らしむるを目的とするものにして、字義の穿鑿の如きは措いて問はざるを例とすと言へり。

次の時間に少年部五年級の佛語教授を參觀せり。教師は佛人にして英國に在ること廿五年なりと云ふ。英語を操ること英人と毫も異なることなし。先づ教師は本を用ひず、口授を以て一つの物語をなし、生徒をして之を『レプロジユス』せしめたり、15名ばかりの組なりしが、多數のものは克く之をなし得たり、了りて動詞の變化の練習を行ひ、本を開いて『リーデング』をなさしむ。教師は佛語のみを用ひずして、英佛兩語にて教授せり。

マーデン氏との談話。マ氏は曾てシヤム國王立學校に聘せられて語學を教授したる經驗を有する人なり。余の如何にせば本國の生徒をして外國語を話す習慣を養はしむべきかとの間に答へて曰く、其の一つの方法は時間の始めに當り、或る生徒を指名して、汝は今朝起きてより今までに何をなしたるや、或は昨日の出來事は何なりしや、今日の新聞は如何などの問を起し、之を英語にて言はしむべし、第二の方法は二人の生徒を立たしめて對話せしむべし。然る後其の日の教授に着手せば、稍外國語を大膽に語るの習慣を養ふを得べきかと。好箇の暗示なりと云ふべし。

倫敦ポリテクニク・スクール

通稱『ポリテクニク』と云ふ。サー・クインテン・ホッグ氏の創立に係り、現在の生徒數一萬人餘、晝間學校の中等學部約 500 名を中心として、夜間の技術學校・文學科（多くは倫敦大學より講師

を聘す)・語學科、午後の婦人技藝科・彫刻科等あり、此の種の學校として全國第一に位し、教育上極めて重要な地位を占む。クインテン・ホッグ氏はサー・ゼームス・ホッグ氏の第四子にして、1863年イートン校を卒業して、牛津大學に入らんか、或は外國漫遊の途に上らんかと思ひつゝありし時、偶然トムソン商會より招かれて之に應ぜり。蓋し暫くして商會の代表者として支那に赴かんとするの志望ありしが爲なりき。かくして時機の到來を待つ間に、市中の往來にて遭遇する幾多の貧しき少年を見て惻隱の情を起し始め、世間の人々の顧みざる之等の少年を救濟するの道を講ずるのわが義務なることを痛感するに至れり。夕に商會の事務を終りて、歸途路傍に彷徨する二三の青年を集めて靴を磨く仕事を教へ、多少の資を與へてその必需品を供へ、之等の少年を街頭に送つて通行人の靴を磨かしめ、歸れば一定の宿に集めて之を教育し、且つ適當な寢臺を供せり。彼は次第に擴張して100人を容るゝに足る寄宿舎を造り、且つ之等無頼の少年のために夜學校を開くに至れり。是即ち『ポリテクニク・スクール』の濫觴にして、幾萬の不良少年その感化によりて良民と化せり。江湖之を認めてホッグ氏の徳を賞揚せざるものなかりき。アーガイル侯はホッグ氏の忠友にして、生涯その事業を助けて倦むことなかりき。晩年帝室はホッグ氏の功を賞し『ナイト』の爵を授けて之を優遇せり。國王ジョージ陛下、パトロンとして常に此の學校を保護せらるゝ由なり。余は中學部長と會見して學校管理・訓育の狀況を尋ねたるに、答へて曰く生徒の管理に就きては格別困難も見ず。上級(六級)の生徒中より八人の『プレフェクト』を選

抜して生徒を管理しつゝあるが、彼等は實際上生徒を管理しつゝありて當局者が殆んど干涉する必要を見ざる位なり。尤も稀に甚だしき非行をなす者ある時は、懲罰として笞を加ふることありと。運動・遊技の品性陶冶の上に偉大なる効果ある所以は、例へばフットボールの遊技に於て、各々自己の屬するサイドの爲に努力して、決して利己的の考を有せず、僚友を助けて共に最後の勝利を獲んとしつゝ努むる間に、自然に他愛・克己・忍耐・勇氣等の諸徳を鍊磨すべし。且つ遊技に於ては互に『オーナー』を重んじて決して卑怯なる舉動を許さず云々。

佛語科の授業を參觀したり。英人の教授なりしが、初め10分間程は全く佛語にて話したるに、流暢にして些の澁滯を見ず。生徒は大概困難なく了解したる有様なりき。それより英語に變り文法の説明を行へり。蓋し複雑なる文法の説明は、佛語のみにては充分會得するの能力なきためならんと思惟せられたり。此の組は佛語の教授を始めてより漸く一年數ヶ月を經過せるに過ぎずと言はれたるが、進歩顯著なるものあり。

次に宗教部主任ホラー氏の聖書の組を參觀せり。是れ日本の學校に於ける修身科に相當するものなり。ホラー氏はウエスレアン派の牧師にして、大戦中軍隊附の牧師として英兵士の間に活動し、顯著なる功績あり。十字勳章を授與せられたる人にして、性快活・謙遜・親むべき紳士なり。學生を遇するに『ゼントルマン』を以てし、全力を傾注して風化に盡くしつゝあり。此の時恰も聖書の緒論を講じたるが、簡にして要を得たり。一萬の學生の名を殆んど悉く記憶し

て何時にても生徒各自の名を呼び掛けて話し得べしと語れり。余に向つて學生のために一場の講話を乞はるゝまゝに、約七分間日本に於ける中等學校の倫理科のことを語れり。

劍橋パース・スクール

翌年七月十八日ケンブリッジの二大パブリック・スクールの一なるパース・スクールを訪問して、校長ラウス博士の拉丁語教授を參觀せり。博士は以前大學に於てサンスクリットを講じたる由なるが、今は此の學校に於て専ら教育に従事しつゝあり。年齢六十有餘と見受けたり。此の日五年六年の合級を教へ居たり。教科書は拉丁の文豪の作を蒐めたるものにして、我が漢文の文章軌範の如きものなり。此の時恰もオーヴィッドの文を読み居たり。先づ生徒をして數行を読ましめ、教師は拉丁語を以て其の生徒に或る語句の意味を尋ねたるに、拉丁語を以て答へたり。教師は拉丁語を以て説明を加へ、次に他の生徒を指名して續きを読ましめ、前と同じ方法にて問答し、教師は又説明を加へぬ。此の間クラスをして自由に質問又は意見を述べしめたるが、一人として英語を用ひたる者を見ざりき。最後に教師は全體に就いて暫く語りて時間の終りに至る。

英米の學校に於て拉丁語は死語として取扱はれ、唯所謂譯讀のみ行はるゝに拘らず、校長は時流に反して活語となし、拉丁語を以て教授し、生徒に於ても格別困難なく斯の如き授業を受けつゝあるは、實に注意すべき事柄なりと云ふべし。余の在外研究中最も驚嘆せるはラウス博士の授業なりき。博士余に告げて、初年級より此の方法

に依り漸を以て進まば、決して不可能にあらずと。彼の用意と勇氣の尋常ならざるを想ふべし。彼は英國の學校に於ける語學教授に一大改革を起さんとするなり。

次に同校第二年の佛語授業を視たり。先づ二人の生徒をして教科書中の發音記號を以て書ける文を読ましめ、次に二人の生徒をして佛文を読ましめ、之を了りて三人の生徒を教壇に立たしめ、教室の窓・机上のナイフ・インキ壺等に就いて佛語の問答を行はしむ。次に二人の生徒をして塗板に來りて二つの短文を發音記號と佛文にて書かしめたり。了りて二人の生徒をして佛語にて對話せしめ、最後に全級をして佛語の唱歌を唄はしめたり。此の唱歌を行ふに當りて、先づ歌詞の發音に就きて丁寧に教ふるところありたり。此の教師一時間中英語を用ゆること稀なり。教授變化に富み、生徒をして始終『ワイド・アウェーク』の状態に在らしめ、余をして嘆賞措く能はざらしめたり。

又一日此の學校の英語科主任クック氏の授業振りを觀たり。クック氏は教授法の巧妙なるを以て英米に名聲高き人なり。氏の作文及び發表法の教授なりしが、先づ二人の生徒を指名して教壇に立たしめ一人は指揮者となり一人は補助となり、指揮者の指名に應じて一人の生徒教壇に登り、三四分間その作れる文を基礎として演説せり。了りて指揮者はクラスに向つて批評を求めたるが、續々として批評するもの多し。次に他の生徒を指名して前と同様の順序を以て批評を求め、順次四五人の生徒教壇に登りて演説せり。教師は生徒のベンチの一角に坐して時々批評訂正をなしたり。教師は時間の始めに

各生徒より先に提出せしめたる作文を渡したるが、一々短評を加へて返せり。

劍橋レイス・スクール

ケンブリッジに於ける他の有名なるレイス・スクールは、ウエスレアン派に屬する學校にして、校長はビスカ氏と言ひ、M.A.の學位を有する人也。

パース・スクールは教授法の優秀なるを以て鳴り、此の學校は品性陶冶を以て聞ゆ。建物の壯麗（國王の寄附になれる建物もあり）運動場の廣濶にして整頓せること、稀に見るの學校なり。生徒員數250名、全部之を寄宿舎に收容せり。上級生より八名乃至十名の部長を選抜して生徒を監督せしめ、其の上に生徒監之を統率して指揮宜しきを得せしむ。校長も亦家族と共に校内に堂々たる邸宅を構へて住居せり。日曜日には午後六時より校内禮拜堂に全部の學生を集めて校長自ら説教するを例とす。

一日余は校長の紹介を得て佛語教授の有様を參觀したるが、教師は若き英國紳士なり。始めに教師はその添削せる生徒の作文を返し、暫く作文上の注意を話し、後蓄音器を取出して佛語のレコード二枚を聴かしめたり。余に告げて曰く、自分は曾て佛人の家族と共に居住して、多少佛語の發音・調子に習熟したるが如しと雖も、到底完全を期する能はず、故に佛人の吹き込めるレコードを用ひて、生徒をして純粹の調に慣れしめんとするなりと。蓄音器を使用すること約5分間以内にして、次に約20分間文法の應用練習を行ひ、了りて

本を讀めり。説明は英佛兩語にてなせり。教師の佛語の調子見事にして殆んど非難すべき點を認めざりき。

次に歴史科（英國史）の授業を參觀したるが、大なる歴史地圖を塗板に掛け、生徒をして歴史上の地點を指摘して事件の經過を敘せしめ、教師も亦之に由りて盛に論議し居たり。教室を一巡して寄宿舎に入り舎生の寢室を見るに、廣濶なる二階の室に二列に各十箇ばかりの寢臺を配置して20人の生徒に供したり。階下の一小室には部長室ありて數人の部長等起臥を共にするあり。三階も寢室にして同一の配列なり。全生徒250人を悉く收容する故、他に幾多の寢室書齋等あるは言を俟たず。

余は校長と談話の折、斯の如き廣大なる建物と運動場を有せらるることなれば、尙多數の生徒を收容して教育の恩恵を頌つを以て良策とせずやと尋ねたるに、否とよ、此の校の設備を以てしては現状の員數を以て最大限度となす。青年の人格教養の理想を實現せんとするには、今日以上の生徒を收容することは、吾等の首肯する能はざるところなり云々と語れり。

伯林キルシネル・オベル・リーアル・シユーレ

八月二十日英國を出發し和蘭ロッテルダム・ハーグ・アムステルダム等の都邑を漫遊して、同二十二日伯林に入る。九月十日廣島の同僚にして當時在外研究中なる佐藤熊次郎教授と共に、前記の中等學校を參觀せり。最初に英語科リーディング・クラスを視たり。先づ前日に學べる讀本中のウオヅウオスの詩を三人の生徒をして逐次暗

誦せしめ、了りて其の日の教材を範讀して生徒等をして讀み且つ獨逸語にて口譯せしめたり。教師の讀方は相當に良好なりと雖も、説明に英語を用ひずして全然獨逸語なりき。第二時限に英作文の授業あり。獨文を以て書きたる英作文教科書中の『セイクスピア傳』約2頁ばかりの文を見て、生徒をして數節に口譯せしむる練習なり。一二の生徒は流暢なる英語にて口譯したるが、他生の中には豫め用意し來れるノートより譯する者もありき。教師は訂正の場合を除きて獨逸語にて説明せり。大戰前合衆國紐育市教育局より、獨逸に於ける外國語教授の實際を調査すべく派遣せるヘンリー・ジグ氏の報告書にて讀みたるものと比較して、甚しき相違あるを想はざるを得ざりき。惟ふに大戰の影響、語學教授の上にも現はれたるにあらずや。第三時限に佛語科の教授を參觀したるに、初年級なりしを以て本を開かずして極めて簡單なる佛語の言ひ方を口頭にて行はしめ、又塗板を以てその書き方を教へ居たり。要するに英米の語學校に比較して、伯林の此の學校の語學教授は振はざる有様なりと感ぜり。時恰も夏期にして多數の學校を參觀するの機會なきを遺憾とせり。

概 評

1. 英米諸國の諸學校に於ける語學教授の實際を視察して感ずることは、米の方は比較的新式教授法に依るもの多く、所謂『ダイレクト・メソッド』の色彩濃厚なるあれども、英の方に新舊折衷主義を取るもの多數を占むるを認む。
2. 英米孰れの學校に於ても、語學の時間は多くの日本の學校に

於ける如く1時間全部を譯讀に費さずして、文法の應用・讀書・書取・言ひ方等を用ひて、教授變化に富めり。

3. 發音學の理論は講ぜざるも、實用的發音學の應用と發表法の練習に苦心の狀あり。

4. 獨逸の學校は余の觀察せる範圍に於ては、英米に比して遙に舊式的なれども、是れ大戰の結果なるべしと察せらる。

5. 人格的教育の徹底するは、英國の學校に及ぶものなし。是れ一は生徒の員數を少くして寄宿舎に收容し、其の品性の陶冶に周到なる注意をなすと共に、宗教的・道德的教養を興ふるに起因するが如し。

6. 其の二は遊技を以て體育の効果を擧ぐると共に、青年の品性修養に資せしむるもの多きに因るが如し。

中等學校英語科教授に就いて

(大學ノートの中より)

學校教授の目的

歐米の學校に於ては一般に拉丁・希臘の古典を教ふるを教育の大なる任務としてゐたるが、こは我國に於て支那の古典や日本の古き文學を學校に於て教ふると等しく、一般的修養を目的となしたるものである。近來に至りては次第に近世語を學校の必修學科とするやうになつた。蓋し時勢の進運に伴うて近代語の智識を必要とするやうになつたからである。即ち他の文明國に於ける科學の進歩に遅れざるため、又他國の文藝上の作品を了解し、或は國際上の活動や買

易の方便として語學に熟達することの必要に迫られて來たからである。歐洲大戰勃發前、合衆國ニューヨーク教育局より語學教授の實際を調査せしむる爲に視學委員を英佛獨の三ヶ國に派遣したるが、其の報告書を手にするに、獨逸の中等學校に於ける英語教授の目的は、沙翁以後のかの國の名著を解し、その歴史文學の一般を知り、相當の程度に於て英語を聞き話し又書くの能力を養ふに在りとせられてゐる。又佛語教授の目的はかの國三百年來の名著を理解し、且つその國語を運用するの能力を養ふに在りとせられてゐる。佛國は獨逸に於て唱道せられたる語學教授法を、全國の中等學校に採用すべく訓令を1902年に發布した。その近代語教授の目的とする所は、外國語を自在に運用する程度に修得せしむるにありとせられてゐる。而して英國のセコンダリー・スクールに於ては、近代語の目的は單に會話力の養成にあらずして、兼ねて生徒の能力を研き、佛又は獨の文學に接して精神上の修養を豊富ならしむるためであるとせられてゐる。明治四十四年余の在米當時、文部省の命令に依りかの邦の外國語教授の狀況を視察したるが、シカゴ大學教育科大學附屬ハイ・スクールに就いて調査せるところに據れば、ドイツ語を教授する目的に二つあり。(1) 生徒をして稍進みたる程度のドイツ語を読み、その國語を解し簡易なる會話を操つり、朗讀せる文の要領を書き取るの能力を得せしめ、(2) 教科書を読み、又讀書に由りて暗示せられたる事柄を談話する間に、生徒をして次第に獨逸國民の歴史・政治・制度・風俗・文學等に通ぜしむるにありとせられてゐる。

又佛語教授の目的は、佛語を書き理解する能力を與へるがために

は文學及び生活に現はれたる佛國民的精神に就いて多少の鑑賞力を養はんが爲で、佛國民が藝術の上に將又た科學の上になせる功業について知識を得せしめ、又近代の文明生活に對して佛國民の寄與せる努力を認めしむるためであるとせられてゐる。以上英佛獨米の近代語教授の目的とするところを瞥見すれば、多少その國に依りて色彩を異にする趣あれども、概して二重の目的を有してゐる。(1) は實用的の目的で(2) は知識上精神上的の修養のためである。吾が文部省の中學校施行規則第四條に

外國語は普通の英語佛語又は獨語を了解し、且つ之を運用するの能力を得しめ、兼ねて智徳の増進に資するを以て要旨とす。

と記されてゐる。即ち我國の外國語の教授の目的は、歐米先進國のそれに比して大差なきのみならず、むしろ簡潔に克く教授の目的を言ひ表はしてゐると思ふ。

萬國共通語

世界の文明諸國民をして若し同一の言語を採用せしむることを得るならば、特種國民の文學と生活とを研究する目的以外には近代語の學修を必要とせざるに至るならん。之は教育上の一の重要な難問題を解決する良策である。中世紀に於て又近世に入りても久しき年代の間、拉丁語は有識者階級の共通語であつた。死語である故を以て國際上の競争を刺戟するの必要がなかつた。且又言語として最も正確にして純粹であるので學者の重んずるところとなり、七八百年間に集積せられたる哲學・神學・法學等の寶庫を開くkeyであつ

た。然しながら現代に於ては教育ある者は拉丁語を読むの能力を有すれども、流暢に之を運用することは不可能なるを感ずる。蓋し近代生活の最も複雑せる事物を拉丁語を以て言ひ表はすに困難を有するからである。ルイ第十四世の長き治世には佛語が歐洲の共通語たる位地を占めて、その後永くその勢力を維持した。佛語を話さざる者は交際場裡にもてぬ有様を呈したが、かの悲惨なる佛國革命の影響を蒙りて、佛語は萬國語となるの光榮を失つた。そこで理想家は之に代るべき共通語を工夫發明して1870年、Volapükといふ言葉製造して一時多少行はれたるが暫くにして消滅した。今日はEsperantoと稱する人造語を通用せしめんとして主張する者もあるけれども、世界的通用語となることは到底不可能ならんと想像せられる。近代語中世界語たる優勢の地位を占めつゝあるは英語である。之は文法上比較的單純であるのと、英語を話す人民が多いので交通上貿易上便利なるものがあるからである。

日本に於ける英語教授の經過

日本に於ける外國語の教授は、福澤諭吉氏の慶應義塾を以て鼻祖とする。之より以前に大阪長崎等に於て蘭學を教ふる人が少しくあつたが、大概オランダの醫術を教ふる傍ら蘭學を授けたるもので、英書の研究を専門とする所はなかつた。福澤氏は豊前中津の人にして夙に西洋文明の研究に志し、長崎に出で、蘭學を學び、大に得るところあつて江戸に歸つた。或日横濱に出で、英國人の屋敷に英字を以て掲載する廣告文を見て、その何事なるやを解する能はず。英

國の事情を詳細に調べ、その強國なるを知り得たるを以て是非とも英國語を學ぶの必要なるを感じ、之を修むることを決心し、江戸に於て先輩知人に計りしに、一人として教授し得る者なかりき。偶々蘭英對譯辭書を得て、英字の意味だけは稍解するを得たれども、その發音讀方に至つては全く知ることが出来ない。種々苦心の後、漂流者又は外國の少年等に就いて發音を學び、稍得るところあつたといふ。萬延元年二月(1860)條約書交換のため、新見豊前守咸臨丸に塔乗して米國に差遣せられ、軍艦奉行木村攝津守等に之に隨行することに決定した。福澤氏は木村攝津守に懇願して、その一行に加はることを得た。桑港に上陸して亞米利加大陸の事情を觀察した。その歸途 Webster's Dictionary を購ひ來りたるが、之が外國辭典輸入の初めであつた。福澤氏世界の大勢を達觀し、新文明を日本に扶植するを以て天職となし、仕官の念を斷ち慶應二年塾を開き、専ら英書の講義と著述とに従事した。之よりして英語の研究益々流行するに至つた。明治三年、尺振八氏の起せる共立學舎あり、明治六年中村敬宇氏の設立せる同人社あり、更に新島氏西洋より歸朝して明治八年京都に同志社を起して英學を教授した。明治十年には帝國大學の前身たる東京大學が設立せられ、加藤弘之氏總長となり、洋書は旺んに讀まれたのである。

西洋でも近代語を學校課程中に入れながら、希臘・拉丁の古語を教授する如く専ら譯讀主義に傾いた時代もある。次は文法式教授法を唱へて文法の形式に當てはめて、乾燥無味なる教へ方をした時代もあつた。又近代獨乙に起りたる語學教授革新論者の唱道せる New

Method もある如く、我邦に於ても約三段の變遷をなしつゝあるやうである。前に述べたるが如く、福澤氏が英學を始めたるは蘭英對譯辭書で獨習し、次に漂流者又は少年を相手にして多少發音を學び得たのが基礎となつたのであるから、その方面に於ては甚だ不完全なるものであつた。且つ洋書を通じて西洋の思想を早く學びたい、即ち新知識を得たいといふ精神に支配されて、其他を省みるの暇がなかつた。故に慶應義塾出身者の發音讀方といふものは奇怪なるものであつた。私は明治十七八年の頃東京駿河臺の成立學舎に在つて英書を學びたりしが、義塾流の一教師よりパーレーの萬國史を教へられたるに、この人は合衆國 United States をユニテッド・ステスと發音した。概して斯の如き有様であつた。次に文法萬能時代が來た。文法の知識不十分に於て、讀書に没頭する頃は、文の構造・語句の性質などに無頓着なりしたため、往々にして文意を誤解して精確なる思想を grasp することが不可能であつた。その反動として文法の研究が行はれて、以前の缺點を大分補ふことが出來た。然るに今度は文法的研究の極端に走つて、遂には必要なる文法の一般的知識より横道に入りて除外例などを専ら弄ぶやうになつた。茲に於て諸方に反對の聲起り始め、英語教授は耳・目・口・手を圓滿に發達さすべきことを主張せらるゝに至つた。近來の傾向は餘程覺醒の氣分に向つて來たやうである。これは歐米に行はれてきた語學教授改革運動の影響を蒙りたる結果なるに相違ない。

獨逸其他に於ける革新運動

1882年有名なる Viçtor 教授が『語學教授革新の必要』と題する

小冊子を出版せるが、之は革新運動の先鋒である。Viçtor, クーン、ランケなどの大家が聯合して革新の旗を翻し、猛烈なる反對に抗して戦つたが、益々勢力を振つて1884年には獨乙諸學校に採用され、1891年プロシヤの文部省は省議に依つて右の改良教授法實行のことに決定し、1892年即ち運動開始以來十一年を經過して法令となつて確立したのである。爾來語學教授法は益々革新の途に進みつゝあつた。1902年即ちその後十年にして、此の新方式は佛國の文部省の採用するところとなり、佛の凡ゆる中等學校に命じて實行せしめたのである。英國にては、1897年 Cambridge 教員養成所の理事會に於て、ドイツに於ける語學教授法の實際を調査せしむる爲に、近代語及び古典語の學者として名聲ある女史 Brebner 氏をかの地に派遣することに於て詳かに視察を遂げしめた。『ドイツに於ける近代語教授法』と題する本は同女史の報告書である。この書の出版せられしは翌年のことであつた。保守的氣分の強き國柄であるから、ドイツ又は佛國に於けるやうに文部省令を以て全國中等學校に勵行せしむることはないが、次第に漸進の勢力を以て行はれてゐる。

New Method の特色

Brebner 女史の報告に據れば、新式教授法の特色は分解的直接的模倣的の三方面を兼ね有することである。讀本教授が全體の中心となつて其中の教材を分解して、話し方・作文・文法の材料となすのである。國語の媒介又は文法の規則に據らずして、外國語を以て直接に心象・觀念を生徒の心に提供するので、即ち言葉より直接に言

葉を學ぶことである。又模倣によりて學ぶ、即ち教師が生徒に話し或は讀む時に、生徒をして出来る丈に教師の話し方讀み方を模倣せしむるのである。而して發音に重きをおいて大に獎勵してゐる。箇條書にすれば

1. Reading を授業の中心とすること。
2. Grammar を歸納的に教ふること。
3. 出来るだけ外國語を使用すること。
4. 各課毎に話し方を練習すること。
5. 教授資料は生徒の日々の生活に關係あるべきこと。
6. 幼年級には實物又は繪を使用すること。
7. 風物教授を廣く用ふること。
8. 全體を通じて發音に重きをおくこと、殊に初年に一層注意すること。
9. 短文の對譯よりも自由作文を重んずること。
10. 譯讀を出来る丈に減少すること。

以上は勿論特色の全體とは云ひ難いかも知れないが、新式教授法の重要な要素といふも過言にあらず。尙注意すべきことは獨逸に於ける語學教師は殆んど全部内國人にして、其の職に對して特別な訓練を受けたる學者である。而して外國に在留して其の國民の生活並びに言語に親める人々である。男子の語學教師は大抵英佛兩語に通じ、且つ Phonetics の訓練を受け、又文學と言語學とを修めてゐるといふことを報告してゐる。

我邦の教授方針

明治初年に於ける洋學の勃興は、五ヶ條の御誓文に示されたる「舊來の陋習を破り……知識を世界に求めよ」との聖旨に淵源したもので、西洋の新知識を收むるに忙はしかつたから、福澤氏其他の如く、發音・讀方などに浮身をやつして教授法を工夫するの暇なく、洋書の譯讀を以て足れりとしたのである。然るに外國との交通次第に漸繁となり、外交に、又貿易に、社交に、學術研究に、外人の言葉を聞き取り之を話し、之を書くことの必要を感じて來た。政府は中等國民の教育上、語學教授の方針を示すことの適切なるを認めて、中學校令施行規則中外國語教授要旨を發令したのである。これは明治三十四年の事で、即ち獨乙に於て新教授法が法令となつて制定せられて後十年目にして、佛蘭西の文部省がその教授法を採用して中等學校に施行を命令せし年より一ヶ年前のことである。

中學校令施行規則に曰く

「外國語は普通の英語獨語又は佛語を了解し、且つ之を運用するの能を得しめ、兼ねて智徳の増進に資するを以て要旨とす。

外國語は發音・綴字より始め、近易なる文章の讀方・解釋・話し方・作文・書取を授け、進みては普通の文章に及ぼし、又文法の大要及び習字を授くべし」と。

文部省は時勢の進運に鑑みて明治四十四年七月中學校令施行規則中改正を加へて發表した。其の中外國語の各分科に於て授くる事項中注意すべきものを擧ぐれば

Reading 及び Translation

文章の聞き方・読方及び解釋を授く、
話し方及び作文。

話し方に於ては對話・説話の聞き方・言ひ方を授く。

作文に於ては凡そ左の諸例に準じ適宜之を課す。

1. Reading 及び translation 又は talking に於て練習せる事項を應用して記述せしむるもの。
2. 國語を外國語に譯せしむるもの (和文英譯)
3. 記述すべき事項の梗概を授け又は使用する語句を示して之を綴らしむるもの。
4. 課題を與へて自由に之を綴らしむるもの。

書 取

文章を臨寫せしめ又は朗讀して筆記せしむ。

注意 發音は何れの學年中も忽にすべからずと雖も、初期の教授に於て特に注意して正すべし。發音を授くるに際し必要ある時は tongue, teeth 又は發音圖を示すべし。

讀方及び譯解にありては、場合により實物繪畫を用ひ、彼我風俗習慣の相違を説きて英語の了解を助くべし (後半は Realien のことなり。)

以上は特に留意すべき事項なり。

以上の諸項を獨乙・佛蘭西等の中等學校に於て實行せらるゝ New Method に比較すれば、大體に於て餘程一致してゐる。唯僅に異なるところは、獨乙の教授法は譯解を最小限度に制限してゐるのに、我が文部省要目に依れば、各學年に譯解を教ふることである。私は

譯讀を課する現行教授要目を以て日本の事情に適するものと思ふのである。何となれば

1. 日本人が外國語を學ぶは、今猶昨の如く、知識を世界に求むる爲で、歐米の如く自國の出版物のみにて、日進の學術思想を收得することが不可能であるからである。
2. 今日の如き境遇にある我國の語學教師に向つて、歐米の語學教師の如く外國語を自在に運用する能力を期待することは、無理なる注文であるからである。
(但し譯解を教ふるに就いては少くも一・二・三年位までは、本について譯する前に hearing に依つて先づ意譯せしむる方法を以て、最も適切なる教授法と思ふのである。)

他の兩者相一致する點、例へば

1. 全體に通じて發音に重きをおくこと、殊に初年級に於て一層これに注意すること。
2. 讀本を教授の中心として、解釋の外に聽き方・話し方・書き方等を重んずるが如き。
3. 初年級に實物或は繪畫を使用し進んで Realien を教へるが如き。
4. 教師は成るべく外國語を生徒の理解する程度に於て使用するが如き。
5. 既修の材料に基づきて文法に關する一般普通の法則を授くること、即ち文法を歸納的に教ふる事等の如きである。

要するに兩者符合すること多くして、矛盾すること少いのである。故に我邦學校は、文部省の中學校令施行規則中の要目に従つて外國語教授を勵行することを希望するのである。

中等諸學校視察所感

Hiroshima Normal College "Round Table,"
February, 1914. No viii.

(大正三年二月號所載)

我輩は舊職命によりて九州の或る地方を巡回して、約二十ばかりの中等諸學校に於ける英語教授の有様を觀たが、随分色々の感想もあるけれども、諸君の参考の資料となる様なるものは餘り無いかも知れぬ。唯其中の數項を述べて見ようと思ふ。

近時中等學校に於ける英語の教授上進歩の徴候と認むべきもの必ずしも無いではない。書取の成績が以前よりも餘程進況に在ることも其の一である。短文を綴るに稍形式を得るに至りしことも其の一である。文法的説明の次第に精確に近づきしことも其の一である。然しながら随分顯著なる弊風の今尙存在して居るといふことは、掩ふべからざる事實である。試みに其の二三を擧げて見れば

1. 發音と讀方の調子を閑却する事。
2. 讀書科に於ては、動もすれば從來の譯讀萬能主義に傾きて讀方と意味とを別物の如く取扱ふ事。
3. 暗誦の少き事。
4. 分解的説明に傾きて全章の主眼を看過する事。
5. 初年級を輕視して動もすれば無資格者又は發音不良の教師に托する事。

6. 西洋人の利用法を誤れる事。
 7. 統一的教授法を有する學校の少き事。
- 之等は弊風の重なるものであると感ぜられる。然らば

改善の方法

として何か嶄新なる工夫考案等があるかと云ふに、遺憾ながら我輩にあるとは言はれないが、少しく思付くところを御相談して見ることゝしよう。

第一發音と讀方の閑却に對しては

- (1) 文部省が無試験檢定法を取締りて、發音不正確なる人に教員免許狀を下附せざるやう注意して貰ふことである。
- (2) 高等學校の入學試験科目中に發音・讀方を加ふることを本體として貰ふこと。

尤も受験者多數にして實行困難の場合には、入學試験問題の中に必ず單語の讀方・アクセントを尋ぬる問題を加へる事。

- (3) 外國人を使用する學校に於ては、必ず初年級の一部を擔當せしめて専ら發音讀方を練習せしむること。
- (4) 外國人教師の居らざる學校に於ては、發音讀方に長じ且つ教授上の經驗工夫ある邦人教師をして一・二年級を擔當せしむること。
- (5) 中等學校の英語教員をして可成屢々講習會に出席せしめて、その發音讀方の練習をなさしむること。

第二譯讀萬能主義に傾きて讀方と意味とを別物として取扱ふ弊風に對しては

- (1) 一層暗誦を獎勵すること。

(2) 前課の復習をなす時、英語を以て問答する習慣を作ること。

第三分解的説明に傾きて全章の主意眼目を捕捉せしめざる弊風に對しては

- (1) 問答に依り開發的に生徒をしてそれを工夫發見せしむること。
- (2) 聴取により物語の要領を書かしむること。
- (3) 試験問題中に、時々讀みたる文章の中心思想又は大要を尋ねる問題を加ふる事。

第四教授の統一を缺くことに對しては

- (1) 學校長の監督誘導の下に主任教師をして他の教師等と共に教授要目細目等を調製せしむること。
- (2) 教師の打合會を獎勵すること。
- (3) 英語科教員をして時々模範的學校の授業を參觀せしむる事。
- (4) 相互の授業參觀も慥に有效なる一方法である。

之は地方の中等學校に於て或る程度迄は行はれて居る様である。

此の外改善の良法として推薦すべきもの多々あるけれども、財政問題と關聯して實行は中々容易ではない。以上の事柄は比較的實行の困難ならざるものであるから、當局者も賛成し、諸君も異議なければ、今日の狀態を幾分か改善することが出来はしないかと感じた次第である。

學事觀察復命書抄

大正七年五月 文部省

小官は大要次の如く意見を述べたり。

第一、直讀直解の習慣と、其の實力を養成する方法として

1. 毎回前課の復習をなすに當り、其の内容を英語にて問答すること。
2. 主要なる部分を讀み聞かせ、其の意味を言はしむること。
3. 邦語にて大意を述べ、之を英語にて言はしむること。
4. 新教材を聴取にて進行すること。
5. 内容に就き會話を行ふこと。
6. 説明には可及的英語を用ふること。
7. 讀方を繰返すこと。
8. 讀みながら意味を考ふる習慣を付けること。
9. 時々童話類を讀み聞かせること。
10. 教師讀むとき表情に注意すること。

第二、英語學修當初に於ける發音教授に於て

1. 豫備授業約五週間
2. 基語表を作りて練習せしむること。
3. 子音を先にして母音を後にすること。
4. 基語は最も普通にして簡單なる語を選ぶこと。
5. 子音教授約14時間。

6. アルファベット約2時間。
7. 母音教授約14時間を費すこと。

第三、英語教授を初むるに當り、邦語假名の發音と英語の發音との相違を會得せしめ、之と同時に羅馬字を教授する可否に付きて

1. 英語發音と邦語假名の發音とは、根本に於て相違すること。
2. 英語教授の初めより羅馬字假名を教ふるは、將來正確なる英語の發音を害すること。
3. 速成を主とする特種の學校を除きては、羅馬字を教ふるの英語教授上有害なること。

第四、文法教授をして興味あり、且つ有效ならしむる方法として、

1. 成るべく例外の規則を避け、既修材料中より實例を選ぶこと。
2. 抽象の理論定義を先にせずして、具體的實例より入るべきこと。
3. 講義風に流れず、開發的に生徒を活動せしむること。
4. 中學三四年に、各週1時間の文法にて不足なりとせば、五學年に加ふる方効果多かるべきこと。

第五、作文の具體的教授方法として、左の方法を推薦せり。

1. 教材の内容に就きその間に答へしむること。
2. 聴取に用ひし話の内容を綴らしむること。
3. 讀本又は文法にて學びたる文句及び形式を用ひて、邦文を英譯せしむること。
4. 直接法より間接法に、間接法より直接法に變換する法。
5. パラフレーズ。
6. 日記旅行記等の實驗を記述せしむること。

7. 繪畫又は地圖を示して、問答したる後書かしむること。
8. 書翰文の形式を教へて、自由作文を書かしむること。
9. 和文英譯、又英作文に教科書を用ふるの可否に就きては、
 - (1) 若し教科書を用ひずして、叙上の方法にて教授し得ば用ひざるを可とす。
 - (2) 用ふるとせば、毎年問題を變作すべし。
 - (3) 但し實力の足らざる教師は、教科書に依るを安全とすること。

第六、會話につきては

1. 會話は讀本を中心として、問答・暗誦・ダイヤローク等をなさしむること。
2. 但し商業學校の如きは商用上の語句形式を教へて、暗誦又は對話せしむること。

第七、書取には普通の書取の外に數様の方法あり。

1. 視寫法。
2. 一二讀の後記憶より書取らすこと。
3. 讀みて後ち生徒をして、自作の英文にて趣意を書かしむること。
4. 趣意を邦語にて讀ましむること。

砂上の足跡

年代を遡って

砂上の足跡

(年代を追ひて)

國會議員第一集會を祝して一言す

(議會開設當時寄書草稿?小判洋紙、一部鉛筆、一部毛筆)

我が勅聖文武なる 天皇陛下は吾等四千萬の臣民の幸福自由を重んじ、憲法を與へて立憲の政體を組織し、萬機公論に決するの聖旨に基づき、吾人臣民を代表する議員を召集して、一に一般人民の輿望に應じて公平なる國の法を制し給ふ事、實に感佩に堪へず。故に今日諸君と共に此の仁慈なる 陛下の鴻恩に謝し、併せて天壽の長からん事を祈り奉る。

次に我が日本の立憲國と成るの初に於て、其の立憲的機關を運用し藩閥情實の大塊を切斷して、平等公平なる政府を建つるの責任を負ひ、始めて我が邦に適用せられたる立憲政治の經驗を後世に垂れ、百世の標準ともなるべき議員が選舉せられて、今日 陛下の召集に應ずる事は、吾人の大いに慶賀する所である。吾人豈私情よりして祝賀の辭を呈する者ならんや。只之等の責任を盡すべきを信するが故に、之を賀するなり。

然れども翻つて一の考ふべき事あり。吾人は只此の議員に責任を歸して安心すべきや否や。國會議員たるは貴く實に政界の要素なり。其の要素たるの價値に於ては天下幾んど比類なし。内閣の上に座す

目 次

1. 國會議員第一集會を祝して一言す	1
2. 新島先生崇拜者に告ぐ	5
3. 正義と愛	9
4. 信仰に關する愚見	14
5. 立志論	18
6. 漫 録	23
7. 基督復活論	34
8. 我同胞に警告す	42
9. 信 仰	46
10. 臺灣新總督乃木將軍に望む	52
11. 徳教問題と基督教教育	55
12. 教育と宗教	60
13. 渡 歐 記	70
14. 英國のボーイ・スカウトを觀る	84
15. ルーズベルトとカイザルの印象	95
16. 基督教信仰の特色	98
17. 世界の進歩と基督教	103
18. 神戸女學院式辭草稿	110
19. 保羅に就いて	120
20. 婦人の高等教育に就て	126
21. [逸 題]	134
22. 余の體驗を語る	135

る高貴の人も、貴族院の椅子に座する人も、之を彼等の前に置かば、皆遂に其の光輝を失はん。是れ議員の自ら光あるにあらずして、彼等の後に吾人人民なる太陽あればなり。夫れ然り、彼等は人民の反射なり。人民貴き故に彼等貴き所以なり。故に人民にして薄弱なるか。此の人民より出でたる議員は薄弱なる可し。人民にして蒙昧なるか。此の人民が選びし所の議員は無智なるべし。人民にして不道德なるか。此の民の選ぶ議員は不道德なる可し。人民にして姦淫する者なるか。此の人民の選ぶ議員は恐らく姦淫するの議員たるを保す可からず。何となれば太陽暗澹にして月光明かなるの理なければなり。目を舉げて今日日本の状態を見よ。其の財力は如何、其の興業は如何、商業・學問・道德は如何。吾人は興業の振はざるを嘆ずる者なり、商業盛んならず又財力甚だ窮乏するを嘆ずる者なり。然れども嘆じても尙ほ嘆すべきは、今日日本道德の現状なり。已に今日の状態斯の如しとせば、此の日蝕したる太陽より反射して現はるゝは、果して如何なる光景を呈すべきや。吾人は決して日本を以て社會の端より端に至るまで悉く汚れたりとは言はず、悉く腐敗したりとは言はず。只日本社會の全體を大觀して言ふ者なり。故に三百有餘の議員悉く無智・不道德・無經驗なりと言はず。然れども高潔にして溫雅・謙遜にして偉大・謹嚴にして斷行・天真にして至誠なる偉男子の果して多數を占め居るや否やを疑ふ。

吾人は嘗て憲法發布の當日東京に在つて、市民が天長様より憲法を頂戴して有難いとて、殆んど狂人の如く騒ぎ廻るを見たり。花の都だけありて、一般に自由政治の何たるを知り、立憲政體の辱きを

知り居るかなと、心嬉敷く思へり。憲法發布の日より三四日も過ぎて人民稍々正氣に歸りたる頃、運動傍々散策を試みんとて市上を徘徊するに、一團の人群れ、何やら議論めかしき事をなし居るを見て、何事なるかと伺へり。思ひきや、甲曰く憲法様は如何なる神様なるか、乙答へて曰く、さてとよ憲法様とは近頃西洋から新渡りの神様であるさうな、甲曰く成る程面白い、丙曰く、否、憲法様は此の度天長様が吾々人民に下された何やら書物であるさうな、などと喧しく物言ふを聞いて胸を打ちて浩嘆して歸れる友人の物語を聞ける事あり。嗚呼憲法發布を祝するとて三日前に狂奔せし者は、多くは雷同にて、胸中に一物もなき奔走なりしなり、祭典なりしなり。日本帝國の腦髓とも稱すべき東京市民にも斯の如き人種の少からざるを思へば、某地方に於て或る紳士が頻りに代議士の稱號に戀々として、鹽鮭を一尾づゝ家毎に贈りしとか、或は10錢づゝの切符を賣りて50錢の御馳走を約束するの招待状を廻したりとか位の事は、別段珍らしき事にもあらざるべし。其の他賄賂とか何とか八釜敷い事、吾人の鼓膜を打ちしこと枚擧に遑あらず。今日の日本の社會は斯の如き多くの現象を呈出する社會なり。此の社會より反射せし所の三百有餘の代議士は、悉く正義の士なるや、愛國の丈夫なるや、至誠なる學者なるや、卒直なる事務家なるや、博愛なる事業家なるや。余輩は大いに疑ひなき能はず。豈此の同胞四千萬の兄弟姉妹を此の三百有餘の議員に放任して、安閑として理想の立憲自由國を望むべけんや。

蓋し國民の歴史を通觀するに、獨立の氣象の盛衰は、其の國の消

長興亡に密接なる關係の存する事を見る故に、人民にして獨立の氣象薄弱なるか、是れ其の國の文明と獨立の破壊零落の始めなり。而して此の獨立の精神、換言せば純粹無垢なる愛國心は、何處より發生するや。健全なる道徳より出づるものなり、此の健全なる道徳は何處より發達するや。天真爛漫なる宗教より生ずるものなり。然らば天真爛漫なる宗教は何處より生ずるや。圓滿完美の活きたる眞神より生ずる者なり。

『敷島の大和心を人とはゞ朝日に匂ふ山櫻花』

此の敷島の大和、此の蜻蛉洲を高く天に擧ぐる所のものは、吾人の心底に燃ゆる焔々たる愛國の精神なり。而して此の大なる活火は吾人が基督に接してのみ得る事を得可し。

聖書に曰く、凡ての人を敬ひ兄弟を愛し神を畏れ王を貴ぶべしと。又曰く、既に見る所の兄弟を愛せずして未だ見ざる神をいかに愛せんや。神を愛する者亦其の兄弟をも愛すべしと。吾人をして基督に依つて此の活火を燃やさしめよ。即ち學者は其の學問を以て薪炭とせよ。商人は其の商賣を以て、事業家は其の事業を以て、傳導師は其の善行と説教とを以て、政治家は其の政治を、文學者はその文學を、軍人は其の技量を以て、各々其の全力を盡して各々の薪炭を出し合つて、此の日本を燃やしたならば、焔々たる活火は萬丈の光焔を吐いて我が日本の國を輝かし、其の反射する所社會の萬端にまで及ぼし、茲に於てか人民の反射鏡たり月たる所の國會立憲政體は、燦然たる光彩を發揚して東洋の暗黒を照らさん。是れ皇天上帝の吾人基督教青年に命じ給ふ使命なる事を確信す。

新島先生崇拜者に告ぐ

菱洲漁夫

(新島先生一周年紀念會〔明治廿四年〕演說草稿淨書、赤罌紙、毛筆書)
「同志社生徒に告ぐ」を消して表題の如く改めてある。

安子順前出師表の後に評言を加へて曰く 讀「諸葛孔明出師表、而不泣」涙者其人必不忠 讀「李令伯陳情表、而不泣」涙者其人必不孝 讀「韓文公祭十二郎文、而不泣」涙者其人必不友 と。吾人會て出師表を讀んで孔明の雄大なる至誠に感ぜり。陳情表を讀んで李令伯の爛漫たる天真に感ぜり。祭十二郎文を讀んで韓公の濃鬱なる友情に感ぜり。然れども眞面目に白狀すれば、未だ情の溢れて涙潸然たるを覺えざりき。明治十八年、余東京に留學せる頃病を得、靜かに保養を加へんが爲に山梨甲府に赴く。是れ余が最愛なる叔父の年來寄寓する所なればなり。當時彼の家は已に神を信するの族なりしと雖も、余は未だ基督教の何たるを知らざる一介の粗暴漢なりしなり。偶々机上、毎週新報(今の基督教新聞)一葉を見る。徒然のまゝ何心なく取つて之を閲みするに、同志社英學校設立の始末てふ一篇の長文あり。讀み去りて新島襄氏國家紛擾の際、大志を懷抱し、鵬程萬里の遠遊を企て、幾多の辛酸を嘗めて漸く米國に到り、千艱萬難の苦境を凌ぎ學を修め徳を研ぎ、亦篤く神を信じ、米國文物制度の盛んなるを觀、其の大人君子に接し其の議論を叩き、米國文明の決して一朝偶然にして生じたるものにあらず、必ず由つて來るもののあるを知り、而して其の來る所のものゝ偏へに一國教化の敦きよ

り生ずる事を察し、始めて教育の國運の消長に大關係あるを信じ、竊かに一身を教育の事業に擲たん事を決せらる。已にして學成り業終へ、將に歸朝せられんとするに際し、三千有餘の紳士淑女の大集會に臨み、演説壇上熱涙を濺いで平素懷抱する大志を吐露して、私立大學設立の贊助を訴ふ。先生が精神の壯大なる、其の愛の博深なる、其の志氣の豪然たる、遂に滿堂幾千の義士淑女を感動せしめたる所に至り、余や不覺、案を拍つて其の愛國獻身の精神の壯なるに感激して、數行の涙紙を濕せり。余や當時一個の粗暴漢、嘗て書を読んで未だ落涙せるを記せず。而して新島氏が同志社設立の始末書を読んで始めて、數行の涙を濺ぎしもの、豈、尋常軟弱なる一女子の感ならんや。爾來先生を欽慕する、夢寐も嘗ならず。後ち幸にして神を認め、基督を信するに至り、先生の志を戀ふの情益々切なり。明治二十一年夏仙臺に於て、知己なる一外人の家に、圖らず先生に奇遇して、親しく其の溫容に接するを得。當時の喜び想ふ可し。思ひきや、皇天彼を吾儕の心より割き、高く天に召して朽ちざる月桂冠を授けんとは。歲月流るゝが如く心事蹉跎たり易し。吾人は此の頃神戸に於て先生一週年記念會に臨めり……實は大なる待設を以て此の會に臨めり。會未だ終らず、浩嘆長大息す。今其の演説の如きに至りては、細かに批評するの暇なしと言はん。唯余が一片の感慨を聊か陳述して、同志社生徒に望み、兼ねて先生を慕ふ者に示さんとす。

吾人は此の頃デビス氏著す所の先生の傳を読む。先生嘗て曰く、日本人多くは英雄崇拜者なり。此の種の人其の心強硬にして甚だ

馭し難しとす。唯其の崇尊する英雄は之を願使する事易々たる耳。彼等の動くや、其の英雄が固執する説の感情的潮流に伴ふ。自己獨立の觀念に於ては大いに缺くる所あり。崇拜者多くは其の英雄の色を帯び、其の英雄以上に進む能はざるは其の弱點なり。英雄一たび蹉跎して失敗を取れば彼等も亦跡を逐ひ、英雄倒れなば彼等も亦共に倒る。密に我が歴史を検すれば其の事跡歴々たり……。

先生の達觀空しからず、先生死して先生を拜せんと欲する者多し。而して自ら小新島と言ひ、小新島とならん事を欲すと言ひ、一人として大新島とならんと欲す、否、ならざる可からずと云ふ者ありしを聞かず、(余の見聞では。)嗚呼先生一生の事業、蓋し小新島を造らんと欲するの目的なりしや。吾人は決して然らざるを知る。先生曰く、日本人若し英雄を崇拜せんと欲せば、須らく英雄の英雄たる大英雄を崇拜す可しと。而して今や此の教訓者たる先生を崇拜して、自ら夫れ以上に進まんを欲する者少なきを見る。富士山を大なりとして瞻仰する者は最早ヒマラヤ山に登るに叶はざる者なり……。

浮田和民君嘗て英雄崇拜論を著して、國民之友に載せられたり。滔々數千言、日本近來の快文字と云ふ可し。其の一篇の旨意を概括すれば左の如くならん。古今東西の歴史に徴するに、英雄の天下に大事業をなしたるは、能く時勢の眞理を斷行したるに因る。社會は完全の聖域に達せざる可からず、故に幾多の革命を要す。コロンブス、コペルニカスの輩一たび起り、一世の輿論に反して地球中心説を排し、太陽中心説を確定して、近代歐洲人心の革命を促せり。ルーテル、ツウキングリの輩奮然として一世の輿論を動かし、社會の

壓制を破り、法皇中心説を排し、各信徒中心説を確定せり。ペーコン、デカート起りて爾來の古學中心説を排して自然中心説を確定せり。ヴォルテール、ルウソー現出して佛國の大革命を惹き起し、帝王中心説を排して人民中心説を確定せり。以上の四大革命は過去に成就せり。然らば則ち將來に於て亦望む可きの革命あらざるか。現今世界の勢を一觀するに、未だ他の大革命を要するものあり。其の第五の革命とは何ぞや。則ち官權に非ず、國權に非ず、民權に非ず、正に純粹なる人權にあり。各人主權にあり。而して之を全うせんとするには、自己中心説を去りて、上帝中心説を人生終極の目的として進むにあらざれば能はず。斯かる非常の大事業將に來らんとするの時に當り、眞の英雄豪傑出でざる可からずと。

日本の要する眞英雄は斯の如き英雄なり。新島先生教育の大目的亦是れにあり。同志社設立の大眼目亦是れにある可し。而して是れ同志社の成功する所以、先生の志望貫徹する所以なる可し。嗚呼兄弟よ、小新島となる勿れ、大新島と成れよ。……常に遙に天の一方を仰ぎて彼の完人物を觀よ……兄弟よ、無限の大望を抱け、而も高潔なる心底に抱け。徒らに高樓巍峨たる大學講堂の成就するを以て満足する勿れ。人は言ふ、同志社、人多くなりて人少くなれり、草葺教場の人賑かにして煉瓦講堂人甚だ稀なりと。余は之を齊東野人の語と信ぜん事を欲す、信ぜん事を欲す。

余、覺えず激言せり、希くは恕せよ。余は兄弟を非難せんが爲に非難するに非ず、實に新島先生を敬し、同志社の兄弟を愛して、將來に囑望するの大なるが故に、日本の前途を思ふの情禁する能はざ

るが故に、言ふなり。若し夫れ、之を讀んで區々の言譯を試むる者は未だ余輩の心事を悟らざる者なり。

新島先生一週年記念會に臨み歸路寒月をながめて、

久方の月も君をや惜むらん

見れば悲しき光なりけり

正義と愛

[明治廿五年三月六日]關西學院にて(宗教講演草稿、野紙毛筆書)

エメルソン歌ひて曰く、何人が戦ひ何人が倒るゝも、正義は遠へに勝ちて變はる事なし。正義の味方に戦ふ者は、假令十たび百たび屠らるゝとも、神之に勝利の冠を與へんと。然り、正義の向ふ所天下何物も敵する事能はず。楠正成湊川の戦に自刃したる時、吾七たび人間に生れて此の賊を亡ぼさんと言へり。彼は肉體的に七たび生れたる事なしと雖も、精神的には十度百度も再生して遂に逆賊を亡ぼせり。然り正義は永遠に強し。然れども正義は凡てに非ず。單純なる正義は常に人を動かすものにあらず。却つて往々人を厭かしむる事あり。故に常に天下を動かさんとし、人を動かさんとせば、尙他の大勢力を加へざる可からず。

紀元前490年の頃、波斯の大王ダリオス希臘の雅典を征服せんとしてマラソンに敗れ、英氣を養うて再び進撃を試みんとせしが、急に病んで死す。其の子サーキッセス王位を襲ぎ、其の事業を取れり。此の頃雅典に二人の有名なる志士ありて互に防禦の策を講ぜり。一

人は常識に富める才人セミストクルス、そして一人は純粹なる愛國家たれども、寧ろ頑固執拗と云ふ程に正義を執りしアリストアイデスなり。彼はこれ故に、正義アリストアイデスと云ふ綽名を得たりき。然るに此の二人は防禦の策に關して互に反對の意見を有てり。セミストクルスは熱心に主張して雅典は全力を傾けて波斯の進撃に當るの準備をし、特に海軍を組織すべしと云ふ。アリストアイデス大いに此の政策に反す。茲に於て二人の間に競争久しく續いて解けず。アリストアイデス遂に流竄に處せらる。蓋し是れ當時雅典に行はれし習慣にして、斯の如き競争に際し人民投票を以て流竄に處せらるべき人を定むるの法なり。アリストアイデスは平生執拗なるまでに正義を固執せし人なるを以て、彼を怨みし者多かりしなり。投票の節、一人の文字なき者、其の人なるを知らずして、傍に立ちしアリストアイデスに吾が爲にアリストアイデスの名を書き玉へと乞ふ。アリストアイデス其の人に向つてアリストアイデスは君に何の悪事を爲せしや、其の故を聞かせ玉へと曰ふ。否、否、彼は何の悪事を余に爲したる事なし。然れども吾は常に正義と呼ぶる、彼の名を聞くに飽けりと言ひしとぞ。愛なきの正義は往々人をして荒涼蕭殺の思を爲さしむ。力めて律法的の正義を行はんとする時は、屢々人をして偽善的儀式的のものとならしむ。即ち猶太の驕傲偽善なるラビ、或はパリサイ人を生ぜしめたる所以なり。

儒教は多くの眞理を含蓄し、多くの賞すべき禮儀を教ゆ。然るに彼の支那をして、數千年間沈滯萎靡の狀態に在らしめ、一步を進めて十九世紀の文明世界に仲間入りして共に其の光明に與る事なから

しむる所以は、果して何ぞや。ローリング・ブレン著はせし『ゲスタ・クリスタ』中、儒教失敗論に其の大原因を論じて、儒教が宗教的元素を缺ぎ、特に壯なる獻身的精神即ち眞正なる愛を缺ぐの故に歸せり。

古より基督教外の道德教にして希臘の哲人ゼノが開きしストイック教ほど賞讃すべき教は甚だ少からん。然れどもゼノは甚だ智慧と意志とに重きを置き、極めて情を輕蔑せり。故に仁愛慈悲の徳を缺けり。ストイック派の人が一つの天然痘の流行する村に來りて、人民家を鎖し交際を絶ち、病人は棄てられ、母は其の子の爲に泣くと云ふ有様を見れば、之を治療するの道を講ぜずして、天然痘は悪きものに非ず、賢き人には病も死も不幸も朋友を失ふ事も、決して禍にあらずと教ふ。又破船せる商人に逢へば、潜水器を以て其の沈める荷物を揚げよと教へずして、却つて此の世の財は頼むに足らずとて其の經文を暗誦して聞かせるなり。これ故に英語にてストイックと言へば、無情冷淡の人を指すの言葉となれり。斯の如き道德教は決して永く社會を支配する能はず、遂に他の多くの不完全なる教へと共に滅亡せり。

人を動かすは單純なる正義にあらずして愛なり。

或る所に大酒家あり。精出して得たる金は悉く酒に投じ、妻子の事も一家經濟の事も少しも顧みる所なし。妻子は益々饑餓に迫り行くのみなれば、妻は切りに夫に意見すれども、絶えて聞き入る様子なし。却つて妻の意見を嫌ひ、遂には大いに怒を發して之を打擲せり。されども妻は之を忍び、尙夫を愛するの情切なり。一夜妻は満

腔の愛を注ぎて夫を諫め、禁酒會に入らん事を勧めたり。夫大いに之を怒り、嬰兒を抱き居りし妻を戸外に逐ひ出せり。時恰も霜月の中頃にて、雪は紛々として降り亂れ、北風凜冽嘯を裂くの寒天なり。母子の苦言はん方なし。母は其の子許りも家に入れんとて、戸を打つて呼び求むると雖も更に聞き入れず、仕方なく戸外に佇みしが、寒氣骨まで徹して母子共に倒れけり。夫は酩酊のまゝ寝ねて一夜を明かし、目醒めて家内を見るに妻も子も見えず。如何なる故ぞと戸外に出づれば、わが妻子二人は降り積る雪の中に死せるを發見せり。驚き悲む事限りなし。昨夜酩酊して怒りの儘戸外に逐ひ出せし事を思ひ出し、酒の爲に妻子二人を殺せし事を知り、斷然酒を廢する事を決心し、深く前非を悟りて善良なる人となりしと云ふ。諸君は又、ハイランドの寡婦が雪の嵐吹く山路にて己の身を捨て、嬰兒を岩間に入れて救ひしが、其の子成人して病に死せんとしたる時、己の母の獻身の愛よりキリストの愛を悟りて、千代の岩間に救ひを見出せし話を知らるゝならん。

人を動かすものは愛なり。

正義は秋霜烈日の如く人近づき難し、愛は春風駘蕩の三月の如く人化せられ易し。加之、吾人をして正義を實行せしむるは愛の力なり。吾人は常識にて正義の何たるを知る。然れども天下の爲に之を行はんとて常に能はざるなり。何となれば吾人の内には此の正義の精神を壯んらしむ可き動力なければなり。如何にして何處より之を得べきか。鑛物は如何にして植物となるや。植物の生命に接觸すればなり。植物は如何にして動物となるや。動物の生命に接觸すれ

ばなり。斯の如く吾人が眞正の愛を得るに至るにも、吾人より高等なる生命に接觸せざる可からず。ヨハネ曰く、神の子を有つ者は生命を有ち、神の子を有たざる者は生命を有たず。ポーロ曰く、義人の爲に死する者なし、仁者の爲には死する者もやあらん、されどキリストは我等の罪人たる時我等の爲に死に玉へり。神は之に依つて其の愛を顯はし玉ふ。

ポーロは初め熱心なるパリサイ宗徒にして固く律法的の正義を行はんと力め、寧ろ嚴格無情と云ふ可き人物なりき。故に多くのユダヤ人が起てステパノと言争ひ、其の智慧と靈の力に敵する事能はずして、民と長老學者等の心を動かし、突然來りて彼を捕へ、集議所に曳來り妄りの證人を立て、彼を訴へし時、ステパノは天使の如き面を以て彼の有名なる演説を爲しけるが、衆人之を聞いて大いに憤り切齒し、遂に彼を邑より逐ひ出し石をもて之を撃ち殺したり。當時ポーロは傍にありて凡て之等の事を目撃せしが、ステパノの殺されしを好とせり。彼は斯の如く強情無慈悲の人なりしなり。然れども一旦イエス・キリストの愛に感ぜし時は、彼は豪宕不羈の精神に加へて熱愛熱腸の人と變じたり。若し我が兄弟吾が骨肉の爲ならんには、或は沈倫に至らんも亦我が願ひなりと絶叫するに至れり。ポーロ又曰く、キリストの愛より我等を絶らせん者は誰ぞや。患難なるか、或は困苦か、迫害か飢餓か、裸か、危きか、刀劍なるか、然れども我儕を愛しめる者に頼り、すべて之等の事に勝ち得て餘りあり、そは或は死、或は生、或は天使、或は執政、或は有能、或は今ある者、或は後あらん者、或は高き、或は深き、また他の受造者は、我

等を我が主イエス・キリストに頼れる神の愛より絶らす事能はざる者なるを我は信ぜり。(ロマ書8:35—39)

吾等は宜しく先づイエス・キリストの愛に勵まざるゝ様祈るべきなり。昔の人の歌に、祈りても效驗なきこそしるしなれ、祈る心に誠なればと。此の誠を以て聖靈を祈るべきなり。

信仰に関する愚見

(宗教講演草稿、年月不詳、罫紙、鉛筆書)

余輩、往々過去の時代に於ても當代に於ても、基督教社會に信仰の浮沈あるを認む。其の原因種々ある可しと雖も、學術界の波瀾は又其の原因の一つなりと思ふ。而して特に此の忙はしき思想海の波瀾中に生れたる吾人は、此の繁雜なる理學的哲學的批評の潮流に立つ吾人は、如何にして宗教上最堅最確なる信仰を、常に安全に保持するを得べきや。是れ吾人は今日宗教界に於て確定すべき唯一最要の問題なる可しと思ふ。而して余は斷じて先づ事實的に歴史的に基督教の眞理を確認抱持するを以て最も安全なる錨なりと信ず。其の理由何となれば、理論は時代により時により人によりて變ず可しと雖も、事實は永遠不變なればなり。コロンバス世界の圓體なるを信じ、歐洲より西方に航海せば遂に印度に達する航路を發見するを得べしとて、西班牙王に説いて船艦及び資本を借らん事を乞へり。即ち王は全國の學者博士を悉く宮廷に召集し、コロンバスの言果して信すべくして船と資本を給與す可きや否やを問へり。之等學者一人

としてコロンバスの言を信するものなく、剩へ彼を無學と呼び、否瘋癲者なりとして嘲弄非難せり。コロンバス終に女王の助けを得て、一大陸を發見して前の博士等大いに自ら慚づるに至れり。コペルニカスは1500年間世人が一般に信じたりし地球中心説の妄談不經を發見せしが、吾が説を公言するを懼れ、ガリレオ其の後コペルニカスの學説を採用して種々の天文學上の發見をなせしが、二度法廷に拘引せられて彼が主張する地動説を棄つべしと強ひられたりと云ふ。而してコロンバスの非難せられし地球の圓體、コペルニカス、ガリレオが抱持せし地動は嘗て非難と強迫の爲に變ずる事なし。是れ理論は時代と時と人によりて異なるべしと雖も、實際の事實に變動なきを示す。

己が思辨臆説を先にして事實の考察を後にするが爲に、疑惑は時々思想界に起り來り、その疑惑の爲に直ちに事實上の眞理を否定し、或は眞理に達するを得ずして失望落膽する者世間には多くあり。余も其の一人なりき。初め基督教を信するや、徒らに理論にのみ據る事多くして歴史的眞理として確認せし事淺かりしが故に、中途に有神論・原因結果論・心身關係論等に就き、種々の疑惑起り來るや否や、忽ち聖書に記載する歴史上の事實は悉く疑はしくなり、信仰漸く墮落して殆んど過ぐる二年間は空しく懷疑海に漂ひ風波に艱み、神なく宗教なく救なく、此の廣大なる宇宙に於て最も憐む可き最も不幸なる鬼と化せんとしたり。思ひ出せば戰慄に堪へず、噫一感謝す可き哉、神は遂に磁石と錨を余に與へ玉うて、安全なる航路に導かるゝを得たり。

斯の如く吾人が單に理論を以て、哲學を以て、基督教を疑ふと同時に屢々信仰の浮沈を來すは、是れ基督教が先づ事實に基して理論之に伴ふものなる事を悟らず、只理論を以て其の信仰を支配せられし事實上の眞理たる事を忘却するによる。若し吾人にして先づ事實的に歴史的に確認し居るならば、何ぞ此の變り易き思想と信仰の浮沈を共にするを要せん。故に信仰の順序は斯の如くなるべし。

第一、事實上即ち歴史上の確認

第二、之に隨伴する理論的哲學的の認識

第三、第一第二の結合より來る完全なる信仰

以上の眞理は甚だ見易くして、甚だ氣の付き難く又忘却し易し。

今日世間に於て、日本に於て、否、或は此の集に於ても、此の事に氣附かずして信仰上煩悶失望に在る人なきにしもあらざる可し。而して特に學生及び事實に疎き思辨家・冥想家にあるべしと思ふ。

余はそれ等の人に切に勸む、先づ凡て思辨空想的の疑惑を棄て、基督教は果して歴史事實的の眞理なるや否やを確められん事を。而して之を探らんとせば聖書に行く可し。余は聖書記者が一言一句神の默示を得たるか、或は今日吾人が受くる聖靈と同じ感動を以て記したるものにて、一言一句までも默示を蒙りしものにあらざるや否やを知らず。されど心を虚うし思を平にして卷を開きて、創世紀の初より新約書の終末まで通讀せよ。特に四福音に於ける基督の高尙なる教訓と完全なる品性を玩味せよ。而して其の著述の着手より完結に至る迄の年數長く、著者の數多く、彼等に學者不學者の異なるあるに拘らず、一主眼の全部を貫徹し、神の企圖の相順應してある

事、其の記事の有體正直なる事の其儘に顯してあるを見よ。又其の微々たる一小冊が、此の廣大無邊なる宇宙萬有、此の無量なる人生の歴史至情を釋き穿つて洩す事なく、其の神通の力を以て人類を感化し、無上の幸福安心を得しむる事等を味はふならば、爛漫たる其の理の確證綽然として餘りあるを認めん。羅馬從來の歴史は種々の妄説ありしが、大約百年前(?)ニールと云ふ歴史家ありて各國の歴史を改良せんとし、羅馬歴史中の妄談を除き、又希臘の歴史をも同様に改良せり。然るに此のニールは嘗つてペルシャ王に向ひ、余は基督神性の事實の爲には首を斷頭臺上に置く事を肯んず可しと言へり。嗚呼、謹嚴なる歴史家が基督神性の事實を確認する事斯の如し。

一旦基督教の事實的眞理たる事を確認したる後は、哲學的に或は科學的に教理を研究する事最も適當なる方法にして、敢て忽にせざらん事を要す。而して理論的に疑はしき解し難き問題山の如く湧き來るも、毫も己が信仰上に風波を起す事なく、常に安全なるを得べし。

之を要するに、吾人宗教上の信仰に於て歴史上事實的認識と理論或は思辨的認識とを區別し、其の各自本領の境界を判然ならしめ、且つ重きを事實に置け。若し其の境界を曖昧ならしめ重きを事實に置く事なくんば、吾人が免れざる理論的哲學的の疑惑波瀾は忽ち他方の範圍に侵入し來りて眞の宗教上の信仰を妨ぐ可しと云ふにあり。

立志論

(年月不詳、寄書原稿、赤罫紙、毛筆書)

人は希望の動物なり。人生希望なくんば死灰枯木の如く趣味なく生命なし。故に希望旺盛なれば其の人趣味多く元氣充盈す。而も人間の中最も希望の旺盛なる時代は青年に如くはなし。試みに今日學校に學ぶ青年に就きて、「君は學問をなして如何になす積りなりや」と問はんか、余は政治家たらんと欲す、余は學者たらんと欲す、余は醫師たらんと欲す、余は武人たらんと欲す、余は事業家たらんと欲すと答ふべし。而して其の希望の強く盛んなる度に比例して青年は着實にして學業の進歩著るし。後世畏るべきは斯の如き青年なり。余は諸君が愈々努力して其の希望を實にせられん事を切望して止まず。

然れども諸君は各々政治家たり、學者たり、事業家たり、武人たるを以て満足すべきか。是れ人生の半面のみ。人間は各自更に高尚なる大希望なくんばあらず。蓋し人間とは本來實に高貴なる動物なればなり。サー・ジョン・デービス曾て人間の高貴なる事を歌つて曰く、

おゝ人類の大なる造主よ。爾が斯くまでに尊敬を致し、斯の如き輝ける靈魂を以て其飾となし、之を一箇の王となし天使の同僚と成らしめ玉ふ所の人間なるものは何者なりや。……爾は御手の業に成れる他の造られし物にも爾の印を銘し玉へり。然れども

爾は汝の全き姿を人間に於て書き玉へり。彼は此の祝福を人に與へて唯一日にして消え失するものと爲し玉はず。靈魂は時間の中に造られたれども生きて永遠に存し、始めあれども其の終りなきものなり。

然り、人間の此の世に在る意味は、東の間に消えて跡なく過ぎ去る功名富貴逸樂を捕へんとする爲に非ずして、神の姿を印せられたる人格を鍛錬して、天に對して恥づる所なき真人となるに在り。換言すれば、人は人たらんが爲に生活するものなり。此の理想なくんば人は實に卑しき者と成り下るなり。政治と言ひ、武と云ひ、學問と言ひ、人間の最後の目的を成就せんとする手段に外ならず。故にグラッドストンの如き政治家は言へり。政治の終局の目的は人生をして更に善を行ふに易からしめんとするに在りと。伊太利近世の偉人マッヂニーの如き政治家も殆んど同一の考へを有せり。彼謂へらく、政治上及び社會上の改革は改革自身が目的に非ず。唯だ道德上の改良に進むの方便として必要なるのみ。労働時間の減少・賃銀の増加・選舉權の擴張・法律の平等、是れ皆望ましき事なり。道德上の改良を進むるの方便と爲るが故に望ましきなり。蓋し理想の政治は人間の教育を目的として其の道德の發達を全うせしめんとするに在り云々。ワシントンは大なる武人なり。然れども彼の武の目的は我が權勢を張らんが爲に非ずして、同胞の道德的發達を自由ならしめんが爲なりき。見よ、此の高尚なる理想なくして政治家たらんとする者は所謂政治屋と成り下り、學者は徒らに學問を賣り世間に阿る幫間と成り下り、事業家たる者は私慾の奴隸と成り下り、武人た

る者は傲慢残忍なる軍人と成り了る。吾人は毎日新聞紙上に見る此の頃の政界の腐敗・社會及び個人の墮落は其の淵源する處茲に在り、今日の政治家・教育家・事業家其他は、不幸にして人生の理想を知らずして誤れるのみ。

然らば吾人は如何にして人生の理想を學ぶべきか。誰に就いて之を聞かんか。歴史有りて以來完全なる人生の理想を最も明かに示したる人なし。釋迦・孔子・ソクラテース・プレトーの如き聖賢は稍々光明を與へたり。然れども彼等は皆カーライルの言へる如く“broken lights”のみ。即ち不完全なる切々の光なりき。キリスト人々に命令して曰く、汝等夫の父の全きが如く完く成るべしと。是れ實に空前絶後の理想にして人間の最高目的たり。而してキリストは抽象の教訓や哲學を以て教へたるのみに非ずして、自ら理想的の生涯を送りて活ける模範を示し玉へり。キリストの人格は太陽の如く聖賢の人格は星の如し。地球太陽に面したる時は群星其の光を失ひ、地が太陽に背きて始めて星宿其の光を放つが如く、古今の聖賢キリストと並ぶ時は殆んど見るべき光彩なし。唯太陽の輝かざる時代に於て僅に人世の暗黒界を照らしたるのみ。

ナポレオン謫せられて聖ヘレナ島に在り。一日侍臣に向つて嘆じて曰く、余や曾て志を得て歐洲天下に霸權を握りたる時は人皆我前に伏して我を尊敬せり。然れども一旦武運拙く失敗して此の孤島に流竄せらるゝや、殆んど一人として敢て我が爲に死せんとする者なし。然れども彼のキリストを觀よ。彼は時代の人々に迫害せられて十字架上屈辱の死を遂げたりと雖も、爾來甘んじて彼の爲に死する

者幾萬なるを知るべからず。嗚呼、偉なる哉。基督は實に神の子なりと。

使徒約翰曰く、未だ神を見し者なし。唯だ生み給へる獨子、即ち父の懷に在る者のみ之を現はせりと。基督は人間の貌を以て現はれたる神の姿なり。故に其の品性を見るは即ち神の品性を見るなり。

次に來る問題は、斯の如き人格は大は大なり。斯の如き理想は高尚なるに相違なし。而も是れ吾人の達し得べきものならんや。人間には餘りに高過ぎたる希望にして到底無益の勞なりと云ふ考へ起らん。げに其の嘆聲は甚だ起り易し。自ら顧みれば幾多の罪惡を犯して吾人の生涯は失敗と罪とに充てり。豈、唯既往に於て然るのみならず。現在に於ても惡念邪慾は屢々襲ひ來りて我を擒にせんとする勢あり。如何でキリストの如き高潔なる人格を學び得んやと。是れ唯だ吾人の經驗のみに非ずして、保羅の如き人物すら等しく實驗せる所なり。

我内なる人に就いては神の律法を楽しめども、我が肢體に他の法ありて心の法と戦ひ、我を虜にして我が肢體の中に居る罪の法に従はするを悟れり。噫我困苦める人なる哉。此の死の體より我を救はん者は誰ぞや。是れ我儕の主イエス・キリストなるが故に神に感謝す云々。

保羅の如き、他人より觀れば道德上宗教上の律法を實踐躬行して一點の罪惡を發見する事能はざる如き人物すら、尙然り。況哉吾等に於ておや。然れども保羅の言へる如く、吾人も亦此の死の體より救はれて次第に基督の潔き品性に進むを得るが故に感謝すべきなり。

基督は一面に於て道德上の理想たると共に、他面に於て神の力たり生命たり。故に高き理想を掲ぐると共に、之に登るの動力を吾人に與ふる者なり。吾人の既往の罪惡大なりと雖も、今も弱しと雖も、決して絶望すべからず。

有名なる神學者オーガスチンは三十歳迄品行修らざる人なりき。十六歳迄は最も放蕩無頼を極め竊盜をさへ行へりとぞ。十九に及びて笈を負ふてカルセージに遊びしが、放蕩は止まずして實に母モニカの心を痛めたる人物なりしが、母の誠實なる信仰と神の導きとに依り、遂に大いに感ずる所あり、志を決して罪を懺悔し基督の救ひを求めて、全く生まれ變りたる人間となり、遂に一世の義人、卓絶せる神學者と成れり。

實に基督は吾人の理想たるのみならず、吾人の救罪者なり。靈の能力を與ふる者なり。斯くして保羅も聖徒となり、放蕩無頼なるオーガスチンも悔改めた義人となれり。吾人も亦謙遜なる心を以て罪を悔ひ、神の子キリストを信じて止まずば、其の能力を享くるを得ん。

漫 錄

明治廿六年十月ヨリ (抄録)

(赤罫紙小形帳簿)

沈 想 錄

菱 東 洲 (題屏)

常に心を其理の討尋と濟民の大業に用ふ可し之無くんば汝の一生は何の益かある

明治廿六年十月初旬書 (題屏裏頁に比較的大字にて銘言やうに記さる)

敬虔にして倦まざること

變らざる愛

公 平

主義を確持すること

批評を懼れざること

勇進すべきこと

言葉よりも行を先にすべきこと

天真爛漫なる可きこと

謙遜にして喜んで人に役ふること

同 情

勤勉にして怠らざること

思慮深きこと

機に後れざること

悠々自適の心と平静なる判断

『ヒューマニター』の心、愛國の精神

キリスト・イエスの意を以て意とせば凡て以上の諸徳は自然に具備すべし。

大主義を貫徹せんが爲には甘死の覺悟を常に持つこと

余竊かに惟ふに義侠の精神に乏しきを感じ、己之を缺くが故に従つて他人に斯の如き美德を勧むること甚だ弱し。自ら忸怩たるなき能はず。今より後ち神に祈りて大に此の徳を養成せずんばある可からず。人義侠の精神旺なるなくんば恰も枯木の如し。死灰の如し。脳中に百萬の書籍を充たすも何の要かある。

他人の忠告と注意は感謝して受く可し。然れども己の省察の至らざるよりして、常に人後に墮若たるは宜しきことに非ずと思ふ。

吾が本心時に余を戒めて曰く「汝は貴族的の思想に支配せらるゝことなきか。人宜しく犠牲の念を有す可し。而して貴族的の思想は獻身の觀念と調和するや。汝自ら惟ふ可し」と。

余を警戒し、余を直諫する人は凡て余の最も貴ぶ可き師なり。斯

の如き人に對しては絶へず敬愛の心なかる可からず。若し狹隘自ら持すること頑ならんか、余は既に道を楽しむ人に非ず。丈夫須らく人を容るゝこと斗の如くなる可し。

日本國民は偉大なる國民とならざる可からず。偉大なる國民と爲らんと欲せば堅實不拔の氣象なかる可からず。而して神經過敏は此の氣象を維持するに最も困難なるものなり。神経の健全を欲せば體育を重んじ國民をして堅實肥大なる身體を有する者と爲さざる可からず。

明治廿六年十一月十六日

十一月十七日

一個人の思想は其の氣風性情を形造る如く、國民の中に勢力を有する思想家の思想は其の國民の氣風性情を變ずる動力と爲る事疑ふ可からず。ロック英國に起りて近代唯物論の首唱者と爲り、ヒューム之を襲ぎ、後ち、佛國に渡りてコンデラック、ヘルヴェテオスの徒之を祖述し、ルーソー、ヴォルテール等の文學者を感化し革命の素地を成せり。無形の思想社會を動かすこと、實に莫大なるものなり。誰か哲學者思想家を以て社會に迂遠なりと云ふ乎。日本今日の政體の現状多くは佛國革命の餘波ならずとせんや。

十九日

余此頃少しく敬虔の念乏しくなるを感じ。敬虔は余の生命なり、元氣なり。余は神と共に常に歩まんことを希ふ。

人に無限、永遠等の觀念を與ふる原因の一は仰いで常に無邊幽遠の宇宙を見ることなりと思ふ。

(十一月) 二十五日

余は友誼を重んぜんとする者、而も朋友に消息を通ずる事を怠るは是れ友誼を重んずる者の行に非ず。『朋友』汝の名は如何に優にして美なる。朋友に就きて考ふる時に沙翁の言を聯想せざるを得ず。

Those friends thou hast, and their adoption tried,
Grapple them to thy soul with hoops of steel....

十七世紀英國革命と十八世紀佛國革命とは各々顯著なる特色を有す。英の文明は改革の潮流に流れ、佛の文明は革命の潮流に流る。

蓋し兩國の文明各々斯の如き特徴を現はす所以のもの、必ず大なる原因なくんばあらず。英國革命は建設的自由精神に起り、佛國革命は破壊的自由精神に起れり。同じく革命なり。然れども其の眞髓を探れば、一は信仰にして他は懷疑なり。一は有神主義にして、他は無神主義なり。一は義務の心にして他は快樂主義なり。

試に英國革命時代の文學者を見よ。ミルトン、ゼレミー・テール、バンヤンなり。而して佛國革命時代の文學者はモンテスキュー、ヴォルテール、ルーソー等なり。

(十一月) 廿八日

事を終らば三度び(少くとも)之を検すべし。近頃余の行ふ所多くは缺點の伴隨するあり。是れ蓋し余の注意觀察の行届かざるに依る。今より後此の習慣を養成して誤を爲す事無きに至らん事を要す。

左に録する松陰の言大に余を感發せしむ。

天下の事區々人工を以て成敗するものにあらず。公明正大白日十字街頭を行くが如くすべし。死生を度外に置き唯爲す可きを爲し言ふ可きを言ふのみ。

余は今修養すべき時代にあり、而して余の學問甚だ進まず、却て後進青年の後に瞠若たらんとするが如き感なくんばあらず。勿論余は隨分繁雜の地位に在るが故に、勉學是事とする能はずと雖も、組織順序を立て、事をなせば、今日よりも一層時間を利用する事能はざるにあらず。古來大業を立て深遠の學に造詣せる人、吾よりも繁雜の局に當りし事多きに非ずや。吾も人なり、彼も人なり。

十二月十四日

人は謙遜と威嚴とを持つべきものと思ふ。相當の權理を有せずして徒に外に威嚴を装はんとする時、是則驕慢と稱する者なり、僞善と呼ぶべきものなり。然れども假令相當の權理を持つが故に我が威嚴を失はざらんと勉むる時に於ても、屢々謙遜の美德と撞着する事

あり。威厳と謙遜如何にして調和す可きや。吾人平生の實驗は實に此の衝突を證して餘りあり。聖書に爾曹凡ての人を己より勝れりとせよと教ふると雖も、實際車夫に向て貴君とか卿とか云ふ代名詞を使ふ事能はざるに非ずや。又凡ての知人に向て吾より先じて敬禮を行ふ事能はざるにあらずや。然らば謙遜の眞實の意義は那邊に存す可きや。其の範圍は如何なるものなりや。余元來謙遜の美德を瞻仰する者なりと雖も、未だ威厳との調和を悟り得ざるが故に常に惑ふ事多し。余己の地位の威厳を失墜せざらん事を欲して行ふ時、傲慢の心事より出でしかの如く見らるゝ事あり。又斯く己にも見ゆる事あり。蓋し是考ふ可き好問題と思ふ。

十八日

過日友人明石君と野外散策を試む。時に談戀愛の事に及んで會話一段の興味を覺ゆ。歸路松林影を斜にして晝猶寂寥たる所、一軒の茅屋を過ぎる。余曰く『渠』と共に在らば此家余の爲に至樂の天國なるべしと。明石君曰く、余は戀愛の爲に生活の便利を犠牲にする能はずと。吾首旨する能はざりき。王侯、宮殿の美も吾戀愛を移すこと能はざるなり。然れども余の戀愛を以て必ずしも天縁なりと獨斷せざる可し。若し神の添はせ給ふものならば人之を離す事能はざる可し。余は唯神意に服從せしのみ。

二十八日

余が此頃急激の變遷を忌むの心は、進取勇往の精神を滅殺して萬事に於て受身の地位にのみ立つ様になりし感あり。是れ甚だ宜しからず。男兒一度始めば斃れて後已而矣の氣概なくんばあらず。

冷靜なる判斷は余に明かなる智慧を與ふ可く、進取の勉強、勇邁の活動は余に進歩と満足を與ふ可し。而して余の慎んで避く可きものは熱然せる腦髓と、一身の苟安と、同情を缺ける心情となり。

明治廿七年一月元旦

今年は新春を迎ふるに別に奇異なる感慨なし。蓋し年始に當りて事新しく決心するの必要も感ぜざればなり。否本年は例年の年首の如く随分豫想し、豫決す可き事無きに非ず。唯徒らに決意し徒らに後悔するの愚なるを觀じたればなり。輕想と沈黙——發言と實行——沈黙と實行の優れるに如かず。

十八日

吾人は凡ての人に對して何故に謙遜ならざる可からざる乎。人は縱令樂園清高の地位より墮落せりと雖も、全く其の神像を失へるに非ず。各人の有する良心は實に其の神性の陳迹を證して餘りあり。故に人は神の子なり。惡魔の子に非ず。吾人が他人を敬愛すべきは、其の惡魔の子に非ずして神の子たるが故にあり。其衷に神の像を印するが故にあり。吾何の特權ありてか神の子を誇り或は卑しめん。人に惡あるか、敬愛の心を以て之を諫戒す可し。是れ其人の衷に隱蔽せられたる神像の光耀を發揮せしむる所以なり。故に吾

人は奴婢に對しても亦敬愛の念なくんばあらず。

Every man has *something precious* in him—an *image of God* by whom he was created. We must bow before it.

(一月) 廿七日

宗教道義の衰へたる社會に於て時に絶妙の美術現はるゝ事あるが故に、學者或は説をなして宗教と美術とは調和一致する者に非ずと言ふ。是未だ幼稚の論と云はざるを得ず。余惟ふに國亂れて忠臣現はれ道義地に墮ちんとして豫言者起るが如く、宗教衰頹の世に於て神聖なる美術の觀念を備ふる僅少の美術家が一齊に憤慨し、其高潔なる理想を發揮せんと欲し、經營慘憺遂に高絶壯絶の美術を創造するに至るにあらざるか。余は卑陋なる美術家が神韻人に逼るの美術を創發し得べしとは信ずる事能はず。

二月十七日

品性の修養は何處に在るも爲し得べし。吾人の神を拜すべき所はエレサレムに非ず、亦ゲリズム山にもあらず。靈と眞とを以て祈らば神は豊に其の生命の水を吾に灌がん。ダビテはベツレヘムの牧場より起り、キリストはナザレの寒村に生長し給へり。吾人の發達する所以は神に求めて光明を受け、眞正の勇氣を以て之を實踐するにあり。勇氣なる哉。勇氣なる哉。

(二月) 廿五日

余は責任を思ふ事甚だ淺し。余は茲に幹事の職にあり。幹事の任たるや、事務を整理し又は寄宿舍を觀察するに止まらざるべし。學生の志氣の消長、正氣の汚隆を看破して、其の動機たる宗教的生命を灌ぐ事、最も余の力むる所たらざる可からず。然れども人を動かさんと欲せば自ら動かざる可からず。即余は神に祈りつゝ凡ての善事を實踐して活ける模範を之等の兄弟等に示さざる可からず。主よ願はくは吾を助け給へ。吾をして喜んで爾の法を行ひ爾の僕等が吾が双肩に負はしめたる責任を竭くして彼等の厚意に報ふる所あらしめ給へ。主よ爾は僕の困くるしみを知り賜ふ。聖意を吾に示し賜へ。主よ明朝より直接、間接の義務に向て全力を盡さしめ給へ。今は就尊に臨みたれば、確信と輝ける希望とを以て眠に入らしめ給へ。(午後十時の鳴鐘を聞く)

余の切に求むる所は八面玲瓏たる品性と「ヒユマニター」の爲に全身を獻ぐるの博愛となり。

六月十七日

大膽は男子の大なる徳なり。眞正の大膽は如何にして養ふ可き。佛者の如く寂滅を觀じて之を得る事あらん。宿命論者の如く宿命を信じて之を得る事もあらん。然れども是れ消極の大膽なり。破壊の勇氣也。使徒ヨハネ自己の經驗を語つて曰く、全き愛は懼を除くと。吾人父なる神を信じて全身を之に任す。何の要ありて懼るゝ事を爲さん。心中に恐懼狐疑の念發する時は神より遠ざかるの日なり。斯の如き時には、宜しく大膽に父なる神の前に出でゝ、其靈化を蒙ら

ざる可からず。大膽なる可し。大膽なるべし。

十二月廿日夜

我弱しと雖も未だ絶望するの要なし。羅馬の賢人セネカ曾て曰く
 一。身。に。人。間。の。弱。性。と。神。に。依。れ。る。強。固。と。を。兼。ね。具。ふ。是。眞。正。の。偉。大。な。り。と。保。羅。又。曰。く

主我に言ひ給ひけるは我恩爾に足れり。蓋我能は弱ちからよわきに於て全くなれば也。是故に寧ろ欣びて自己の弱に誇らん。是キリストの能吾に寓らん爲なり。之に由りて我キリストの爲に懦弱はづかしやと凌辱ともしきと空乏せと迫害めと患難なやみに遭ふを樂とせり。蓋われ弱ちからよわきき時に強ければなりと。

(哥後第十二章九—十)

此二人の者、共に一世の偉丈夫、而して斯の如き言を爲せり。是實に彼等胸底の秘密を吐露せるもの。知る可し彼等も亦余と同一の経験を嘗めたる者なる事を。余の能力を得る道唯だ神に依るにあり。余は今より全く世に就ては死せる者となり、唯神に就て生ける者と成らん。余は屢々祈るべき時間に乏しきを嘆じたれども、是れ大なる過なりしなり。余は今より言葉を以て祈るに止まらずして公私の生涯を以て祈らん。教場に於て學生に臨む時授業を以て祈らん。局に於て執務する時眞實を以て祈らん。人に接する時愛と義の行を以て祈らん。而して確固たる目的と永遠の希望とを以て常に天を樂まん。キリストの王國を建設するを以て余の最高の望願と爲さん。

廿八年五月ヨリ六月

余が心中の人性と神性とは矢張非常の衝突をなしつつ、始終煩悶の境に沈まんとせり。余は此頃如何にもして動かざる確信を得ん事を希望せり。確信の基礎を何に求むべきやを默想せり。閑を得ば學院背後の丘上松柏蒼鬱たる處に行きて親しく神に祈れり。當時の一大疑惑はキリストの王國果して最後の勝利を得べきやと云ふ問題なりき。社會の状態を観察すれば罪惡の勢力大河の決潰するが如くに瀾漫し、貧弱なる者は愈々窮迫無知の徒と成り了する様を見れば、王國の成就とは果して事實として信すべきものなりや。若し之を信する能はずば、宣言者たるキリストを信ぜざる者なり。祈禱と沈思默想の後、キリストの宣言は實に神の聖旨にして天下の大義なる事を確信する事を得たり。約翰傳十六章末段に記せる主の遺訓の意義を味ふ事を得たり。

監獄傳道の必要を感じ。兵庫縣典獄に就きて相談する所ありき。獄内年末の事情に妨げられて余及其他斯教人士の勸告を悉く採用する事能はざりしも、洲本監獄には基督教信者の教誨師を登用する事に決せり。其の成績の如何により他にも漸く信者の教誨師を囑託する様の手續を爲さんと云へりき。

明治卅四年九月一日

教育家としての事業を完うせんと欲せば、我に其資格なかるべからず。我に於て尤も缺如せるものを發見し平生修養する所なかるべからず。

1. 余は學生に戒めて自ら破るが如き行なきか。若し有らば如何で彼等を心服せしむる事を得んや。

2. 余は勤勉にして常に知識上進歩を爲し居るや。
3. 衷心より學生を愛し常に其の進歩と利益と便利とを計るよ
うに心懸け居るや。
4. 學生を戒愼せしむべき場合あらば、必ず其の機を逸せしむ可
からず。我に於て卑怯なるべからず。宜しく嚴にして慈なる父
の威嚴を以て之を教ふべし。
5. 教場に於ては餘り小言を言ふ可からず。戒むべき折あらば個
人的に諭す方宜し。
6. 可成閑を得て静坐、精神を修養する事大切なり。率乎たる心
膽は教育者の第一に有すべきものなり。

基督復活論

(年月不詳、某雑誌所載、各頁を半紙判厚手の洋紙に貼付し書册
形にして保存、講演原稿として再三利用せられたるものゝ如し)

此一篇昨秋の稿にして、過日復活紀念日、松山美以教會に於て
述べしもの。

英國オックスフォールド大學の教授博士フェーアベルン氏曰く
「甦生は教會を創造せり。甦れる基督は基督教を作れり。現今に於
ても基督教は彼と共に立ち又倒るべし。……若し活ける基督はヨセ
フの墓より出でたることなしと云ふ議論をして眞理ならしめば、ヨ
セフの墓は豈唯獨り、埋骨所たるに止まらんや。一大宗教と、之に
建設せられたる凡ての希望と、之が鼓舞振作せる雄渾なる熱火とを、
悉く埋没するの墳墓たりしならん」と。吾人をして聊か此の大問題

を論ぜしめよ。

惟ふに新約聖書中基督甦生の記事に關する反對説に凡そ四種あり、
第一、記事妄談説

論者曰く「新約聖書中基督甦生に關する記事の如きは、唯一場の
虚誕のみ、天下豈、斯の如き不可思議なる事あらんや。以て愚夫愚
婦を欺かんとする作者の術のみ」と。

是れ殆んど一顧を値せざる議論なり。何となれば、

1. 極端なる懷疑派の徒も、弟子等が基督の甦生を信じて銳意傳
道に熱中せる事實を許容すればなり。
2. 基督時代の教外の歴史家も甦生の風評喧しかりしことを載せ
て存すればなり。當時有名の歴史家ヨセフアスの如きは、明かに之
を録せり。

3. 古來基督に徹頭徹尾反對せる猶太人も、甦生の風評の事實な
りしことを拒まざればなり。

4. 聖書中甦生の記事を妄談なりとせば、新約聖書全體を拒むと
殆んど同然なればなり。蓋し甦生の事を載するは四福音書に止まら
ずして、使徒行傳、保羅、彼得、約翰等の書翰等に散見する所にし
て、且つ彼等が千鈞の重を置ける問題なればなり。

第二、氣絶醒覺説

論者曰く「基督が十字架^{せいかく}上より下されてヨセフの墓に葬られし時
は、未だ全く絶息せざりしなり。故に墓中の空氣と香料とは其神經
を刺戟して、氣絶の状態より醒覺せしめたり」と。

1. イエス敵人の縛に就くの夜、ゲッセマネの林中天父の前に跪

きし時、其心いかばかり惨絶悲絶の境に沈みしぞ。使徒等に告げて曰く「我心いたく憂へて死ぬばかり也」と。而して汗は血の滴の如く地にそゞげりと記せり。其夜、祭司長庭前の侮辱的審問は瞬間の睡眠を得せしめざるのみならず、剩へ屢々罪人の呼吸を絶つゝの虞ありし苛刻の鞭撻を加へられ、其の重さに堪へ難き十字架を負せられ、釘を以て手足を打たれたるまゝ六時間十字架に曝され、終りに槍を以て胸側を貫かれたる基督は、暫く氣絶の状態に陥りしのみにして、香料空氣等の刺衝の爲に復び甦生したりしと考ふることを得べきか。

2. 假りに基督の甦生を以て氣絶の醒覺なりと許すも、彼は到底奇蹟力に依らずんば墓を出づること能はざりしなり。漸く氣絶より醒覺せる半死半生の基督如何にして墓を嚴守せる羅馬兵士等に抵抗することを得し乎。羅馬兵士等悉く熟睡せし乎。當時の軍律たる死刑の罰を犯して、よもや悉く熟睡せりと思ふ能はず。

3. 縱令基督を以て氣絶より醒め、地震の爲めに墳口の巨石の轉ぜるに乗じ、兵士等を蹂躪し再び世に出でたりとせよ。然らば基督は天壽を全ふせしや。如何なる生涯を送りて何處に眞の屍を埋めしや。基督の敵人にして其の消息を知れりと唱ふる者ありし乎。

4. 試に見よ。基督は一時の氣絶を偽りて甦生を唱へ、己の弟子を欺き、延て天下の人を欺きし乎。基督の聖潔なる性行と其空前絶後の高尚なる教訓とは、如何にして斯の如き大詐欺家たる基督より出でしや。懷疑派の文學者ルナンすら基督を以て世界最大の聖人と稱せしに非らずや。

5. 弟子等は虚誕を宣べ傳へんが爲めに鼎鑊を甘しとし、白刃を

踏んで懼れざるの勇氣を出せしや。猶太の有司等甦れる基督を宣ぶる故を以て、弟子等を縛して之を獄に投じ、或は鞭撻を加へて其宣言を壓抑せんとするや。弟子等口を開いて、「神に聽くよりも愈りて爾曹に聽かば神の前に在て義たらんか。爾曹自ら之を判ぜよ。我等見しところ聞きし所のものは言はざるを得ざるなり」と道破して侃々諤々たるの意氣、如何にして出でしや。

第三、弟子等基督の屍を竊めりと云ふ説

1. 墓を守れる番兵等悉く死刑の罰を犯して、而も基督在世の間屢々甦るべしと豫言せる其の三日目の朝に熟睡せりとは考ふる能はず。

2. 使徒行傳を讀むに、使徒等は熱心に基督の甦生を宣ぶるの故を以て捕縛せられ、集議所に曳かれしと雖も、基督の死骸の竊盜罪を以て詰問せられたること無かりき。

3. 弟子等危険を冒して基督の屍を竊み去り、偽りて甦れりと唱ふるも果して何の得る所ある乎。却て彼等は基督を宣ぶるの故を以て世人の嫌惡と迫害とを蒙り、終に大抵非命の死を遂ぐるに至りしにあらずや。

4. 基督の甦生事實ならざりしならば、ゲッセマネの園に於て基督の縛に就くに當りて恐慌離散せる弟子等は、いかで萬死を冒して基督の屍を奪去るの勇氣を起し得んや。

5. 使徒等若し欺騙者ならんには、かの産業を鬻り、價の幾分を藏し、餘の幾分を挈來りて、使徒等の足下に置けるアナニヤ、サッピラ夫婦の偽善を責め、^{たちど}立ろに死に至らしめたる能力、何處より出んや。(使行五章)

6. 虚偽は如何で、基督の弟子等の如き古今の歴史上稀有なる殉教者を出さんや。

7. 虚偽はいかで、焰々たる活火を燃やして、斯の如く猶太、小亞細亞、希臘、羅馬に蔓延せんや。

8. 試に新約書中使徒等の書翰を讀め。其の文章は眞摯謹嚴の人たることを證して餘あるにあらずや。

第四、主觀的妄想説

論者曰く「死せる基督固より甦れるに非ず。天下斯の如き理無し。神經の衰弱するや、小雀の揺くを見ては幽霊と臆ひ、風聲鶴唳を聞きては敵の襲來と臆測すること、古今其例に乏しからず。牧者を失へる群羊の如き弟子等が、甦れる基督を見たりと云ふも、此の類ならざるを得んや」と。嗟乎這般の輕々たる臆斷を爲して、甘んずる者、余輩其の空疎を憫まずんばあらず。

1. ストラオスパウルの如き懷疑派すら、基督の死後廿六年内の作なりと承認せる保羅が哥林多人に贈れる前書翰十五章に、基督甦りて屢々數人の弟子に現はれ、使徒等の團體に顯はれ、五百人の兄弟にあらはれ、現に其の多數者の當時存命中なることを記せり。

2. 二三人の者各々私かに甦れる基督を見たりとせば、或は其輩の主觀的幻影ならんと言ふを得べしと雖も、數人の者、或は十餘名の者、或は五百名の者、同時に同一の主觀的妄想を見るべしとは想像する能はず。且つ弟子等と雖も、初より基督の甦生を確信し、之を豫期するにあらず。基督が在世の間屢々之を告げ給ひしにも拘らず、其の聲、頑鈍なる彼等の耳底に徹せず、殆んど之を忘却し去ら

んとせり。故に看よ。基督の顯現あるや、一人として容易に之を受くる者なく、爲に主の叱責を蒙りしこと一にして足らず。就中トマストマスの如きは、我若し其の手に釘の迹を見、わが指を釘の迹に探し、わが手を其背に探すに非ずば信ぜじと、揚言して頑然他の弟子等の證明を拒絶せり。斯の如きの弟子等、如何にして同時に同一の幻影を見、且つ之を甦れる基督なりと確信するに至るべけんや。

3. 精神の衰弱せる者、時に主觀的幻影を見ること無きに非ずと雖も、淡然捕捉し難き姿を現はすを以て常とす。然るに甦れる基督はエンマオの村に行く二人の弟子と共に歩み、談話し、飲食せり。トマスに現れて大に其懷疑を叱し、十人の弟子等の集りに現はれて談話し、且つ飲食せり。又凡ての使徒等に現れて大なる命令と約束とを告げて曰く、

天の中、地の上の凡ての權を我に賜れり、是故に爾曹行きて萬國の民にバプテスマを施し、之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とし、且我凡て爾曹に命ぜし言を守れと彼等に教へよ、夫れ我は世の末まで爾曹と偕に在るなり云々と。

4. 弟子等が主觀的の妄想より之等の一様の談話、動作、命令、約束を同時に見聞せりと想像すること能はざる斯の如し。況んや、保羅が哥林多前書十五章に書ける如く、五百人の弟子同時に顯現の實在無くして、基督を認むることあらんや。

5. 主觀的幻影は精神の能力衰耗して、常識を失へる人に起るを常とす。基督の死するや、弟子等の悲嘆と失望の甚しかりしこと疑ふべからず。然れども彼等は元とガリラヤの漁人にして健強なる軀

幹を具ふる者、豈悉く日夜幻影を見て實在と爲すが如き極端なる精神病者と變ぜんや。試に彼等の言動に徴せよ。甦生後非常なる能力を得て、基督の死と甦生とを傳道の緊急題目となし、諄々として説き諤々として宣べ、公明なる大義を執つて有司の前に抗議し、百萬の敵にも臆せざる所、堂々たる偉人の概あり。(使徒傳四章)

更に試に彼等の文章に徴せん乎。明晰なる文字、博愛の心胸、至誠の剛腸、深遠の教理等は、公平なる讀者の認めざるを得ざる所ならずや。古今世界の文學者、哲學者、無學者も等しく興味を感ずる文字ならざる乎。ダンテ、ミルトン、カーライル、テニソン等の思想の心髓は、實に基督の弟子等の書ける文章の賚ならずや。世界文學の大傑作は、多くは彼等の文章より脱化せりと云ふも、過言にあらざるなり。

6. 幻影は一時客觀的事實と誤認せらるゝこと、必ずしも無きにあらずと雖も、時日を経過して精神の状態靜穩に復すれば、先きに見し所の主觀的幻影なりしことを發見するものなり。假令數人の者之を發見することなくも、數十人、數百人の者、悉く發見せざりしと考ふること能はず。

エール大學の歴史家ヒッシヤル曰く、甦れる基督の顯現を見るに、或る一定の時に始まり、或る時間の間に現はれ、而して暫くにして終れり。即ち三日目に現はれ始め、種々の場所に於て種々の人に顯現せり。若し當時弟子等の精神にして、斯の如き幻影を生ぜしむる如き異狀に在りしとせば、顯現の度數遙に多かるべき筈なり。又斯の如く時を限り而して不意に止まるべき筈なし。却つて時進み弟子

等の熱信と勇氣との熾んに成り行くに従ひて、愈々引續き増加し行くべき譯ならずや」と。

7. 氏又曰く、「假りに百歩を譲りて弟子等の信仰をして不可思議なる妄想より起りし者となすも、斯の如き想像の發動に必要な淺薄なる小供らしき感情が、四面辯難攻撃の裡に在りて、否、白刃の下に在りて、如何で發生し保續し得ることあらんや」と。

8. 基督の甦生と共に使徒等の衰微の極に達せる信仰も復活せり。此の信仰の上に聖靈降り、此の信仰の基礎に基督教會創めて建立せり。爾來殆んど二千年連綿として今日に至る。復活果して事實ならざりしならば、如何にして此事あるべき。是れ却つて復活の問題よりも遙かに解し難き謎ならずや。

9. 保羅の改悔は基督甦生の信仰に據れり。保羅曰く、「最後に月足らぬ者の如き我にも現はれ給へり。蓋は吾神の教會を迫害せる故に使徒と稱ふるに足らざる者にして、使徒の中に至微なる者なればなり。されど我れ此の如くなるを得しは神の恩に由りてなり云々」と。先きに言へる如く四福音書、使徒行傳、書翰等を公平に通讀する者にして、誰か卷中に漫々として横流する至誠、確信の精神と事實とを認めざる者あらんや。而も其中に於て使徒等が生命を賭して宣傳し、證明せる基督甦生の大事實を抹殺し去らんとするは、思慮なきの業と言はざる可けんや。

博士マークス・ドゥヅ曰く「甦生に關する證據を一括せば、歴史上の事實として成立すべき十分の資格あり。世の歴史上の事件も之に勝れる證據を有するもの多からざるべし」と。

我同胞に警告す

(日清戦争當時の演説草稿? ザラ紙、鉛筆書、訂正添加の跡多し)

我邦三千年來の歴史を通覽するに、雄圖を海外千萬里の外に暢さんと試みたる時代なきにあらず。例之神后三韓征伐の如き、元龜天正年間流浪武士の支那沿岸を侵略して該國人の心膽を寒からしめたる如き、仙臺藩の伊達正宗が圖南の大志を抱懐して密かに支倉六右衛門を羅馬に遣はしたるが如き、豊太閤が征韓の師を出したるが如き、是れ其の顯著なるものゝみ。然れども之等は皆一個人或は數人の企圖なりしなり。日本國民なる一大團體が一大輿論を起し、一大決心をなして海外に出師せる這般の事の如きは、我歴史中破天荒の第一特徴なりとす。彼の叛を起せる熊襲と、其の後援者たる新羅を懲罰するの御目的に出でし神功皇后の三韓征伐を除きては、元龜天正間漂流武士が支那沿岸の侵略も、政宗の圖南の雄略も、豊公の征韓も、其目的の發する動機を察するに大抵一身の功名心か、又は醜陋なる蠶食的の慾情に存せざるもの甚だ稀なり。然るに今回の出師の大精神は、單純なる侵略にあらず、功名心にあらず、又懲罰の目的のみに非ずして、好隣朝鮮の自主を確定し其の壓抑者たる支那の桎梏を破毀して、永く其苛政を蒙らざらしめ、併せて蒙昧頑執なる之等東洋の二國に、眞正の光明を及ぼさんとする公明正大なる仁義より出でしなり。是れ今回の日清事件が我歴史上破天荒の第二特徴なりとす。

前に述ぶる如く、時に雄圖を千萬里外に伸さんと試みたる者無き

にあらず。又多少の外交無きにあらず。然れども大體より觀察せば、日本が二千年來鎖國の主義を執りて自ら外國を知らず、又外國に知られずして、久しく絶東の一仙人國たりし事は掩ふ可からざる事實なり。試みに萬國史を繙きて、世界文明の大潮流に關係せる古今の國民を尋ねよ。埃及あり、アッシリヤあり、巴比倫あり、希伯來あり、フェニシヤあり、印度あり、波斯あり、希臘、羅馬あり、日耳爾曼あり、英佛あり、伊太利あり、スペインあり、埃太利あり、而して或る歴史には支那もあり。然らば日本の國名は如何。大抵の萬國史上には之を見る事なし。偶々之あるも湊川橋畔楠公の靈に邂逅するの趣あり。親しく其の溫容に接して今昔の感慨の消息に傾聴せんと欲すれば、何時しか過ぎ去つて周圍には熱鬧せる人馬の擾々たるを見るが如し。萬國史上稀に日本の記事を瞥見する事ありと雖も、暫く其の影を示すのみにして、早や雑沓せる諸外國民の活動せる洪波の中に、全く没盡し去らるゝなり。何故に然るや。是れ恨絶の事なりと雖も、我國民が世界文明の大潮流に投すべき大なる活動なかりし所以にして、亦恨むも詮なき事たり。然るに近日の倫敦タイムス紙上、平壤大戰を評して云へるを聞け。

佛國アルゼンチユイル新聞の平壤戰勝を評して結末に曰く、要するに日本人は高等の技能ある將校と眞に實に勇敢なる、吾人が勇なる哉と絶叫する兵卒を有する者なり。吾人は日本人に對して、專一熱誠なる同情を表す。吾人は日本軍の讚嘆に就いて何の辭も惜む所なし云々。

又歐米の新聞記事が黃海の大戰に於ける日本の勝利を評して曰く、

今後の萬國史を書く者、必ず日軍の清軍に對する大勝利の戦争を以て、十九世紀末の最大事件と爲さんと。是れ歐洲人民の眼中に物の數とせられざりし千載の恥辱を雪ぎ、我大日本帝國の光榮を萬國に發揮し、併せて萬國史上我が國名を不朽に垂れしむる所以なり。是れ日本歴史上破天荒の第三特徴なりとす。

日本進軍の大勢、豈啻、歐洲人民の耳目を聳動するものあるのみならんや。日本の活動は歐洲列國の運命の趨勢を左右せんとするの趣あるにあらずや。何となれば、英國及露西亞が久しく望を囑せる朝鮮には、既に清兵を掃ひ盡して日章旗の翻々たるを見るべく、露國が無氷結の港灣を得んとして垂涎しつゝある盛京省遼東半島は、今や日本軍の爲に占領せられんとしつゝあり。而して國權上及商權上利害の關係より、多年清國の與國たりし英國は、今や日本の向背に依ては日軍の蹂躪に就いて莫大の影響を蒙らんとしつゝあり。其他獨逸、佛國、西班牙の如き、皆多少東洋に於ける勢力に影響を受けんとしつゝあり。日本軍北京を陥落するの日は、日本が之等の歐洲列國に對して英斷果決の交渉を爲さざる可からざる日なり。従つて日本の與國と爲ると否とに依りて東洋に於ける與國の勢力は大なる消長を受けざる可からず。而して東洋に於ける歐洲列國の勢力の消長は、本國に於ける國勢に大なる變動を與ふる所以なり。

英國の『スペクテートル』新聞は評して、日本若し全勝を占めなば、印度其他の亞細亞諸國民を激勵し、今正に彼等を征服し居る白哲人種は、却て彼等の征服を受くるに至るべしと論ぜり。少しく過言に似たりと雖も、絶東の一嶋帝國の行動が、遠く歐洲の運命に變

動を與へんとするの消息を洩らしたるものと云ふを得べし。是れ日本歴史上破天荒の第四特徴なりとす。

而して現に支那四億萬の國民の生死、光暗の運命は、實に吾人の掌中に握らるゝなり。峰に攀る者は歩々己の地平線上より愈々高まる事を知る。然れども大山高岳に登る者は山の高きを感じる事弱く、頂に到りて吾は果して如何にして斯の如き高山に登りしやを疑はんとする者なり。我國民現今の地位に對する意識は實に未だ山の途中に在る者の感覺の如し。吾人の事業の餘りに高く大なるが故に、吾が國民は殆んど之を忘れつゝあるが如き感なくんばあらず。却つて吾人は現今人心の潮流に於て、最も恐るべき二三の傾向を認めずんばあらず。

第一、謹嚴なる精神の缺乏。平壤、黃海、九連城、鳳凰城戦勝の報を聞きては暫く感情を激昂せしめて、雀躍抃舞狂奔するの徒を多く見んとする事是なり。かの長距離の競走を爲す者を見よ。意氣驕然肉躍り、眼に血迸り瞬間に他の競争者を過して第一先着たらんとするの概あり。何ぞ圖らん、此の勇者幾度か蹉跎し氣息涸れ力盡き悄然として歸り來れども、平靜沈着なりし者却て第一等の受賞者となる事屢次なるに非ずや。かの勇者何故に失敗せしや。初より謹嚴の精神を缺きたればなり。我が征清軍は幸に理想に近き將軍を得たり。山縣、大山の陸軍大將の如き、樺山、伊藤の海軍中將の如き是なり。然らば我が國民たる者、徒らに連戦連勝の聲に酔うて雀躍狂奔すべき時ならんや。況哉征清の目的唯幾萬の生靈を殲滅して併呑的慾情を満足せしめんとするに在らずして、公明正大なる仁義の大

精神より出でたるものなるに於てをや。

第二、勤儉の實乏しき事。臨時議會は征清軍費として壹億五千萬圓の公債を議決せり。今や日本國民が最も勤儉の實を擧ぐべき時なり。然るに戦勝の報を得るや、盛宴を張り豪遊を試むる者甚だ多きは何ぞや。軍隊の勞に報ひんが爲に彼等の爲め祝宴を設くる事、元より答むべき所に非ずと雖も、之を機として徒らに己の慾情を逞しうせんとする多きに至りては、甚だ憂ふべき事たり。此輩獅子身中の蟲と爲らざるを期す可からざればなり。今日は祝宴豪遊の日にあらずして、之等の金を集めて軍人の遺族を扶け、軍隊の費用に獻すべきの秋なり。

日本國民たる者、宜しく仰いで上天に祝福を求め、謹嚴勇武の大精神を以て、此の至重至大の事業に當らざる可からず。

信 仰

〔明治廿九年五月三日 神戸美以教會に於て〕

（宗教講演草稿、青罌紙、毛筆書）

希伯來書十一章

第一、信仰とは何ぞや。

人間を他の動物より區別する最も著しき理由の一は、信仰の能力なりとす。人間以外の動物中形貌、智性とも最も人間に類似せるものは猿猴ならん。然れども彼は信仰の能力を有せざるなり。保羅信仰の定義を與へて曰く、信仰は未だ見ざる所を眞とするものなりと。是れ猿猴も他の動物も摸倣し能はざる所なりとす。下等動物は皆本來有限の性を有せる者なれども、獨り人間のみは無限を思ふの性を

賦與せられたり。信仰は即ち現在見えざるものを信するに止まらずして、永遠無限の事を思念し之を信じ之を瞻仰する事なればなり。人間の被造物中最も高尚なる所以、實に茲に存すと云ふ可し。故に人間にして、唯朽ち果つる浮世の事を思念するに過ぎざる者は、下等動物に近きものにして、朽ち果てざる靈の事を思ふ者は、人間らしき人間と云ふ事を得べし。

第二、吾人は何故に基督を信するや。

人間は墮落せる者なり。詩篇十四篇二節に曰く「エホバ天より人の子をのぞみみて、悟るもの、神をたづぬる者ありやと見たまひしに、皆逆きいでゝことごとく腐れたり。善を爲すものなし、一人だになし」と。故に孔子も徳の修らざるを憂ひ、ソクラテスも我中に罪惡の充てる事を告白せり。天を仰いで、何人か敢て我は義人なりと云ひ得る者あらんや。吾心を裸にして神の前に出づる者は、實に己の墮落せる者なる事、幾多の罪惡と過とを犯せる者なるを自覺すべし。猶太人はモーゼに依りて律法を得、吾人は心の肉碑に記されたる律法を有して、義と不義とを辨別せり。然れども律法は猶太人を救ふ能はざりし如く、吾儕を救ふの力なかりき。

是故に律法の行に由りて神の前に義と爲らるゝもの一人だに有ることなし。蓋し律法に由りて罪は知らるゝ也。——羅三ノ二十われ願ふ所の善は之を行はず、反て願はざる所の惡は之を行へり……蓋われ内なる人に就ては神の律法を樂めども、わが肢體に他の法ありて我心の法と戦ひ、我を據にして我が肢體の中にをる罪の法に従はするを悟れり。噫われ困苦める人なる哉。この死の體より我を救はんものは誰ぞや。

是れ實に萬人の叫ぶ所なりとす。

斯の如く律法に由りては、吾人は神の前に失望するの外なかりしなり。然るに羅馬書三章二十一節より二十四節までに説ける如く

今律法の外に神の人を義とし給ふことは顯れて、律法と豫言者は其證をなせり。即ちイエス・キリストを信するに由りて其義を神は凡の信者に賜ふて區別なし。そは人みな既に罪を犯せば神より榮を受くるに足らず、只キリスト・イエスの贖に頼りて神の恩をうけ、功なくして義とせらるゝ也。

人の義とせらるゝは行に由るに非ずして、信仰に由るものなるは、唯新約に於ける天啓に非ずして、遠く舊約時代に於ても然りき。暗黒なる夕、マムレの天幕に於てユダヤの始祖が、唯獨り寂寞恐懼を感じつゝある時に、神アブラハムに顯はれ、彼を暗き天幕の裡より出來らしめ燦爛たる天上の星を指しながら、永遠に忘れられざる言葉をして「汝の子孫は是の如くなるべし」——(創世記十五ノ五)と告げ給ひしは、吾人の知る所なり。之に續いて「アブラハム、エホバを信す。エホバ之を彼の義となし給へり」——(創世記十五ノ六)と記せり。彼は神の言葉と約束とを信することに由りて斯く嘉みせられたり。

基督自身の福音之を認む。

イエス、ニコデモに教へて左の如く宣へり。

(約翰傳三ノ十三—十七)

天より降り天にをる人の子の外に天に昇りし者なし。モーゼ野に蛇を擧げし如く人の子も擧げらるべし。凡て之を信する者亡ることなくして永生を受しめんが爲なり。それ神はその生み給へる

獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信する者に亡ることなくして永生を受しめんが爲なり。神の其子を世に遣はし給へるは世の罪を定めんとに非ず。彼に由りて世を救はんが爲なり。

往昔アラビヤの曠野に於て蛇に嘯まれたるイスラエル人は、唯銅の蛇を見る事に由りて其傷痕癒えたり。是れ實に不思議なり。然れども事實は癒えたりき。只キリストを仰ぎて吾人救を得るとは甚だ不思議なり。殆んど信すべからざるが如し。然れども是れ事實なり。保羅斯くして救を得たり。ルーテルも斯くして救を得たり。古今の信者は皆之に由りて救を得たり。

行の義に由りて救を得んとする者は、必ず失敗すべし。猶太教は律法の義を頼みて失敗せり。羅馬教會も同じく遂に行に由るの義を重んずるに至り、繁文縟禮となりて腐敗せり。ルーテルが修道院に入りて苦めるは行に由るの義を全うせんとしたればなり。彼は聖書を研究するに及んで、始めて信仰に由りて義とせらるゝものなる事を悟れり。茲に於て宗教改革起り、新教は旭日冲天の勢を以て興隆せり。今日の教會往々猶太教的の信者を見るが如し。然れども行の義に重きを置く者は、天性意志の強き者も弱き者も必ず失敗すべし。天性、意志の力比較的に強くして稍律法を守り得る者は、往昔の猶太人の如く、神の義を識らず、己の義を立てん事を求めて傲慢不遜となる。而して神の前に謙遜の心なき者は到底神の恩寵を受くる事能はざるが故に、遂に失意と不平とに陥るに至るべし。之に反して元來意志健剛ならざる者は、自力を以て到底律法を守り習練の工夫

を積む能はざるを以て、其重荷に堪へ難くして倒るゝものも亦多し。吾人は果して此種の誤に陥らざるや否やを省みる事肝要なりとす。

神はキリストに由りて吾人を義となし、且つ力を與へて神の子となし給ふなり。

彼を受け其名を信ぜし者には權を與へて此を神の子と爲せり。

(約翰傳一ノ十二)

由之觀之吾儕の基督を信する所以は、即ち此の信仰に由て墮落せる吾儕が義とせられ權を受けて神の子となるを得んが爲なり。

第三、吾人の信仰の根據如何。

凡そ人を信するは、其人の品性を信するなり。吾人が父の身代の讓與の約束を受けて之を信するは、余を愛し余に眞なる父の品性を信するなり。故に余は疑はずして之を待望むなり。吾人が基督の福音を信じて疑はざる所以は、基督の品性を信すればなり。神の遣はし給へる獨子の品性を信任すればなり。余嘗て懷疑に陥り、聖書の記事は甚だ不可思議にして到底信するに足らざるものとなせり。然れども之等の記事の間に燦爛として蔽ふ可からざるキリストの品性を認めざるを得ざりき。レナンの如き反對黨の首領すら、世界最大の聖人と告白せるキリストの至誠博愛の大品性を認めて、キリストを信ぜざるを得ざりき。故に余は記事の不可思議を其儘に存し、キリストの神秘にして容易に解すべからざる教訓を其儘にして、キリストの品性を信ぜり。キリスト曾て曰く「爾曹の子麴麥を求めんに誰か之に蛇蝎を與へんや。爾曹惡者ながら其子に善き者を與ふるを知る。況して天に在ます父は求むる者に聖靈を與へざらんや」と。

余はキリストと神との品性を信するが故に、再び基督教信者となり、凡ての人を僞人とするも神を僞人とする事能はざるなり。キリスト曰く「天地は廢せん。されど我言葉は消せず」と。然りキリスト父の許に還りてより以來、耶路撒列武城は滅亡せり。羅馬帝國は瓦解せり。シヤールマンの帝國は消滅せり。スペインの偉大は零落せり。ナポレオンの覇圖は遠へに倒れたり。然れどもキリストの言葉は歴史の進むと共に實現せられつゝあり。基督教會は連綿として存し、神の天國は益々擴張せられつゝあり。

第四、信仰の幸福。

跼蹐たる有限の小天地に此身を屈す、人生何ぞ堪ふべけんや。須らく信仰の羽翼に搏て無限の自由界に徜徉すべし。詩人ヘンリー・ケルク・ホワイト歌ひて曰く「信仰の人は朦朧なる烟霧と嵐とに鎖されたる慘憺たる此の世界を後に捨て、信仰の翼を張り天日嘗て霞に蔽はるゝ事なき九天の上に升起、人類の住める下界をして暗憺たらしむる妖雲を下蹴するが如し。而して其の雲の上にては光まばゆきまでに輝けり」と。「吾己に世に勝てり」と宣へるキリストを見よ。又ホイッテイヤの詩に次の如き話あり。

タフラーと云へる説教者、或る秋の日ライン河畔ストラスボルク城外を人生の秘奥なる問題など默想しつゝ徜徉せる時

(以下四五行空白)

第五、如何にして信仰すべき乎。

船に投じて大洋を航海せんとするが如し。船體と船長を吟味して

善となし、然る後心を定めて吾が一身を其船に托すべし。吾人の救の船と船長とは、十分吾人の全心全靈を托するに足るべし。然らば躊躇するの要なし。最早斷然決心して身を投すべきのみ。信仰とは一面より見れば大膽を意味す。船の覆没を恐れて遲疑する者は到底大洋の彼岸に達するの機なし。

臺灣新總督乃木將軍に望む

(巻紙、毛筆書、最後に「明治廿九年十月二十五日日曜夜説教の後稿」と鉛筆にて附記)

兼て卿は深略善く斷じ、膽守餘有るの好將軍たるのみならず、高風清節の士たりと云ふを聞き、竊かに欽羨の情に堪へざるものありき。頃日桂中將の後を襲ふて遠く南鎮の榮職に任ぜられたるを知りて、其人を得たるを悦べり。余素より不肖、敢て天下の經綸を語るの才なき者なりと雖も、彼の新領地施政の方針に就きては平生余の感慨を打つものなきにあらず。聊か衷情を披いて卿の行を餞するは已むを得ざるに出づるなり。卿は遠謀深慮の士、必ずや胸中經綸明策あるを疑はず。特に今や卿は臺灣統治上の紊亂の一原因たる暴官汚吏を淘汰して、根本的改革を實行せんとせらるゝ由なり。余の言元より蛇足に過ぎざるべしと雖も、卿の寛宏能く容るゝ所あるを信ず。

第一、臺灣の人民に對する精神。

日本の運命を賭し幾萬の精銳の血を流して清と戦を交へたるは、徒らに殺伐なる他國侵略的情慾を充たさんが爲に非ざるは、何人も首肯する所ならん。仁義を以て始終を一貫すべきは宣戦の大眼目

たりしにあらずや。十九世紀の世界的文化を頑硬なる隣邦に布かんとせるは、思慮ある國民多數の希望たりしにあらずや。然らば國民の血を以て買ひたる臺灣は、當に仁義の王政を布くべきの土たり。世界的文明の化を治からしむべきの地たり。然らば臺灣の人民は吾人の奴隸にあらずして等しく天賦の人權を享有せる吾人の同胞たり。之が治者たる者は、宜しく赤誠を推して其福祉と文明とを計圖するの精神なくして可ならんや。「至誠にして動かざる者未だ之有らず、誠ならずして未だ能く動く者有らざる也」孟子の語、萬世の知言と云ふべし。徒らに黄金を崇拜して土人の膏血を絞らんとする暴官汚吏の施政に委せば、何の日か臺灣の治績を見るを得んや。殷鑑遠からず、西班牙の版圖たる玳馬島を見よ。頃日アッシリヤ史を繙きて、該國中興の英主テグラス二世及列王の政略を讀めり。彼等は埃及より西方亞細亞の殆んど全體を統一したることありき。テグラス二世の如きは封建の制度を打破し、舊主を廢し、始めて郡縣の制を布き親任の重官を派して之に知たらしめ、専ら中央政府の權勢を張らんと試みたりと雖も、屬國民の幸福を念ふの精神より出でざるが故に、治者と被治者とを連絡するの粘着力なく、反亂已む時なくして終に瓦解に歸せり。猛省せざるべけんや。余は卿が斷々乎として新領地に於ける暴官汚吏を淘汰し、陛下仁慈の大政を枉ぐる者無からしめんことを切望して止まざるなり。

第二、羅馬と英國とに學べ。

佛國と西班牙とが古來領地を失ふこと多きは如何。彼等は餘り神經的なればなり。大體を統轄するを以て満足せずして、直ちに支脈

に涉らんとすればなり。宜しく其の人民の形勢を察して、徐ろに之を誘導するの耐忍力なかるべからず。羅馬が征服國を統治するの法を見よ。渠は其の國の制度習慣を大目に看過して、全體の主權を把持するを以て足れりとせり。故に其の版圖は久しきに續くを得たり。近世の英國は羅馬の如し。渠は實に此の耐忍力を有せり。印度及其他の屬國に對する政略の迹を觀れば、明かに之を證するを得べし。且彼は眞に屬國民の文明と福祉とを増進せしめんとする義侠心を有せり。英國植民の成功豈徒爾ならんや。

第三、博く人材を求むべし。

臺灣の治績を見んと欲せば、殊に人材を用ふべきの必要を認む。宜しく之を博く天下に求むべし。徒らに黄金に釣られて來る者を登庸せば、新領地は或は終に之等の官吏の爲に主權を失ふの機なきを測るべからず。臺灣に赴く者は、當に殉教者の如き覺悟を有する者ならざるべからず。半開の島民を愛して之を誘掖利導せんと欲する誠を有てる者ならざるべからず。卿若し之を天下に求めば、四千萬の同胞中、豈數十の義人なしとせんや。殊に宇宙の大眞理を確信して、人生の啓發を以て天職とする宗教家の中に求めば、之を得ること更に容易なるものあらん。

其外阿片問題の如き、土匪處置の問題の如き、幾多の難問題ありと雖も、余は以上の三件を提出するを以て足れりとすべし。

徳教問題と基督教教育

〔明治卅一年五月部會教育演說會のため〕
〔演說草稿、半紙、毛筆書、訂正の跡多し〕

1. 佛人ルーソー1762年に『エミール』と云ふ教育小説を梓して江湖に其の意見を發表するや、歐洲全土の教界一時其の風靡する處となれり。その梗概を語らば左の如くならん。

『少年は自然の兒たらざる可からず。兒童の涙は正に許容すべき哀願なり。徒らに干涉を以て教育の本旨を得たりと云ふは、大なる誤謬なり。歩行を教ふるならば、若し倒れば己を傷くべきを知らしめて始めて歩行を學ばしむ可し。徒らに従順の義務を強ふる勿れ。寧ろ「自然の法則」に服従するに重きを置くべし。エミールを教育するには、實際の生活に依り觀察と經驗とに依るなり。十二歳に至りて、彼は既に純然たる自然の兒なり。本は未だ讀む能はざるも深く天然の書を讀めり。精確に度り、精確に數へ、物を畫く事を教ふ。質素なる食物を飽き足らすべし。習慣、慣例、權威等は其の知らざる處なり。

十二歳より十五歳迄も同一方針を以て進ましむべし。尤も身體の發育を自由ならしむるが故に、元氣充實の少年たるべし。

十五歳、今や新しき時代到來せり。歴史、傳統等其他必要なる實際的の知識を授くべき時なり。十五歳より丁年迄は、倫理又は社會に立つに要用なる事物を續いて教育すべきなり。』

此書一旦世に顯はるゝや、歐洲の家庭より學校に至る迄非常なる

影響を蒙れり。兒童は本を棄て、遊戯に勵み、少年は粗衣を着けて濶歩し、讀書は唯僅かにプルターク英雄傳に限らるゝが如き有様なりき。勿論此の流の教育は、佛本國に於ては最も有力となれり。後30年佛國の革命起れり。而して革命の舞臺の役者たるジロンドの徒輩、カーノ及び奈翁の麾下の將校士卒は多く此派の學校に教育せられたるものなりしと云ふ。史家稱して十六世紀の英國革命は聖書を翻譯せる神學者より起り、佛國革命はエンサイクロピデヤ記者より發せりと云ふ。蓋しルーソー、ヴォルテール等の文學者を指せるなり。

2. 今日教育界墮落の狀況

教育時論記者の慨嘆——吉原騒動、熊本腐敗の原因何處に在りや。

- (1) 封建時代と共に武士道の過ぎ去れる事——儒教の新文明と添はざる事。
- (2) ベンザム、スペンセル、ミル等の主義輸入——則ち實利主義、懷疑主義、唯物主義の跋扈——ゼネー倫理書翻譯に就て一奇談——坪内氏の中學一年級に於ける倫理質問、虚言の件。

3. 實利主義、懷疑主義、唯物主義は何故に腐敗の原因なりや。

利害に依りて善惡を判斷し、天秤の輕重に依りて道德の標準を定むるは實利主義の道德なり。則ちカアライルの言へる如く、人の靈魂を、枯草を天秤に量るが如くに量るものなり。所謂善と惡とは東と西と遠く分るゝ如く、天と地獄と離るゝ如くに、異なる事を認めざるものなり。斯の如き主義は如何で義人を出す事を得んや。

眞善美の理想たる上帝の存在を疑ひ、人間の靈性を否定し、人は

唯物質の結合のみと唱ふる所の懷疑説や唯物主義により打算せる教育は、如何で高尚なる品格を具ふる人物を造り出さんや。利己主義となり、冷淡主義となり、道樂主義となるは自然の理のみ。教育時論記者の慷慨せる、教師の商賣、酒色沈湎、教科書採用を利用して收賄する者、同僚相競つて書肆に高價を以て原稿を賣る者、書生の學校騒動、淫猥の醜行、鬭争、花合の流行、要之、學風の頹廢は右の實利主義、懷疑主義、唯物主義等が助長せるものと見て不可なし。

4. 救済の方法

(1) 教育勅語の講義其の効果如何 (坪内氏の批評)

猿に冠帯をなせる如し。勅語は國民の心得べき道德として間然する處なし。要は實行如何に在り。

(2) 教育時論記者の推薦する方法。

1. 高等教育會議に附し振肅の方法討究。
2. 校長教員に大更迭を行ひ、學識徳望なき者を罷免する事。
3. 文部省は教育官の言動に注意し叱責退職等を嚴にすべき事。
4. 教官各々其の位置職責に對し深省熟慮、品位理想を保ち、獻身的精神を以て斯道振起に勉めしむべし——倫理教師及び教授法一新——警察との連絡——右の批評

5. 基督教主義の教育

惟ふに今日の教育の大禍根は教育の目的を知らざるにあり。彼等は單に國民を造らんとすればなり。單に技手、學者、法律家、醫者等を養成せんとすればなり。醫者、法律家、學者、技手たるに先ちて人間たらざるべからず。

基督教教育の目的は先づ人間を造るにあり、眞の人を造るにあり。人たる資格を全うして初めて完全なる國民たるべし。醫者、商人、學者等たるべし。故に基督教教育は知育、體育を重んずると共に、最も學生の精神修養に重きを置くものなり。徒らに勸語倫理の項目を擧げて其の注入的の講義に止まらば、學生をして坪内氏の喝破せる如く形式的となり、皮相的となり、實利的となり、上塗的とならしめん。基督教的德育は人の精神の奥に入りて、其の道徳的動機を動かすにあり。心の根本を革新するにあり。

(1) 神と自己。基督教は唯物主義の如く、人間を以て物質の化合物のみと云はず、眞善美の神に肖て像られたる靈性を具ふるものと教ふ。即ち元來神の子たる事を示す。是れ實に人間の價値を高貴ならしむる所以なり。唯悲しむべし、罪惡の爲に其の光輝を蔽はれたれば、痛悔懺悔して神助を求め、益々本來の特權を恢復するを力めしむ。キリスト曰く「爾曹天父の完きが如く全くなるべし」と。品性の完全なる理想を與ふるもの斯の如きはなかるべし。

(2) 國家に對して。基督教は萬物に對して意味ある觀察をなすものなり。一莖の野菊も目的ありて存在する事を認むるものなり。故に況哉國家の存在に就いては、最も上帝の聖旨の存する所深きを認むるものなり。則ち國民は各々成就すべき天職ある事を信するものなり。故に吾人は、良心を以て忠君愛國を實行せん事を期するものなり。

國體と基督教。論者或は曰く、萬世一系の皇統を踐める聖上を戴く我が國體と、君主の外に上帝に仕ふる基督教は、調和する能

はずと。論意甚だ不瞭。聖上は長くも國民の幸福を憂慮して曩日憲法を發布せられたり。吾人は立憲君主國の皇帝を奉戴して最上の尊崇をなす者なり。聖書に「王を尊べ、上に在て權威を司どる者に従ふべし」と云へり。基督教は或る意味に於て國家主義なり。但し排外的攘夷的國家主義に與せず。——唯物主義、懷疑主義は却つて不敬なり。

(3) 人類に對して。國民の存在に天意あるを認むると共に、世界人類の社會に大なる意味あることを信するものなり。人類は吾人の敵にあらず、夷にあらずして吾人の隣友たり、同胞たる事を信するものなり。人類の文明は上帝の聖意にして、社會は次第に完全の理想に近づきつゝある事を認むるものなり。國民たる者之を忘却して可ならんや。正に大に其の文明の爲に寄與する所なかるべからず。

我が國民に斯の如き高尚なる理想を鼓吹する事極めて大切なり。理想なくんば死すべし。——埃及の例。

6. 文部省に對する忠告

1. 宗教に對する偏見を捨て、其の學校に公平なる處置をなすべし。
2. 官立學校に宗教の感化を自由ならしむべし。——例、佛國の摸倣の危險。

(終)

教育と宗教

〔明治卅五年八月廿四日本郷中央會堂に於て演説〕

（演説草稿、青罌紙、毛筆書）

近年我國青年の腐敗は殆んど其極に達し、新聞に雑誌に醜聞怪説紛々として應接に追なからんとす。是れ皆に識者をして長大息せしむるに止まらず、眞個志士の深慮を要すべき緊切の大問題たらずんばあらず。現今の學生の都下に在る者約五萬人、内一萬八千五百人は一定の學籍なき者、次に學籍あるも下宿屋の食詰たるに過ぎざる者二萬、残る僅に一萬一千五百人許が眞實學生らしき者なりと云ふ。曩に警世記者當今の諸名士に向つて、青年腐敗の原因及び其の救治策に就きて意見を徴したることあり。其の原因五ヶ條ありしが諸家の意見殆んど一齊に一致したる者二つあり。一は社會有力者の腐敗なり。即ち先輩と呼ばれ公人と稱せらるゝ政治家、學者、軍人、紳商等が蓄妾淫逸殆んど度なく、之を見聞する青年をして益々亂行を逞しうせしめんとする有様なりと云ふこと。二は社會全體腐敗せるが爲に、其の社會の一分子たる青年も勢ひ境遇に感化せられて腐敗せざるを得ずと云ふこと是なり。蓋し我邦の維新の革命程人心の紛亂を來したるもの、他に其例なかるべし。數百年間の封建制度を根柢より破壊して、王政復古を成せる政治上の革命に止まらず。之と共に西洋文明を輸入したるが爲に風俗習慣は勿論、宗教道德の上に大なる動亂を及ぼせり。尤も政治、法律、兵制の如き、稍整理の緒に就きたりと雖も、國民の生命たり元氣たるべき宗教道德の大體に

至ては未だ定まらず、尙混沌たる有様にあり。新舊思想混亂の結果、實に今日の如き不整理にして腐敗極まれる社會を現出せしめたるものなり。且つ西洋の物質的文明と共に、明治の初年吾邦に注ぎ來れる思潮を観察するに、多くはルーソー、ベンザム、ミル、ヒューム等に依りて唱道せられたる懷疑説、實利主義、快樂説等の倫理思想にして、非常なる勢力を以て我邦の識者政治家の思想界を支配したり。十八世紀の末葉、獨逸に於ては一新主義の一世を風靡する所となり、感覺説、快樂主義は一般に唱へられて、上下を擧つて道德地を拂ひ、淫風奢侈の風天下に吹き荒み、眼も當てられぬ有様を呈せり。政治的革命の勢に乗じて、以上の如き不健全なる倫理思想を歓迎せる我邦に於て、今日の如き道德の亂雜を見るは怪むに足らざるなり。國民の精神界に健全なる革命を喚び起して人心の改善進歩を計らすんば、邦家の運命危殆に瀕せりと云はざるべからず。而して此の大なる事業を成就するの法は、主に教育と宗教の力に依らざるべからず。教育家、宗教家の任豈重しと云はざるべけんや。陸實氏警世記者に語りて曰く、

只今の學校では知識は教へるが、徳性涵養には何の效もない。故に私共は家庭の上の感化で自分の子弟を善く育て、社會の汚風に染まない様に心懸くるより外はないが、併し折角の家庭教育も往々實際の社會教育で破らるゝのは、實に遺憾の極みである云々。是實に今日の學校教育の状態とすれば、實に寒心すべき至りなり。數年前余關西の一地方に在り、其地の師範學校の如きは倫理科の教授其人なきが爲か、代りに憲法學の講議を一俗吏に囑託して僅に時間を補ひ居たりき。要するに、今日の日本の教育界に明々然として

蔽ふ可からざる大缺點は、學生の品性陶冶に冷淡なるに在り。余は教育家は誠に教育の目的を知るや否やを疑はざるを得ず。

試に彼等に向つて教育の目的如何と問はゞ、教育とは、人間が天然に具備する諸の能力を適當に發達せしめて圓滿なる人を作るに在りと云はん。其答や好し。然れども圓滿なる人とは、徳性の發達を主とするにあることを記憶せざるべからず。輒近獨逸の教育界を風靡するヘルバルトの教育説の如きは、人は天然に具備する諸能力を發達せしむべきは勿論なりと雖も、徳性の發達を以て終極の目的とせざるべからずと説くにあらずや。彼の天然派教育主義の唱ふる所を見ても、徳性の發達に重きを置くに於ては、此の二者共其の根本の主義より云へば見解上差別あれども、孰れも徳性の發達を以て教育の主眼に大關係あることを唱ふるを見れば、教育と徳性とは到底分離すべからざること、瞭々火を睹るよりも明かなり。

然るに今日の教育家は如何。眞實に品性の陶冶を眼目として青年の教育に盡瘁する者幾人ありや。今日の教育は文字教育なり。實利主義教育なり。斯の如き教育は金力萬能主義の商人や、快樂を追求して淫逸度なき人民を産する事を得べし。或は所謂阿世的誇學者を出す事を得べし。而も高潔なる士人、堅實なる人民・眞理の爲に斃れて後已む底の學者を斯の如き教育界より望むは、瓦礫より眞珠を求むるが如きのみ。俗的教育、俗的文明、是れ當代の叫なり。尤も斯の如き學風の頹廢を痛嘆して、精神的教育の必要を唱ふる者なきに非ざるが如し。此輩の説く所を聞くに、物質以外に着眼せざるは俗なり。實利以外に求むる所なきは陋なり。人は宜しく品性を涵養

して清潔なる生涯を送らざるべからずと云ふ。然れども更に進んで其主張を叩けば、曰く、徳性は人生の基礎たらざるべからず。然れども徳性は徳性自身を以て基礎とすべし、決して宗教と關係すべからずと。此流の論者は西洋にも往々見る所なれども、是れ決して新説に非ず、古代にも其の例ありて歴史は明かに失敗の斷案を下せり。

希臘人は元來徳性と宗教とを離すべからざるものとなせり。彼等は神を以て人間の徳性上の義務及行爲の守護と考へたり。人の家族的生活も、將た又社會の生活も、天然或は境遇の定むる制限を守るに非ざれば存在する能はず。之等の制限を守るは徳性にして之を輕蔑するは罪惡なり。而して神は之等を犯す者の復讐者なりとせり。プラトンの時代迄は、希臘の徳性は尙宗教的性質を存せり。彼の神に關する觀念の如きは極めて高尚なるものにして、人間の此の世に於ける生涯は天上の神を以て標準と爲し、之に依て定めざる可からずとなせり。アリストートルに至りて全く徳性と宗教との關係を斷絶せしめたり。彼はプラトンの所謂『デバイン、アイデア』を否定し、人間の行爲は、社會の外に他の超自然的の者に對し關係を有するものに非ずして、人間自らの天性より發すべきものなり。借人間の天性は國家に於て最も適當なる發現をなすものなれば、徳性は國家との關係の中に没せらるべし。故に徳性は必然の上より政治的の性質を表はすものなり。蓋し徳とは政治的公義なりと。是れ實に當時の希臘人の輿論にして、アリストートルに依りて代表されしなり。茲に至つて徳性と宗教とは全く絶交せり。宗教は徳性より分れ、徳性は宗教より離れたり。其の結果は、不徳なる宗教と非宗教的無

能の道德となり、而して終に文化を誇れる希臘人は寥落に歸せり。是れ實に、宗教と道德とは互に車の兩輪の如く、相俟つて始めて眞の勢力と成るを示すものに非ずや。蓋し健全なる道德は眞の宗教より出で、眞の宗教より流るゝ道德は健全なる道德なればなり。

試みに兩者の關係を論ぜんか。(1) 動植物界を觀察するに、一の著しき現象を認む。即ち生物は凡て向上の天性を有する事是なり。換言すれば、彼等は完全に向て發達しつゝある事なり。初めは一粒の麥の種子に過ぎず。之を土に植ゑ日光と雨露の適當なる養を得せしめば、やがて芽を發し、莖を生じ、葉を出し、遂に完全なる實を結びて終る。初めは微細なる一萌芽に過ぎず。次第に生長して薔薇となり、絢爛たる花を開きて凋落す。一個の卵子あり。母鶏之を抱けば暫くして孵化し、體成り、足生じ、羽生へて、遂に一個の完全なる鶏と成る。若し青麥にして實を結ばず、薔薇にして花咲かず、卵子にして孵化せずんば彼等の生存に果して何の意味ありや。幸に宇宙經濟は斯の如き沒意義を許さず。轉じて人間界を觀察するに一の奇異なる現象を認むべし。余の知れる前途有望の一青年あり。彼は學業に勵み、道德を重んじ、孜孜として修養を懶る事なし。然るに何ぞ圖らん。一朝病に侵され最早恢復の希望なくして、空しく病牀に呻吟せり。臨終の日、余は其の傍らに侍して看護し居たりしが、最後の息を引取る數分前叫んで曰く、嗟乎、余は完全の品性に達せん事を欲すと。蓋し其の意、余は今に至るまで品性の修養を務めたり。然れども幾多の弱點と罪惡とは尙心中に存して去らず。今や此の不完全なる心靈の儘にて人生を辭し去らざるを得ず。遺憾何ぞ堪

へんと云ふ意なるが如し。余之に應じて曰はく、失望する勿れ。君の前途には永遠の存在あり。君は今より永遠の世界に入りて益々品性の發達を爲す事を得べしと。彼乃ち首肯し、莞爾として病牀を繞れる友人等に別を告げて瞑目せり。而して其の形骸は火葬に附せられ、空しく北邙山下一片の煙と化せり。嗟乎、是れ實に人生の一大疑問ならずや。漸く莖を生じ葉を出せる薔薇が、其の最後の目的たる花を開かずして枯れたるが如し。若し斯の如き道德的の生涯にして、果して煙と共に消失するが如き事あらんか。そは餘りに無意義の人生ならずや。彼は道德の完全なる理想を抱いて空しく中道にして挫折せり。故に此の道德上の向上心をして無意義に歸せしめざらんには、靈魂の無限の生存を認めざる可からず。吾人は無窮の生命を有して始めて能く、道德上完全なる生活に達するを得べし。既に道德的向上心は、必然の要求として靈魂の永遠の生活と發達とを承認せざる可からずとせば、道德問題は自然に宗教問題と密着の關係を有する事を知るべし。

(2) 吾人道德を修めて聖善の人格に進まんとする時に當り、聖善夫自身を手段として、只管幸福を求めんとするが如きは賞すべき道德にあらず。是れ一種の實利主義の道德なり。宗教に於ても亦然り。彼の心の改善如何を顧みず、徒らに念佛を唱へて極樂淨土を念願するが如き、或は己が品性の進歩如何には更々關心する所なく、基督を信仰さへすれば天國に救はるべしと稱する宗教家の信仰の如きは、素より卑しむべき方便主義の宗教にして尊敬するに足らず。然れども徳の修まれる状態にはおのづから幸福の伴ひ來り、不徳には禍の

伴ふべきものなりと云ふは、承認せざるを得ず。鳩毒を飲んで従容として死に就けるソクラテースと、石川五右衛門とは同一の運命に至るべしとは思惟する能はず。善人は終に福を享け、悪人は終に禍を受くべきものなりと云ふ事は、道徳上の信念にして吾人の放擲し得ざる所のものなり。然るに人世の實際を觀れば、福德の二者屢々調和せずして、善人却つて困厄に逢ひ、悪人却て福を享くるもの多きは否定すべからざる事實なり。即ちカントが教ふる如く、人世に於ける斯の如き不調和を攝理して公義なる鞠(?)を司とり、善を賞し惡を罰する全能なる神の存在を認めずんば、人間の意識の奥底に潜める道徳的要求を満足せしむる能はざるなり。茲に於て又道徳は自然に宗教の領分に入るを見るべし。道徳にして若し永遠の世界に連接する事なくんば、決して萬古に互る能はず。カーライルが義と不義とは東と西と相距るが如く遠しと道破し、ミルトンが『コーマス篇』の中に

“But evil on itself shall back recoil,
And mix no more with goodness, when at last
Gathered like scum, and settled to itself,
It shall be in eternal restless change
Self-fed, and self-consumed: if this fail,
The pillared firmament is rottenness,
And earth's base built on stubble.”

惡は必ず自ら退きて
善と混ざることなく、終には

泡の如く集められて
遠へに自滅に歸すべし。
若しこれ過ることあらば
蒼天の立てる柱は朽ちて
大地の基は刈株かりかぶの上に築かれしなり。

と歌ひたるが如き觀念は、到底世俗的の道徳より發し得べきものに非ず。曾て加藤博士が淫竇は社會上弊害あるが故に素より賞す可からずと雖も、哲學上何故に、罪惡なるやは説明する能はずと論じたるが如き倫理説は、則ち世俗主義道徳の産物なり。カーライルは利害に依りて善惡を判斷し、天秤の輕重に依りて道徳の標準を定むる實利主義の倫理を評して、彼等は天秤を以て枯草を量るが如くに人の靈魂を量るものなりと云へり。斯の如き道徳は、如何で人の良心を命令して之を感化するの權威を有せんや。宜なり、今日の青年が強烈なる情慾の勢に克つ能はず、滔々として放蕩淫逸に赴く事や。獨逸の倫理學者ルタルト曰く、上帝を以て道徳上の最高審判者と爲す事を廢せば、之と同時に凡ての人類に服従を命じて遁るゝ能はざらしむる所の道徳の最高法廷は中止すべし。茲に於てか、正義は最早絶對のものに非ず。一般の人間社會の基礎は破壊すべし。何となれば百般の人事は正義に基ゐし、而して正義の觀念は神に基ゐすればなりと。

(3) 世間の普通倫理と宗教的道徳の内容とを對照するに、甚しき徑庭なきが如し。かの基督教道徳の最大教訓と稱せらるゝ愛敵、博愛、謙遜の如きは、其性質に於て從來の倫理、宗教のそれと同一に

論すべからずと雖も、儒佛其他の教に於ても仁愛、謙遜、寛容の徳を説かざるに非ず。之等の徳に關して随分奥妙にして高尚なる教訓を有せり。彼の教育勅語の如きは我が國民道德の模範として間然する所なし。然らば宗教の道德に與ふる效益に就きて、尙考究を要すべき所あり。『神の自顯論』の著者博士ハリス曰く、宗教なき道德は例へば乾きたる堅き岩の如きものなり。神の杖に觸れて始めて生命の水滾々として流れ出づべしと。然り世には自修鍛錬の工夫に依りて、道德の或る程度に達する者なきに非ず。彼のストア哲學の如きは、羅馬時代に於て幾多正義の士を出せり。或は陽明學の如き、禪學の如き、古來斯の如き士人を造るに於て多少成功したるが如し。然れども大概勇氣とか義烈とか云ふ徳の或る部分にして、所謂乾きたる堅き岩の如き道德なりしなり。生命と愛の水滾々として流るゝが如きは、到底見る能はざる所なり。而も斯の如き義人烈士は寧ろ稀有の産物にして、凡俗の輩に至りては、到底高尚なる道德を修鍊するの力なく、即ち道德界の行路難に絶望して、遂に肉慾を追つて醉生夢死するもの比々皆然り。然れども斯の如き輩も、一旦全能にして慈愛なる天父を認むるに至らば、茲に『インスピレーション』生じ、希望湧き、漠々たる曠野に彷徨し、剩さえ飢渴に逼まる旅人が、圖らずも清流潺湲たる一條の川を發見したるが如き趣あり。則ち行く行く清泉を汲みて渴を醫し、前途多くの希望を懷いて、茫漠たる人生の行程に歩武を進むる事を得べきなり。キリスト曰く、渴かば吾に來りて飲めと。又サマリヤの婦に告げて曰く、凡そ此の水を飲む者はまた渴かん。然れども我與ふる水を飲む者は永遠に渴く

事なし。且つ我與ふる水は、其中にて泉となり、湧き出でて永生に至る可しと。此世の道德の井より汲む者は、また渴かん。然れども完全なる宗教より生命の水を汲む者は、人生の渴望を充たす事を得べし。

斯く論じ來れば、道德と宗教とは其の根本に於て、緊要なる關係の存する事を知る可し。前段示したる如く、教育の主なる目的は人の道德性を發揮するに在りて、而して其の道德なるものは、宗教と密接の關係ありとせば、自然の結論として、教育と宗教とは相關聯するものにして、教育家が宗教を等閑に附する事能はざるを認むべし。然れども我邦の如き、幾多異色の宗教互に城郭を構へて割據するが如き時勢に於て、政府に向つて其の學校に宗教的德育を強ふるが如きは、随分無理なる注文なるやも知るべからず。唯望むらくは、方今の學風の益々頹廢せんとする時に當り、偏狹なる見解を抱く事なく、大學を始めとして下小學に至るまで、其の教師及學生の宗教に就きて、尤も公平なる態度を持し、且つ其信仰を尊敬して、品性の修養を全うせしめん事を望むや切なり。而して世の青年に向て勸告したき事は、深く道德宗教の問題に留意して、人生の意義を悟り品性の修養を力められん事是なり。

渡歐記(シカゴより) (抄録)

(ポケット用手帳、細字万年筆書、一部紫鉛筆書)

明治四十四年 七月廿四日 (月)

午後三時三十分友人等に送られてデーアボルン・ステーションを出發渡英の途に上る。汽車中に一夜を過ぐ。

七月廿五日 (火)

午前九時加奈太トロント市着。ナイヤガラ遊覧船 Chippewa 號にてナイアガラ見物に行く。此日天氣快晴、天下の壯觀を見て快甚し。『サスペンション』橋を渡りて亞米利加側の瀑の近傍に到り、親しく偉觀を眺む。唯憾らくは、前日來の風雨のため瀑布水濁れる事なり。雲間夕陽光を放つて河上の汽船虹の裡に在り。即ち戯れて句を爲す。

『ナイヤガラ』虹のうちなる汽船かな

午後十時十五分トロントの港に着、夫れより一旅館に投ず。館の名は Palm House と云ふ。

七月廿六日 (水)

ビクトリヤ大學を參觀す。余の舊師多くは同大學の出身なり。昔を偲ぶ。

本國に於ては大風ありて東京横濱の邊に死傷者夥しきの報を新聞にて讀む。午前十時三十分發車、クベックに向ふ。

七月廿七日 (木)

午後三時二十分頃クベックに着。Empire Rooming House に投宿。(室料金一弗の定めなり)。食事を了りて散策。クベックは丘陵の上に位して眺望實に佳なり。セント・ローレンス流に臨みて對岸レビスを指顧の間に見るべし。市の人口四萬一千有餘、大多數は佛人の子孫にして佛語を語る者多く、子供等の如きは英語を解せざるもの寧ろ夥しき有様なり。學校は佛英の二種に分れて佛人は兒孫を佛語學校に學ばしめ、英人は英語學校に學ばしむ。州議會に於ては悉く佛語を用ふる由。人民概して身長短矮、余の如き者却つて丈高き方なり。余の得意想ふべし。夕には劇場に行く。木戸十錢なれども、堂と云ひ藝と云ひ、實に惜しき程立派なり。

七月廿八日 (金)

午後一時二十分頃馬車にてドックに來り乗船す。

七月廿九日 (土)

船中 クベックよりリヴァプール迄海上二千六百卅三哩なり。航程六日を要すべし。但し二日間は河上にして海上は四日間なり。

七月三十日 (日)

午前六時三十分起床。冷氣日本の十一月頃の如し。甲板上の散歩には外套なくては叶はぬ位なり。寒暖計三十八度位ならんか。

午前九時半田島君甲板より降り來て氷山の浮流するを見よと告ぐ。

上り見るに左舷に二個右舷に三個、の冰山を認む。大なるは宛然一小島の如し。

正午クベックを出帆してより航程七百八十一浬。北緯五十二度六分、西經六十三度五十三分の位置にあり。

七月三十一日（月）

船中 波高し船酔の心地し、一回食を廢す。

八月一日（火）

船中 引續き心地よからず。朝食午餐を略す。

八月二日 船中

八月三日（木）

昨夜風浪甚だ高く、快く眠らず。朝七時過起床。天氣晴。

九時頃、右舷に雲煙鬚の間アイルランドの連山を望む。十一時頃に至つては一層明かになりて美景なり。左舷にはスコットランドの山々もかすかに現はれ始めたり。快甚し。少年の時代より夢寐の間に恍惚たりし大英國の眞容に接するの始めなり。

航程四百九海里、目的地リヴァプールを距ること百七十九浬なり。此夕十時半、船はリヴァプールに入る。

アイルランドの海岸多くは山又は丘なり。樹木少くして山上大概耕作して殆んど餘地なし。

八月四日（金）

（リヴァプール上陸）

十時の汽車にてチェスターに来る。リ市を距る僅かに十五哩也。チェスターは、ウェルス州の境に在りて、中世時代羅馬の築ける城砦の存する處、また中世時代のカセドラル及びセント・ジョンズ教會（十二世紀の建立）等、英國中最も古色蒼然たる記念を存する地也。午後五時十分の汽車に搭乗しパーミングハム市に到る。

チェスター見物中最も余の感興を引きたるは 1. カセドラルの建築の壯大と彫刻の美。 2. 此の寺院の傍なる城壁の上に建てる『フェニクス』塔(チャールス1645年九月廿四日此の塔の上に立ちて彼の軍のロートン沼地に敗れたるを見たりと云ふ。) 3. チェスター城外の丘に在る曾てクロンウエルがチャールス王との戦争の時同氏の本陣として用ひたる小さき二階建の石小屋等なり。但し之はパーミングハムに来る時車中より見たり。

八月五日（土）

午後二時三十分の汽車にてストラットフホールド・オン・エーヴンに向ひ三時四十分頃着。直ちにセークスピーア・ホテルに馬車にて行く。直ちに名所の見物に出掛けて沙翁誕生の家を訪ふ。當時の状態を存して昔を偲ぶの情に堪へず。天井、窓、硝子、壁等に曾遊せる知名の文學者等が樂書せる名あり。ロバート・ブラオニング、カーライル、スコット其他あり。庭園を逍遙して後ちストラットフォード・チャーチを尋ね、氏の埋葬されたる所を見る。妻アン女も

其傍に葬らる。皆會堂の内に在り。堂は百六十三ヒート、高きスパ
 イアを有する立派なる建築にして、1764年に舊堂を毀ちて建てしもの也。之を去りてオールド・タウンを過ぎ沙氏が幼時學べるグラン
 マー・スクールに来る。今尙學校として用ゐらる。其他ニユーブレ
 ース及び記念劇場、ファウンテン等を見て一旦歸宿。晚餐の後記念
 劇場に行きてターミング・オヴ・ザ・シユリユエの劇を観る。好個
 の劇也。

八月六日（日）

十時三十分發オックスフォードに向ふ。ハットン及レミングトンの二個所にて乗換午後一時頃着。オックスフォード大學校の中ユニ
 ヴァシター・チャーチ、クインズ・コレヂ、モードレン・コレヂ、植物園、ユニヴァシター・コレヂ、クライスト・チャルチ、
 等を見物し、午後七時二十分辭してステーションに向ひ、九時三十分倫敦市内パッデングトン停車場に着。

八月七日（月）

市内の見物に行く。ピッカーデリー・サーカス、トラファルガー・スクエア、議事堂、ウエストミンスター寺院。ウエストミンスター橋、樞密院、大藏省、首相官宅、藏相官宅（共にダウニング街に在り）拓植務省、外務省等を見てパッキングハム公園を逍遙し、宮殿及び此頃除幕式を行ひたるビクトリア女皇記念碑を観てハイドパークに赴く。途中ウエルリントン公記念碑と恩賜館を見る。ハイド

パークに於ては軍樂隊の演奏ありて聴衆随分多し。芝生に坐して歡談數刻歸路に就く。公園の堺には社會主義者、ヒュマニタリヤン、基督教等の路傍演説ありき。

八 日（火）

ブリテシユ・ミュージアムを観、スカラ座に赴き、戴冠式の活動寫眞を観る。

九 日（水）

午前友枝君來訪。共に領事館に赴き東京より手紙を受取る。夫よりウエストミンスター寺院に來りしが、内部の一部を観てハイドパークを覗き、夫より歸宅三人して牛肉のスキ焼を食ふ。

十 日（木）

ピッカーデリーのアルハンブラ座に赴く。

十一 日（金）

テンプル・チャルチ、リンコルン・イン等に行きデッケンス、サッカレー、ブラックストーン等の昔住みし家を見る。セントポール寺院を観る。寺院は倫敦第一の寺院也。現在の堂は1675年の建立にかゝる。1710年に完成す。時價八百五十萬圓の建築費を要せり。其費用は寄附金に依らずして石炭の入港税を以てせり。

寺院の屋根の上より全市を下瞰す。

十二日 (土)

カーライル・ハウスを訪ひ偉人の當時を追懐し、夫よりケンシン
トン公園の傍に在るビクトリヤ及アルパート博物館、ナチュラル、
ヒストリー博物館、サイエンス博物館等を縦覽し、ロンドン大學の
外觀を見て其宏壯なるに驚き、ビクトリヤ停車場より水晶宮に行く。

感想

カーライル家に於て最も興味を覺えたるはエマーソンが氏を訪れ
たる時眠りたる室、テニソンとカーライルが共に煙草を喫しつゝ談
話したるキッチン、佛蘭西革命史の原稿(燒失せる第一原稿の斷片)
獨逸前帝ウイリアム陛下より贈れる書翰、ビスマルク公よりの書翰、
カ氏の用ひたる一尺ばかりの長煙管、氏の毛髪の一部等也。家はベ
ースメントを加ふれば五階にして氏の書齋也。外よりの音響を防ぐ
ため壁を二重にせり。二階も書齋なり。

十三日 (日)

午前十一時近所のトリニター教會に詣づ。説教の題は路加傳十章
廿五節の『永生を嗣ぐ爲には我何を爲すべきや』也。徒らに形式に
拘泥してキリストの精神と實行との乏きを排し、聽衆をして大に悟
る處あらしむ。此日午後二時よりナショナル・ギャラリーを観る。

十四日 (日)

Mudies Library (ニュー・オックスフォード) に於て巴里、伯
林等の案内記、露語、獨語獨修書二部、ローウエル中將著ボーイ・

スカウトに關する書一冊等を買ふ。夜エンパイヤ座に行きてシルビ
ヤを観る。

十五日 (火)

午前は日頃の疲勞を休めつゝ室に籠る。午後兼ての約に従ひ、オ
ーガスト・ジョンス夫妻宅の茶に行く。其前野田君の宅を訪問す、
七時頃歸寓。友枝君來訪。

十六日 (水)

ウインゾル宮殿拜觀に行く。倫敦を去ること廿三哩。恰もステー
ト・ルームの公開の日にして十分縦覽の快を得たり。宮殿の壯麗、
美術の珍、嘆賞の外なし。夫よりイートン校に行く。校は1500年代
の創立にして幾多の知名の人物を出せり。ウエリントン公、ピール、
フォックス、其他隨分多し。

十七日 (木)

午前十時ボーイ・スカウト本部に赴く。然るに書記其他の樞要な
る人々は休暇の爲め當分不在。已むを得ず書籍雑誌などを求めて歸
る。但し次の日曜日東クロイドンに於て執行するスカウト一部隊の
演習に招待さる。

十九日 (土)

午前在宿手紙を書く。北條校長、ミーチャム博士、小夏、原宿、

長屋君、春山、小林、杉森、栗原、倉兼、鈴木愿等の諸氏へ。

午後レゼント公園に逍遙。ゴールドスミスがビカー・オフ・ウエークヒールドを書ける家を見る。

二十日 (日)

倫敦より十哩ばかりなる Croydon に赴く。兼てボーイ・スカウト本部よりの招待に應じて該地 “Ram” Patrol of the 7th Scottish Troop の演習を參觀せんが爲なり。生憎休暇中の事とて所屬部員八名の中僅に五名のみ在り。部長モルトン氏を加へて六人なり。丁度晝食のため仕度中なり。パン三片とジャガ芋の御馳走になる。キャンプ生活の質素想ふべし。食後休憩してより余の爲に演習を試みたり。最初にカートの車輪を外して垣を越し、再び輪を拵めて然るべき地點に引き行き、車の各部を分解して種々なる應用を示し(梯子を作り又階段を作りて上より旗を振りたり)再び組立て元の地點に復して了り、夫より信號旗の演習を行ふ。部員二分隊に分れて東西の二點に立つ。部長余にメツサーチを書けと云ふ。乃ち戯れて “Send me a cow” と書く。部長之を東の分隊に渡して其意を信號旗にて西の分隊に傳送せしむ。西容易に之を解し紙片に認めて余の許に持來る。正しく原文の如し。部長次に其答として “One that gives milk” と書き更に西より東へ傳へしむ。東亦直に之を譯して持來る、正確なり。今度は信號旗を用ひず手を振り動かして西より「今日の天気模様如何雨降りとならずや」と尋ぬ。東直に答へて「余は此天気模様を察して雨には成るまじと思ふ」と返答す。

通信極めて自在也。時夕に近く汽車の時刻も逼り來る。部長余を停車場迄見送る。ヴァクトリア・ステーションに着せるは五時半頃なりき。クロイドンは閑靜なる林地也。オーク、松、栗、エルム、檜等の古木鬱蒼として茂り、遠望すれば綠滴るばかりなり。羊、牛などの群其間のパステユアに逍遙して草を食ふ光景實に優美なり。

此日の部隊に屬する三人のボーイ・スカウト停車場の近傍より余と共に行き東道の主人となる。彼等皆好個の青年、親切至らざるなし。余感激の情に溢る。

二十一日 (月)

午前オックスフォード街を逍遙して古本屋をひやかす。シュミットのセークスピーアの字彙(代價貳十五志)を見付けて歸る。其序にホルボルン街に近き細町にて Verity のミルトン著作物の註解を三冊買ふ。又洋服一襲を注文す。代價四十五志(邦貨貳十貳圓五十錢)午後スカウトの書を読む。

二十二日 (火)

午前スカウト本部に赴き大尉エー・デー・ウエード氏に面會。スカウトに關する問答を爲す。氏懇ろに説明す。明日再訪を約して歸る。午後レゼント・パークに行きてスカウト憲法を研究す。

二十三日

午前スカウト書研究、午後本部に赴き再び大尉ウエード氏に面會。質問を説明し呉れたり。夫よりウインブルドンのドライバー氏を訪問せるに生憎不在。然し同地スカウト・アシスタントたるクロス氏に逢ひたる處、此晚スカウトのゲームある由を聞いて其儘止まる。午後六時三十分、スカウトの集會に臨む。夫より共に一哩半ばかり離れたるローハンブトンに行軍、偵察演習の遊戯をなし、歸路も同じくそれを試みつゝ出發地點に到着せるは午後九時半頃なり。恰も停車場附近に労働黨の政治的路傍演説ありて聴く。

廿四日(木)

レゼント・パークの公園なる動物園に赴く。

廿五日(金)

バトルシー・パークを逍遙し、テムス河の橋を渡り(チェルシー橋也)チェルシー・エンバンクメントを散歩しつゝ、昔はカーライルが此の河邊を逍遙せるを追想せり。

廿六日(土)

サウスヒールズのボーイ・スカウト運動會に行く。リチモンド・パークに於て先づフラッグストーキングを執行の筈なり。意外に時間を要する爲勝負を見ずして辭し去る。余は八時四十五分ビクトリヤより發車す。

廿七日(日)

午前七時半頃サン・ラザール停車場へ到着。始めて巴里の都に入る。十時半頃市内の見物に出掛けたり。先づルーブル宮に行く。二日間休館の由(聞く處によればジョーコンドの名畫四日以前に盜難ありて館内整理上の都合なり)ガンベッター記念碑、テューリエー園を逍遙し、オペリスク塔を見、シヤン・ゼリゼーに來り、グランパレーに於て開館中の美術展覽會を觀、夫よりバスに乗りて凱旋門に來り、樓の頂に登りて市内を瞰望す。全市の光景悉く双眸に集まる。樓上にて繪葉書を購ひ母、小夏、マクリントック、友枝君等へ出す。下りて暫くブロンニュ街を散歩してマラコユフ街に入りビクトル・ユーゴー記念碑を觀、トラゴデロ・ハレーに來る。先づ彫刻館を見たり。園内を逍遙して下りて彼の世界第一の高塔エッフェル・タワーの處に至る。塔はシヤンプ・ド・マアールに在り。暫く遊んで歸路に就く。

廿八日(月)

午前ノートルダムに赴きその建築を嘆賞し、夫よりサン・ミシエル街を過ぎてホテル・ド・クルニーを觀る。パンテオンに到る。生憎八月中閉館の由にて、其後なるサン・エテニンを觀る。次にルキセンベルグ・パレーに來る。美術館を縦覽せんと欲したれども、此處も亦日曜日のため開館せず。其前の小店にて繪葉書を購求し、夫より美術學校を觀、次に國會議事堂に入る。衛吏懇に案内し呉れたり。夫よりセーン河に沿ふて歩みつゝアレキサンドル三世橋に

到る。蓋し巴里第一の橋也。夫よりホテル・ド・インバリツドに來りたれども時刻既に閉館なり。ドーム・オブ・ナポレオンのドームを暫く眺めつゝ歸路に就く。

廿九日（火）

午前ルーブル宮に赴き美術館を觀る。世界最大の傑作枚舉に遑あらず。古今美術の粹、皆此處に集まると稱すべし。午後四時頃館を辭してオペラ街を逍遙し、試にオペラ・ハウスに至りて此夜の切符を求めんとせり。生憎明日より始まると云ふので求めず、寓に歸り十時發の汽車にて伯林に向ふ。

三十日（水）

午前八時コロ市に到着して有名なるカセドラルを觀る。ゴシツク風の寺院としては世界最大のものとして知らる。院内に入りて親しく見る。出でゝライン河畔に行きホーヘンゾールン橋を渡り沿岸の光景を賞す。十時發車。

午前は車中に於てベルリンを研究し或は窓外の光景を觀つゝ、午後に至り七時少し過ぎて伯林に入る。

三十一日（木）

午前ウンテル・デン・リンデンを逍遙し Zeughaus を觀（特に注意を引きたるはナポレオンがウオターラーに於て敗軍の際取られたる例の中廣き帽子、ピストル二挺、幾多の勳章、ビスマルクの着用せる軍服、ウキルヘルム皇帝の軍服、劍等也）皇居の前を過ぎド

ムの附近を徘徊し、再びリンデン街に戻りて一と先づ宿に歸る。

午後ティーアガーデンに赴き、帝國議事堂、ビスマルク記念碑、凱旋塔、モルトケ記念碑等を觀て園内を逍遙し、ブランデンベルグ門を通りてウンテル・デン・リンデンに入り、午前見ざりし部分を觀つゝ夕刻歸寓。七時半帝國オペラに行く。大枚十マルクを氣張りにオルケストラに接する座を占む。題は『ヒデリオ』と云ふてベートーベンの傑作也。一少婦が入獄中の夫を懷ふの餘り男装して獄司の娘に懸想せる風を裝ひ、遂に獄司の信用を得て共に獄に入りて夫に會ひ悲喜交々至ると雖も、之を現はすを得ずして煩悶せるが、遂に夫が敵の爲に刺されんとする處を、身を挺して夫を救ふと云ふ意也。貞操の情溢れて觀客を泣かしむ。十時解散。

九月一日（金）

午前皇帝カイゼルの觀兵式より還御ある由を聞きて、ウンテル・デン・リンデンに赴き一時間餘を待ちて漸く通過せらる。馬上なりし故に親しく拜するを得たり。皇子も亦先登として通過せらる。群衆幾萬、堵の如し。午後大使館に赴く。退廳后にして邦人に逢はず。官報を閲讀して去りティーアガーデンを逍遙して後、國立ミュージアムに至り、諸畫伯の作を觀、オールド・タウンに入りてルーテル記念碑を觀、諸處徘徊して歸る。八時二十分頃なりき。

二日（土）

正午時頃ジムナジウム校長を學校に訪問し、獨逸の學制を尋ね又

序に語學教授法如何等を開く。十一時二十四分の汽車にて露國モスコーに向ふ。獨旅也。

英國のボーイ・スカウトを観る

「國民雜誌」明治四十五年四月十五日號所載

明治四十四年八月六日、余は米國より歐洲を経て歸朝の途次、倫敦に入りぬ。流石世界の大都會なれば、日々觀光に忙殺せられ居りしが、十二日日本大使館に赴けるに、學校よりボーイ・スカウト運動の實況取調を委囑する由の報知に接したり。余も豫てより其の實際を視察せんとする意ありて、未だ之を果すの暇なかりしが、右命令に接して夫々調査に着手せり。然るに時季恰も盛夏にして、都人士は外國或は海濱に暑を避くる者多く、市中に於てはボーイ・スカウトの演習の如きものも容易に觀るの機會なし。兎に角ボーイ・スカウト本部を訪問するに如かずと考へ、文部省留學生友枝氏と共にウエストミンスターなる本部に赴けり。蓋し該團の創立者にして總裁たるベーデンパウエル中將又は氏の秘書に面接して、親しく實況を聞かんとせるなり。折悪しくも中將は瑞典に漫遊中にして、九月に入らざれば歸京せずと云ふ。幹事も亦出張中にして在らず。已むを得ず書籍雜誌數部を得て歸る。但し次の日曜日倫敦を距る二十哩ばかり東クロイドンに於て執行するスカウト一部隊の演習に招かる。

八月二十日（日曜日）朝約に従ひ、余は單獨にてピクトリヤ停車場より乗車してクロイドンに赴く。數日來の鐵道夫、船渠労働者の

大罷工のため市中及び郊外の光景、何となく殺氣を帯びて羈旅の客情を動かすものあり。十一時頃クロイドンの停車場に着するに、豫て余の爲に出迎ひを約せる一人のスカウトの影も見えず。場を出でて指定の地點に向はんとして數十歩を移したるに、街隅に立話する四五人の青年に逢ひて、スカウト演習の地は何處にあるやを尋ねたるに、彼等答へて曰く「そは郊外にして、其所に至るには道曲折して旅人などは到底容易に至ること能はざるべし。第七蘇國隊ラム班の演習、今朝舉行の事は僕等知らざりき。而も余等も他の部隊に屬するボーイ・スカウトなり。君のために喜びて東道の主人とならむと」云ふ。余乃ち厚く其の好意を謝して依頼す。五人の中二人は他の約ありて行かれず。三人の青年スカウトは、欣然として余を擁して郊外に出づ。其の年齢を尋ぬるに、年長者は十九歳にして幼者は十七歳なり。余等數多の垣を越え、牧場を横切りて漸く指定の地點に達すれば、パトロール員の隻影だに見えず。三人は余の爲に各符牒の奇聲を出して彼等と呼べども、林間に轉づる鳥の聲と山びこの外聞として何等の答もなし。蓋しクロイドンは幽靜閑佳なる林地なり。榿、松、栗、エルム、檜等の喬木老樹鬱蒼として茂り緑滴らんとす。羊、牛などの群、森と森との間の牧場に逍遙して草を食む光景、中々に優美なる風情あり。遙か向ふの樹蔭に見ゆる農家に行きてスカウトの演習の消息を試に尋ねしに、漸く彼等の所在を知ることを得。更に奥深く林間の路を辿り行くこと二十分ばかりにして、栗樹の側に天幕を見たり。スカウト・マスター、モルトン氏を加へて七人なり。丁度晝食の仕度中にて松の丸太を焚きつゝ各々アルミ

ニウム製の辨當箱様の器を以てスープを煮居たり。余の東道の主人たる三人のスカウト紹介の勞を執り、一々握手して挨拶を交換す。停車場に余を迎へざりしは、鐵道役夫のストライキの爲、此の日も汽車の運轉を中止せる由を聞きたればなりと云へり。余の至りしは實に意外の感ありしなり。時刻も早や一時過ぎなりしかば、案内者たる青年等は余に別れを告げて辭し去れり。余朝來の活動の爲に飢渴を覺ゆること甚だしきものありたれども、郊外の林丘、就いて食を求むる家なし。已を得ず彼等に乞ひて一杯の水を得て休憩しつゝ談話を交へ居たるが、暫くしてパン三片と煮たる馬鈴薯五個ばかりを持ち來りて余に薦む。余感謝して食ふに美味譬ふべきものなし。山海の珍味も何かあらん。玲瓏たる一杯の水は佛蘭西の葡萄酒にも勝りて甘し。食後十五分間ばかり休憩して、彼等は余の爲に演習を試み始めたり。最初に行ひたるは、荷車組立の業なりしが、天幕の柱として立てたる六尺程の樫木棒を抜き來りて、車の中心の柄となし、二つの輪を拵めて瞬く間に一個の荷車を作りて、或る地點に引き行き、此處に於て再び車の各部分を分解して種々なる應用を示し、再び組立てゝ元の地點に復して終り、夫より信號旗通信の演習を行ひぬ。班員二つに分れて東西に立ち、スカウト・マスター中央に在り。余もその側に在りしが、余に向ひて何なりとも傳達すべきメッセージを書けと云ふ。余乃ち戯れて紙片に「牛一頭を送るべし」と書く。マスター之を東の分隊に渡して其の意味を信號旗にて西の分隊に傳へしめぬ。西容易に之を譯して紙片に認めて余の許に持ち來る。正しく原文の如し。マスター次に「乳牛一頭を送るべし」と書

き、更に西より東へ傳へしめぬ。東又直ちに之を譯して持ち來る。正確なり。今次は信號旗を用ひず、手を振り動かして西より「今日の天氣模様如何雨降りと成らずや」と尋ぬ。東直ちに「余は此の天氣模様を察して雨には成るまじと思ふ」と返答す。通信極めて自在なり。

時既に移りて四時半の汽車の時刻逼り來る。茲に於て余は暇を告げて辭し去らんとせるに、スカウト・マスターは好意を以て停車場迄余に同伴し來りしかば、互に語りつゝ行く。スカウト・マスター、モルトン氏は三十歳ばかりの活潑にして親しむべき壯者なり。辯護士を業として随分多忙の身なるが、少年の誘掖に興味を有してスカウト・マスターとなり、一週中の土曜とその他數時間を割愛して少年武者團の爲に盡しつゝありと云ふ。渠曰く軍隊主義はボーイ・スカウトの本色に非ず。要するに青春の危機に臨める少年をして誘惑の境に入らしめず、其の天性を利導して愉快に品性を修養せしむるは本團の目的とする所なりと。

彼の其の部下の少年に對する態度を見るに、軍隊の士官の如く權柄振ることなく、十六七の少年と共に天幕の中に起臥して彼等を指導する様、恰も兄のその弟を庇護するが如し。余は竊に滿腔の敬意を彼に拂ひつゝ別れたり。

八月二十二日午前十時、再び本部に赴き、幹事に面會を求めたるに未だ歸らず、役員の一人大尉エー・ヂー・ウェード氏代りて余に面接し、余の質問に應じて懇に説明の勞を取り、且つボーイ・スカウト憲法及び二三の書を示して明日迄に読み來りて不審の點を質問せよと云ふ。乃ち明日再訪を約して歸寓。スカウト憲法を研究す。

八月二十三日午後、本部を訪問して再び大尉ウェード氏に面會し、數個の問題に就きて氏の説明を聽きたるが、茲に其の一二を掲げんに、余は若し少年武者團を假りに日本に組織するとせば、英國の本部隊と如何なる關係を有すべきやと問へるに對して、日本に於て組織するボーイ・スカウトは英國のそれと友誼上の關係の外、何等の交渉なしと答へぬ。余は又ボーイ・スカウトは三大綱領の一ヶ條にも云へる如く必ずクリスチャンとして神と君主とに對して忠義を誓ふを要するや、英國の如き基督教國に於ては之を凡ての入團者に適用することを得んかなれども、日本の如く儒、佛、神、基の四大教を混有する國柄に於て、之を應用するは困難なり。足下の意見如何と問へるに、氏應じて曰く、いかにも然り。其等の四教の一の信仰を凡ての入團者に強いるは不可なり、宗教は各自任意の信仰に委して可ならん、只君主に對して忠義を誓はしめば、充分なり云々と語る。

次に徽章の種類を具體的に説明せんが爲め、一人の十六七歳のスカウトを拉し來りて余の前に立たしむ。此の少年腕並びに肩に×のバッヂを掛け居たり。蓋し是れオール・ラウンド・スカウトと稱する模範生にして、六種類以上の技能試験に合格したる者にして、即ち救急、鍛冶、自轉者乗、信號旗通信、水泳、農業、消防、大工、喇叭、射撃、武道、機關、園藝等三十六科目の中、六科目以上を修めて其の證明章を得たる者なり。

余は本部を辭して直にウインブルドン行の汽車に乗る。蓋し此の日水曜日なるを以て該所のボーイ・スカウト俱樂部集會の實況を觀んと欲したるなり。然るに同日は、室内の集會を止めて一哩半ばか

り距れるローハンプトンに行軍して、偵察演習の遊戯を爲す山を聞き、余も其の行軍に加はる。此の團體は十四五歳より十六七歳の少年十八人ばかりなり。スカウト長はハントといふ壯年の人にして、會て四年間軍隊に關係せる經驗を有せる人なり。果然部下の少年に對する態度は、前の辯護士のスカウト・マスターに比較すれば、軍隊的の臭味を帶べるは、何人も認めざらんと欲するも能はざりき。但し此の人と雖も、本領の存するところは忘却し去れるに非ず、唯形式の比較的軍隊のそれに近きものを云ふのみ。却説一行の出發前二隊に分れて、余の加はりし隊は三十分前に發足してローハンプトン村の入口を守りて、敵なる他の一隊の闖入を防禦する任務に當る筈なり。該所に到りし頃は、既に日は西山に傾きて、暮色蒼然遠くより至る光景なりしが、各員夫々の要所を占めて油斷なく敵を偵察し居ること半時餘、余は部長と共に一高地に立ちて敵の襲來を窺ひ居たり。暫くして前方警報を揚ぐる聲あり。曰く敵は悉く既に村内に入りて占領を確實にせりと。衆皆顔色なし。部長茲に於て笛を鳴らして敵、味方全部員を集合せしめたるに、一人のスカウト曰く、先生余は足下の十歩以内迄近寄り、足下の後方を過ぎて村に入れりと。他の一人も亦彼の叢の蔭を通過し行きたりなどと云ふ。敵の敏捷想ふべし。歸路も偵察遊戯を試みつゝ行く。スカウト・マスターと余と班長と三人、暗に乗じて微行するを、他は皆分散して道に余等を要撃する筈なり。一老樹の蔭に一人のスカウトの潜み居るを認め、マスターは班長と共に之を捕へてスカウトの生命とするハンケチ（皮帶に挟みあり）を奪ひ、戦闘力なき者となさしめつゝ進む。

中には六七人のスカウト物蔭より現はれ出でて三人を捕へむとす。余は戯に降参したれども、マスターと班長とは、遂に身を隠して容易に見出すべからず。蓋し此の邊矮林多く、且つ夜陰なるを以てなり。定の時間來りしを以て、引き揚げて歸る。停車場に着せるは九時半なりき。此の歸路余はマスター・ハント氏との談話の中に、パウエル中將がボーイ・スカウト運動を創始せる動機を試みに尋ねたるに、曾て中將がマフキングの役(1899—1900)に於ける少年軍の活動振を實見して、少年の名譽心(體面)に信頼して適當の組織の下に訓練せば、大いに爲すあるに足るの團體を作り得べしと、確信せるに基けるが如しと云へり。

マフキングは南アフリカの平野に在る小田舎市なり。住民無事に生活して敵の襲來を受くるが如きは、何人も夢想せざるところなりしが、一朝突然ボーフ人の攻撃に對して備へざるべからざることを知りぬ。乃ち總督は兵士、巡查、志願兵より成立せる約七百の守備兵を、夫々要害の地に送り。次に約三百の住民を武装せしめたるが、中には曾て外堡を守れる経験家などもありて、危機に處するの道を心得たる者もあれども、多數は年若き商人店員書記其他にして、未だ訓練又は射撃の何たるやを経験せざる者なりしかば、随分狼狽の狀なきにあらざりき。兎に角總勢一千人ばかりの男子、守備として約六百人の白人の婦人小兒と、約七千の土人の生命財産を防禦せざるべからず。故に一人の生命の貴きを想ふべし。然るに死傷者續出して、戦闘力は次第に滅殺せられ心細さ限りなし。茲に於て參謀長官エドワード・セシル卿、此の地

の少年等を集めて少年隊を組織し、制服を着用せしめて彼等を訓練し始めたが、暫くにして好箇の快活にして敏捷なる少年兵となりぬ。此の時までは傳令、書信の配達、見張、從卒等の役目は多くの成年者を用ひたれども、之等の任務は一切少年兵に委して、成年者は悉く戦線に出づることを得たり。少年隊はグードイーヤと名づくる少年曹長の指揮の下に、夫々天晴なる活動振をなして、戦後には勳章を授けられたり。彼等の中自轉車に熟練せる者は大いに之を利用して各砲臺に分屯する諸友の消息を通じ、或は使命を傳達したりと云ふ。

是れ儘かに中將をして、後年ボーイ・スカウトといふ形大なる團體を組織せしむるに至りし動機の一なり。將軍又日本武士道を推奨して措かざる人なり。必ずや我が邦古今の武士の修養と武者振とは、彼の創意を動したるものあるべしと思惟せらるゝなり。

八月二十六日、余は本月三日英國に着してより、或は觀光に或は視察に、随分多忙の日子を費して、今夕は將に佛國に渡らんとする日取なり。然れども此の日午後ウインブルドンに於て、再びスカウト運動會の催しある由の報を得たれば、機會を逸せしめざるに如かずと考へ、京都大學の友枝君、前京都第一中學校長土屋君、早稻田大學教授の中島君等と共に該地に急行せり。少年の集る者三十五六名ばかり、十四歳位より十七歳位の者なり。運動場は停車場を去ること三哩ばかりなるリチモンド・パークと云ふ松、檜等の常盤樹生茂りて群鹿の逍遙する公園なり。大兵肥滿の土屋校長、斯の如き遠距離を徒歩するには甚だ不平の色あり。余も亦六時迄には倫敦の客

舎に歸りて、直に旅程に上らざるべからず。故に余等四人馬車を賃して先づ該所に到りて待つこと半時ばかりにして、スカウト・マスター防禦隊たる二十人程の分隊を率て至れり。蓋し此の日彼等の行はんとする遊戯は、フラグ・レーディングと稱する旗拔の運動なりき。余は勝負を見るの暇なくして去れり。

此の遊戯は二班又は三班以上のスカウト、各々班長の指揮の下に、二隊に分れて遊ぶものなるが、其の方法は三個の旗を約二十ヤードづつ離して立て置き、防禦隊々長は二百ヤード以上の距離にその隊を布きて遊戯を始むるなり。攻撃隊は先づスカウトを放つて(1)旗の位置、(2)前哨の位置を見定め置き、然る後進んで旗に達して前哨に認められざる様に之を抜き去る。但し一人のスカウト一本以上の旗を抜き去ることを得ず。防禦隊は旗より二百ヤード以内に来ることを得ず。進入者の一人を捕へんとせば、少くも二人のスカウトその十ヤード以内に在りてハンツ・アップと呼ばざるべからず。審判長又は班長の一人が時の至れるを示す合圖と共に、全員各自の位地に立つて、進入者の位地と前哨の位地とを見るを要す。此の遊戯に於て部下の連絡を保たしむるは、班長の苦心を要するところ、又技倆を顯はすところなり。

凡てボーイ・スカウトの遊戯又は運動は、娛樂の外に實用的の性質を帯びて、観察力、推斷力、義氣、剛健、忍耐、同情等の能力又は徳性を修養するに資せしむ。故に少年スカウトにして怪我人を助け、水に溺れんとする者を救ひ、消防に盡力し、老人弱者をいたはりたる等の美談、逸事は枚擧に遑あらず。現に余の滞英中、一人の少年

スカウト、水に溺れんとする一人の人を救助して、己は力竭き遂に溺れたる者ありき。又一人の紳士あり。此の人軍隊主義の臭味ありとて、ボーイ・スカウト運動に反感を有する者なりしが、或日自動車にて田舎を旅行中、誤つて車を轉覆せしめ、脚部に重傷を負ひ、失血甚しく非常の困難をなせり。其の時恰も二人の青年、學校休業の爲に歸省せんとして偶々道に此の旅人に遭遇し、其の窮狀を見て直に應急の手當を施し、一方醫師を呼び來り治療を受けしめたるに、醫師は青年の機宜を得たる行爲を賞して、此の人は卿等の應急の盡力に因りて生命を全うしたりと云ふも過言に非ずと云へり。而も青年等從容として別に得意の色なかりき。何ぞ計らん、此の二人の青年こそ制服を着けざりしボーイ・スカウトならんとは。負傷せる紳士深く彼等の行爲に感激して、厚く謝意を表せるのみならず、一變して熱心なるボーイ・スカウト賛助者と成りたりといふ。

ボーイ・スカウトは潔行を重んじて、少年の陥り易くして最も恐るべき手淫の弊害を除くに全力を盡しつゝあり。蓋し此の惡習は少年の徳性を傷つけること甚しきのみならず、神經衰弱、腦病を醸して、記憶力、推理力を減殺して、可惜有爲の青年をして終生救ふべからざる無能者と爲らしむればなり。

ボーイ・スカウト運動は、非常の勢を以て大英國及び加奈太、濠洲等の植民地に瀰蔓するのみならず。今や合衆國、獨逸、露西亞、南米智利、アルゼンチナ等の諸邦も、競ふて同一の主義を以て少年武士團を組織しつゝあり。昨年發刊の統計表に據れば、英本國に於ける數は、十萬七千九百八十六人にして、植民地外國の數を合せて約二十

五萬人あり。

ボーイ・スカウトの目的と尙武主義

ベーデンパウエル中將の宣言に據れば、ボーイ・スカウト運動の目的とするところは、第一、少年個人の品性を發達せしめ、第二、技能を重んじて獨立自治の基礎を作り、第三、如何なる犠牲を拂ふも他人に善行を爲し、第四、勤王愛國の精神を鼓吹するにあり。中將居常、羅馬帝國の衰亡に鑑みて英國の少年を教へて曰く「今より二千年前羅馬帝國は今日の大英國の如く全盛を極めたりしが、遂に倒れたり。何となれば羅馬の青年は、剛健尙武の氣象を消磨して、自ら國家の干城として國難に赴くことを忘れたればなり。羅馬人は自ら劍を學ぶことを爲さずして、傭兵をして戦はしめたり。彼等は大帝國の存在を全うせんとする愛國の衷情なく、又他國を助けて平和と進歩とに貢獻せんとする慾望なかりき。故に一朝強敵の襲來に遭逢するや土崩瓦解せり。諸子心して我が帝國をして斯の如き運命に陥らしむべからず。而して是れ實に將來の大英國民たる諸子の双肩に懸れるものと云ふべし。卿等の祖先は、卿等の爲に此の帝國を造らんとして努力し、健闘し、而して勇ましく死せり。彼の敢爲憂國の氣概なく、空しく祖先の業を失ひたる羅馬の青年の如く、卿等の祖先に對し、將又自己の良心に對して耻辱を招くこと勿れ」と。見るべし、尙武主義はボーイ・スカウト運動の自然の發現たることを。但し軍隊に於ける如く、往々にして權威に盲從せしめて、個人性の發揮を妨ぐることなく、少年各自の良心と理性とに訴へて、品性の發達を全うせしめんとするは、此の運動の特色と云ふべし。

ルーズベルトとカイザルの印象

大正十一年一月一日發行、廣島高師校友會誌第四十二號「曠野」所載

明治天皇御在世の頃、世界の三大偉人と稱せられしは、我が明治天皇、獨逸のカイザルと米のルーズベルトであつた。私は仕合せよくも此の三大偉人の風采を親しく視、且つその中の一人の演説を聴くの機會を得たことであつた。畏多くも先帝陛下の御風采は多くの人々が拜して居るので、私が茲に述べるまでもないから、殘る二人の印象を記して見よう。

明治四十四年三月二十二日のことであつた。ワシントン誕生日に當るので、私の滯留せるシカゴでは、此の記念すべき祭日を祝すべく、ユニオン・リーグ俱樂部の主催で、ルーズベルトを請じて演説會を開いた。私は友人より入場券を得て、午後四時十五分より第一聯隊兵營の大講堂に於て開催の筈なるその集會に赴いた。此の兵營の門は、中世時代の城門に模して造れるもので、繪入萬國史の中に有りさうな門構であつた。私が知人と共に、三時三十分頃に着した頃は、既に五六千人程の群衆門前に集りて、今か今かと開門を待ち構へゐたが、群衆次第に彌が上に重疊して、一萬ばかりとなつた。漸く門の一方の扉を排して二人づゝ入場を許し始めたが、皆々先を争うて押し合ひ奔き、婦人等は押し潰ぶされん計りにて、泣き叫ぶ者も多く見え、實に凄然たる光景であつた。私は辛うじて入場したが、さしも廣大なる講堂も瞬く間に人の海と化して了つた。少時してルーズベルトが司會者に導かれて、社會救濟事業家として全國に名聲籍甚するゼーン・アダムス女史其他と共に、演壇に着席せる

時は、全會衆起立して拍手歡呼の聲、暫くは止まなかつた。司會者の紹介型の如く濟み、會衆一同『ヘール・コロンビヤ』を歌うた後、ル氏やをら身を起して口を開かんとする一刹那、樓上聽衆中の一少年一聲朗かに「テッチー」と呼んで擲擲した。「テッチー」とはセオドーアの略にして、猶ほ權兵衛を「權さん」と云ふが如し。ル氏滿面笑を湛へて、樓上の少年に向ひつゝ、我が同胞國民よ、と應じて演説の皮切とした。共和國とは云ひながら、英雄の襟度海の如きものあるを想はしめた。ル氏は主に歸化米國民を標的として、米國市民としての責任を説明した。米國産の公民に要求し得て、等しく歸化公民に註文し得ざるものはない。自分の在職中内閣の椅子を占めた大臣には舊教信者あり、猶太人もあつたが、皆和衷協同して國家の經營に任じ、少しも信條の相違の故を以て我を執る者がなかつた。又、自分が紐育州の知事であつた時に、最も信頼せる二人の中、一人は獨逸人で、他はデンマルク人であつた。云々と、歐洲各國よりの移住者に對して愛嬌を振り撒き、又自分は單に富豪たるの故を以て富豪を追窮したことはない。斯の如きを吾が意見となせる新聞は、自分を誣ふるの甚しき者である。云々と語つた。ゼーン・アダムス女史は、ワシントン大統領時代の種族及び信仰の軋轢の模様と、現今の有様とを比較して、第一期の大統領は、全市民の自治に訴へて之等の難問題を決せんとした。自治は與ふべきものに非ず、恰も各自が己の生活を働き出さねばならぬ如く、市民も亦自らの力を以て自治を造り出さねばならぬ。云々と話したが、聽衆は時々喝采を以て女史に酬ひた。最後に『アメリカ』なる國歌を歌うて散會した。

自分の滯米中斯の如き演説會の光景に接したのが、初めての経験であつた。ルーズベルトの身長五尺八寸もあらんか、體は肥大といふ方でないが、筋骨飽くまで逞しく、いかにも獅子の好敵手とも評すべき風格で、其の堂々たる姿と眉宇の間に隱見する英氣とは、自然に人を壓するの魅力があつた。渠は慥かに米國魂の權化であつた。

四十四年七月廿四日、シカゴを出發渡歐の途に上つた。一ヶ月ばかり英國に滞在して調査と觀光とを了り、大陸に向つた。巴里に數日留まり諸所を逍遙して、八月三十日伯林に入つた。九月一日の事であつた。自分はウンテル・デン・リンデンを散策してゐたが、正午に近き頃であつた。俄に諸方より人々集ひ來りて瞬く間に數萬の群衆堵を爲した。何事なるかと傍の人に尋ねて見れば、カイザルが觀兵式より還御のところである。好機逸すべからずと考へて、私も親しくカイザルの風采に接すべく待つてゐた。半時ばかりも経たかと思ふ頃、美装せる樂隊が嚟々たる行進曲を奏しつゝ徐行する後から、皇太子の馬車過ぎ、次いで其の當時伯林宮殿の客となつてゐた土耳其の皇帝が通過した。次にカイザルは一人肥馬に跨り、ゆたかに手綱を執りて、しづしづと進んで來た。人民は手巾を打ち振りて歡迎の意を表すると、カイザルは四方を顧眄しながら、例の髭鬚に笑を湛へつゝ之に酬ひた。是れ正に歐洲大戰勃發に先だつ三年前のことであるから、カイザルの正に最得意の時である。彼は日耳曼帝國中興の英主ウイヘルム第一世の嫡嗣として生れ、豊富なる天分を有つ上に新時代のあらゆる教育を受けて、政治、經濟、軍事は勿論のこと文藝、科學の方面に於ても、人並以上の知識を有してゐた。

唯憾らくは道德上の理想高遠ならずして、戦國時代の英雄のそれに勝らざることである。かの道德の大法に對して尊敬を表するを以て、人間最高の義務と教へたるカントに耳を傾けずして、權力即ちこれ正義なりと説ける、ニイチエやベルンハーデー一派の論者に欺かれて、利己的國家中心主義に心酔せるカイザルこそ氣の毒なれといふ感を抱かしめられた。果然歐洲の一角に「平和破る」の聲起るや、天下は麻の如く亂れ、カイザルは獅子奮迅の勢を以て、當るを幸ひ劍を振りて四方を打ち拂うた。或は白耳義の中立を犯し、或は潜航艇を以て頻々米、其の他の商船を撃沈せしめた。世界列強はカイザルの敵と爲り了した。流石の軍國主義の本山、最強國の獨逸も、遂に宛を脱いで降參せざるを得なくなつた。十年以前伯林街上幾萬の人民歡呼の聲に迎へられた馬上のカイザル、今や和蘭アムロンゲンの城中、悄然として獨り秋月に對する身と爲つた。吾人は此のカイザルの運命より何者を學ぶであらうか。お互に三思すべきである。

●基督教信仰の特色

〔大正十四年五月三日廣島〕（宗教講演草稿、便箋ペン書）

- ◇ 聖書の言葉 約14の1—10、哥前1-26—2-5
- ◇ 基督教は人生哲學にあらず（假令基督教哲學あるにせよ）又基督教倫理あるも、基督教は倫理の大系にあらず。又組織ある社會（教會）を有するも、基督教即ちその社會にあらず。基督教の基督教たる所以は、イエス・キリストに現はれたる神御自身の顯現にありと

云ふべし。「基督者たる根本觀念はキリスト御自身を信じ、キリストを愛し、キリストに従ふ者を云ふ。基督者はキリストの中に生命を見出し、キリストより平安を受け、キリストに由りて力を得、キリストと共に働き、キリストの爲に苦しみ、キリストに従ふべく命ぜられたるものなり。」

封建時代の君臣、主従の關係の如く、活ける頭たるキリストに對して、個人的關係を有する事、是れ基督教の中心であり、基調である。其他は悉く手段、表現、結果等に過ぎず。教會の一人たる事、信仰箇條を誦する事、聖餐に干與する事、慈善の業に勵む事等は、所謂方便に外ならず。他教は或は罪とその救済を説く理論を有す。又他の教には偉大なる人格、教訓とその記憶とを尊崇するもあり、人生の哲學と倫理を提示する教もあり。然れども他教には創立者の活ける人格に中心を置くものなし。

例へば儒教に於ては、創立者たる孔子よりその道德の教を離して考ふる事を得べし。基督教に於ては、イエス・キリスト自身が福音にして、同體不離のものと云ふべし。キリストは嘗て天父に歸るの道を吾等に示すべく此の世に来れるのみならず、自ら吾儕の義たらんが爲に来れり。

キリストは嘗て罪と其の恐るべき結果より吾々を救ふと云ふ約束をなすべく來りしにあらず、自ら吾人の贖とならんが爲に来れり。

約翰傳に曰く「吾は道なり、眞理なり、生命なり。吾によらざれば誰も父に來る能はず」と。注意せよ、吾は道と眞理と生命と

を説く爲に來れりと云はずして、吾即ち道、眞理、生命也と云はれたる事を。又曰く「神は永遠の生命を吾等に與へたり。此の生命はその子にあり。子を有つ者は生命を有ち、神の子を有たざる者は生命を有たず」と。

- ◇ 哥林多人の基督教觀を察するに、餘りに人間的の方面に重きを置けり。即ちポーロの教へたる基督教には、哲學が缺如しをるとか、又は餘りに單純に過ぎる教なりとかの非難ありし様なり。希臘哲學者の説くに比して、餘りに見劣りせると感ぜるが如し。彼等は能辯術と人間の智慧の言葉に重きを置けり。而してポーロの説教には兩者とも見出す能はざりき。

由來希臘は哲學、雄辯、藝術の行はれし地なり。ソクラテース、プラトーン、アリストートル等はアゼンスを中心として、其の思想を宣傳したり。コリントは希臘のコリント地峽にありて、アゼンスよりは極近距離の所に在り、船舶の輻輳する港なるが、アゼンス文化の影響を受けて、哲學、能辯、藝術等の思想は此所にも從來行はれたる事は、想像に難からず。博學能辯なるアポロが、市人の間に大なる名聲を揚げたるを見て察すべし。

哥林前第二章一節に曰く「兄弟よ我曩に爾曹に至りし時も言葉と智慧の美たるを以て爾曹に神の證を傳へざりき」と書けるは、彼等の期待に反して、保羅が最も單純なる言葉を以てキリストと其の復生の事實と、救拯の道とを説けるを證するものなり。

保羅は決して無學の者に非ず。否、却つて博覽強記の人たるはマグrippa王の前にキリストの證を立てたる時、ポーロは、博學

汝を狂氣ならしめたりと云はれたる事あり。又彼の文章特に羅馬書、哥林多前後書等を読み、誰かその雄大なる文章と思想とに感動せざるものあらんや。然れども彼は其の學問と文章と思想とを、キリストなる中心に集中せしめ、天下の人々をして甦れるキリスト今尚生きて吾人の祈の仲保(?)たるキリストを信ぜしめんとしたるなり。

- ◇ 神は吾等の要するものを悉くキリストの中に供せり。残る唯一の事は、吾々がキリストの從者とならんと志すことなり。イエスは神に立てられて、爾曹の智慧、また義、また聖、また贖と爲り玉へり。死して甦り而して限りなく生き給ふイエスは、此の世の惡との戦に於て吾人の勝利を保證する神の秘訣なり。吾人の要する所は、イエス・キリストに對して明白にして新しき見解を有する事なり。

一般の社會は、今や何ものかを缺乏しつゝあるは證明を待たず。吾人の周圍を見渡せば、到る處に、不平と不安との充満するを認めん。人間の社會は所謂産の苦を以て惱みつゝあり。何を産まんとするや。「社會は腫物にて蔽はれて全く完膚なし」何處に救済を求めんか。或者は無政府主義を唱へて、各人が自らの眼に正しと見ゆる事を隨意に爲し得るの時代來るべしと云ふ。或者は社會主義を主張して、所有權と機會の平等が行はるゝ日を到來せしめんとし、或者はシンデカリズムを説いて、資本と労働を同一に取扱はんとし、或者は世界の諸國民が一大帝國となりて、羅馬法王に服従するの日を夢想しつゝあり。東洋も西洋も一樣に社會問題

に、經濟問題に、人種問題に、其他有らゆる問題に惱みつきあり。劍橋大學に於て、文豪チェスタートンの演説を聴くに同一の事を語れり。

諸前述の理想の何れかによりて、新時代の曙光を見る事を得べきか。之等の理想は、到底世界苦の根本に觸れず。假りに之等の主義を明日實現せしめよ。社會の病苦は依然として大なるであらう。然るに基督教は全く異りたる理想を提供するなり。世界の面目を一新するの時代は、基督者が純真なる信仰を覺醒して、心底より又體驗の事實より、彼の懷疑的なるトマスが、キリストの甦れる體に觸れて「吾主よ、吾神よ」と信仰を告白したる如くに、キリストを「吾主よ、吾神よ」と呼ぶ時代なる事を記憶すべし。世界の何れの場所に於けるを問はず、イエスに現はれたる神を知り、救主となし、主として、神として活けるキリストに己を任す時は、其所に眞正の人格を生み出す能力を見出し、道德的病弊の救済を見出し、世と肉と惡魔とに打ち勝つ事を得べし。其所に神の王國が人の心中に建設せらるゝを見るに至らん。

今日は日曜聖日なるが、之はキリストの甦りたる日にして、爾來此の大事實を記念せんが爲に、安息日として祭らるゝに至れり。即ち此の日は生けるキリストを思ふべき日なり。教會は此の甦りたるキリストを根據として、建られたるものなり。教會と安息日とは生けるキリストの證をなすものなり。

世界の進歩と基督教

(廣島時代、宗教講演草稿、便箋、ペン書)

西洋紀元前五世紀の頃、希臘の哲學者プラトンは、世界の循環説を唱へて、36000年の間を一期として、其の間造物主は事件の進行を指導すれども、其の後は手を緩めて指揮せざる故に、世界は退歩すべし。其の間同じく36000年なり。此の時期過ぐれば、又再び進歩向上の歴史を繰返へすものなりと説けり。アリストートルは、凡ての藝術と科學とは幾度となく發見せられて又失はれたりと云へり。羅馬の詩人ヴァジルは『エピローグ』第四卷の中に、オーガスタス帝の機嫌を取るべく、黄金時代到來の逼れるを豫言せり。暗黒時代に入りてより約七世紀の間、世界の進歩に就きて語れる者を聞かず。中世紀は一種の文明を發達せしめたれども、現世の進歩などを想はずして望を未來に向けたり。文藝復興期に入りて、世界は長夜の夢より醒めたれども、餘りに古代希臘の文化の燦爛たる光に眩惑されて、世界の將來の進歩などを考察するの餘裕なかりき。十七世紀に至りて、世界の進運といふ思想の萌芽きざし始めたりと雖も、尙甚だ幼稚なるを免れず。十八世紀に入りて始めて、歐洲は『理性』といふ力の下に黄金時代に到達すべきを夢想して、人間の意志の決定に由りて、完全の社會を造り出すを得るものなりと信じたり。此の説は佛國に於て高潮に達し、遂にロベスピール、ダントンの過激論となりて、彼の『恐怖時代』を現出せり。十九世紀に入りて社會革新の氣運は、産業革命の爲に勢力を助長せり。新しき産業の勃興

せる英國に於ては、殊に社會の進歩といふ思想謳歌せられたり。スペンサー、ダーウインの二大哲學者は、各々生物進化の立脚地より社會進化論を唱道せり。スペンサー曰く、

「進歩は偶然の出來事に非ずして、必然の事件なり。吾人が惡といひ、不道德と稱するものは、必ず消失すべし。人間の完全の域に達するは確實の事なり」と。又曰く「理想的人間の窮極の發達は、凡ての人間の死するが如く確實なり。完全なる發達と純良なる善に向つて、社會は絶えず不斷の進行を續けつゝあり云々」と。

斯の如き思想は十九世紀の思想界を風靡して、社會改良者も政治家も宗教家も詩人も等しく歓迎せり。テニソンが『ロックスレー・ホール』の中に歌へる有名なる句は、時代精神を代表せるものといふべし。

And I doubt not. Through the Ages one increasing
purpose runs

And the thoughts of men are widened with the process
of the suns.

斯の如く英國の思想界は、近頃迄社會の進化に關して大抵樂觀主義に支配せられて居たりしに、大戰後の思想界は、著しく其の傾向の變化せるを看取せざるを得ず。余は一昨年より昨年に互りて約一年有半の間英國に滞在したるが、一昨年一月より二月に掛けて、一ヶ月間程劍橋大學に於て行はれたる大舉(?)傳道講演會に於ける、文豪チェスタートンの言葉を聞いて、先づ之に注意を促されたり。彼曰く「吾人の住む世界は進歩と平和とを期待し得る所に非ず。成程

學上多少の發明と發見とはありしならんも、假に宇宙間の他の世界に住む人類の如き高等動物の社會に向つて、吾人の世界より特に誇り顔に傳達すべき重要な使命を有するや。英國の議會政治を以てせん乎。笑止に堪へず」と皮肉り、「否とよ吾人の世界は不安と罪惡とに充てり。斯の如き不安と混沌とに充ちたる此の社會に於て、吾人の信頼し得るもの僅かに教會のみ」と唱破せり。

又セント・ポール會堂の長にして、哲學、文學、神學に通曉して大膽なる言論を以て鳴るイング博士の講演を読むに、次の如き文句あり、「宇宙の進化と人間歴史の大勢は、進歩に向ふが如く見ゆべしと雖も、科學が眞に人間の運命に就いて教ゆるところを顧みるを要す。余は皮相なる進化論者の唱ふる議論が、科學的なりとして世人の怪まざるを見て驚かざるを得ず。天文學に據れば、無邊際的空間に懸る無数の星宿は、夫々熱と冷却との諸の時期を経験しつゝあり。之等の天體の或者は益々熱度を加へ、或者は冷却しつゝあり。然れども天體各自の運命は、早晚、かの月の如く冷却して死物となるは必然の理なり。吾人の世界を照して、生物の存在を可能ならしむる彼の太陽は、比較的古き一大星なるが、他の幾多の光體の如く、冷却して遂に死物となるべし。而して一旦冷却せる星は、偶然の事件起りて全體の循環活動を始むるまでは、死物となりて止まるべし。天空には時々大なる燃焼起れり。十七世紀中に一度、天上の大火災ありて此の地球より見ることを得たり。斯の如き場合には、二箇の太陽系が衝突の結果、瓦斯となりて雲散霧消すべし。時間と空間が若し無限ならば、幾多の世界は生れて又死すべし。吾人の棲む惑星

の運命亦知るべきのみ。人間とその凡ゆる事業とは、他日、かの嬰兒が沙濱に築ける砂山の、浪の來ると共に消へ去るが如く、消へ失せる時來るを怪まんや。惟うに自然法は進歩を約束せず、亦之を禁ずることなし。吾人は將來に、期待すべき黄金時代を有せず、されども又、永き退歩を恐るゝを要せず。他日人類の經驗を豊富ならしむる新しき種類の獲得を爲す時代もあらん云々」とあり。

以上の如く、現代英國の思想界は、世界の進歩に就いて前代と大に調子を異にして、悲觀主義の傾向を呈し來りたるは、蔽ふべからず。是れ歐洲大戰の結果、世界の動搖常なき影響を受けたるにも、職由するところあるべしと思惟せらるゝなり。吾人素より此の二種の學者の見識を是非すべき位地にあらずと雖も、公平に世界歴史の跡を観察すれば、文化の潮流は、古代より時代を通じて流れて、益々廣く太くなりつゝあるは疑ふべからず。希臘の文明は、印度、埃及より影響を受けて、更に獨得の文華を渙發し、又流れて羅馬の文化を作り、中世紀を経て文藝復興となり、其の間に蘊蓄せる潜勢力は、宗教革命の素因となり、宗教革命は近世文明の淵源となりしは、カーライルの言へる如し。此の間、幾多の國家が興亡消長したるは否定すべからずと雖も、文化の潮流は連綿として嘗て斷絶したることあらず、社會學者の云へる如く、社會の全體を大觀すれば、野生の蠻人より未開人、半開人、開化人、文化人と階段を逐うて向上し來れる事實に照しても、進歩と退化と循環律の經路を辿るに拘らず、長年月の間には進歩をなしつゝあるは、確實にして疑を容れずと云ふべし。余は、世界は常に永遠に進化して、人間は必ず完全の域に

到達するものなりとする進化説には、全然同意する者にはあらずと雖も、矢張曲線を畫きつゝ、向上しつゝある事實は認めざるを得ずとするものなり。歐洲大戰は確かに文明を逆轉せしめて、復興に今後多年を要すべしと雖も、遂に又進化の大道に上りて、世界は進歩の歩武を辿るべし。而して基督教は其の最も偉大なる動力たるを信ずるなり。

キッド曰く「古代文明の特色は、その軍隊組織に在り。個人の權利は一切認められず。帝王と執權との外は、凡て是れ國家の奴隸なるか、又は主家の奴僕なりき。婦人と小兒は殆んど貨物に外ならず。當時に在つては、國家の利害と云ふも、實は其の特殊なる階級と、之に従屬する者の禍福に外ならざりき。斯して希臘國民は自己以外の社會に屬する人民に對しては、義務と責任との觀念を有せず。其の道德は頗る偏狹にして主我的なりき。彼等は人道といふ如き崇高の精神をば有せざりき。四民平等てふ思想の如きは、之を希臘に於て發見する能はざりき。羅馬帝國の如きは、是亦所謂軍隊組織の絶好なる典型的社會なり。ギボンの言に由れば、クロチアスの治世に當りては、自由民の數は正に奴隸の數と同じかりき。而して此の自由民なる者は、自ら鋤を垂りて勞働したる事なく、生活に要する一切の資料は、之を奴隸と屬國とに仰ぎ、唯戰爭を以て能事畢れりと爲したり。羅馬帝國全盛の記念たる文物の凡ては、皆是れ亂暴なる中央集權と、庶民の壓制と、貴族驕奢の餘影のみ。何物か能く斯の如き社會を一變して、基督紀元後に於ける新奇の別社會を出現せしめ、延いては近代文明の花を開かしめたるかと云はゞ、是れ基督教

の特色たる個人の價値を尊重する所に存す。サー・ヘンリー・メーン曰く「近代社會の特質は、古代と異りて民法上の單位を一個人に置きけり。歐洲近世史の最大事實は、要するに一人間の權利を基礎とする萬民平等の思想を實現せんとする是なり。封建制度の破壊、奴隸の廢止、是皆此の思想の發現のみ。基督教を外にして此の大思想の依つて來れる根源を發見すべからず」と。

現代に於ける廣汎なる社會事業は、大抵同一精神の發現に外ならず。大學植民、青年會、共勵會、矯風運動、救世軍、孤兒院、感化院、赤十字看護事業、施療院、教會の教育事業等數へ來れば枚擧に遑あらず。之等の博愛主義運動の背後に在つて、中心人物と爲れる者は、多くは忠實なる基督教徒なり。使徒約翰曰く「吾人稱へられて神の子と爲るを得。これいかばかりの愛ぞ」と。王公も一平民も神の前には等しく尊貴なる靈魂なれば、此の自己の特權を全うすると共に、他人の人格を全うせしめて、共に光榮ある生活に入らしめんとするの努力に外ならず。

排日問題一度び起りて、基督教は世人より攻撃の目標とせられたれども、是れ實に誤れるの甚しきものなり。排日案の通過を極力阻止せんとして盡瘁せるは基督教徒の團體なるが、未だ大勢を動かすに力足らざりしなり。

此の頃、シカゴ日本人青年會の主事より會報を寄せ來れるを見るに、一昨夏ウイソコンシン州レーキ・ゼネバに開催せる米國中部に在る基督教青年會夏期學校に於て、有名なるエデー氏(平和論者)演説の趣旨を拔萃せり。世界の平和と戦争の罪惡を高調し、米國議會

の日本人排斥を非難し、折角日本にも高潔なる平和論者の陸續として輩出し來るに當りて、何が故に米國は、此の際挑戰的態度を取り、敢て不合理なる決議をするや。よしや日本移民を容るゝとしても、僅々百四十名内外のものにあらずや。此の大國民が、僅かに百四十名の者を容れて、同化不可能なる故に排斥するとは、實に情なき話ならずやといひて、一同に非常の感動を與へたる由なり。

又二年前、排日土地法案のネブラスカ州會の上院委員會に於て、監督ビーチャー博士の演説せる梗概を読みたり。博士は日本人の勧誘に依らず、進んで單獨上院委員會席上に臨みて、至誠の熱情を以て日本人を辯護して曰く、「ネブラスカ州尙不毛の地なりし頃、あらゆる辛酸を嘗め困苦と戦ひ、終に之を一大沃野と化し、今日にてはネ州最高の産額を計上する砂糖大根の栽培は、抑、是れ誰の賜なりや。日本人に非ずして何ぞ。且つ又米國が世界の大戦に参加せる時、何れの外國人よりも多く且熱心に、軍事公債に應募し、或は赤十字社に加盟し拔群の數を示したるは誰なるか、日本人ならずや。彼等は極めて勤勉にして正直なる人民なり。ネ州に於て彼等の犯罪行爲の記録は、見出し難き程に稀なり。何を以て、かく善良にして而も米國民に益する處多き日本人を排斥せんとするや」と。

是れ實に基督教徒たる博士の主張にして、能く基督教の精神を代表せるものなり。諸君の考慮を勧むる所以なり。

神戸女學院式辭草稿

(各種用紙、ペン書)

地久節に就いて

昭和三年三月六日

今日は 皇后陛下第二十六回の御誕生を祝する誠に目出度い日である。一體地久節は、以前は學校などの休日ではないのであつたが、基督教の矯風會が首唱者として運動し、遂に全國の女學校に於て休日となり、此日を特に祝するやうになつたもので、基督教が婦人の地位の向上を心掛けて、着々として實現してゐる一の大なる證據である。故に吾々基督教徒は之に依りて 皇室に對し忠良なる臣民として、その微衷を表示し得ると共に、一面に於て吾人の理想の實現を祝するのである。

殊に本年は 皇后陛下として初めての地久節で、而も 天皇陛下御大禮の行はれんとする年であるから、 皇后陛下に對して誠に意味深き目出たい御誕辰と申さねばならない。吾々は滿腔の誠意を盡して御祝申上ぐると共に、天地を治めすところの神に向ひて、皇室の上に彌が上に恩寵の加はらんことを祈るものである。皇后陛下に於かせられては、淑徳高く、背の君に對し奉りて、周到なる御用意を以て侍かるゝのみならず 大正天皇御不例の時は、夜を徹して御看護遊ばされ又屢々 皇太后陛下を御訪ね遊ばされて、御慰め申上げ、よく婦たるの道を盡さるゝのみならず、母として御親しく 宮達の御養育を遊ばさるゝことは、吾々の平生承るところ

で、誠に御床しきことの限りである。從來 皇室に於ては宮達の御養育は、臣下の者に御托しになつたものであるが、陛下のは空前の例を開かれて、御膝下に於て 宮達を御育てになり 宮達の御いたつきの場合は、御自ら熱を見られ、藥を飲ませられ、繻帶なども遊ばさるゝ由を承つてゐる。下々の者に對しても、御仁愛深くして、色々の御下問をなされ、遠征の兵士等まで御同情の御言葉を頂戴する有様である。御齡の若くみらせらるゝにも拘らず、實に 國母陛下として御徳を發揮せられ給ふことは、吾々の仰いで尊ぶところである。

吾々女子教育に關係する者は、地久節を祝日として記念すると共に、日本婦人の地位が今後益々向上するは、教育の力與つて最も大なることを自覺せねばならぬ。何れの國を問はず、教育なくして國民の地位の向上せる例なく、婦人の自覺なくしてその地位の高まりし時代はないからである。

吾が女學院は明治八年の創設にして、已に五十三年の間我が邦の女子教育に貢獻せるところ多大なるものがあつた。今後吾々の竭すべき分野は、實に廣くして大なるものがある。愛する姉妹達は將來家庭に於て、學校に於て、社會に於て、その受けたる宗教的感化と教育の力を以て、益々國のため人道のために竭されんことを祈りて已まない次第である。而して地久節をして常に女子の學校のみに止まらず、全國民をして天長節と一様に、公休日として祝する日の早く到來するやう努力するは、正に御互の責任であるを記憶せねばならぬ。

國民の緊縮に就いて 昭和四年九月十八日學院にて

余は何等政黨の色彩を持たぬ者なるが、現政府の財政緊縮の方針に就きては共鳴するものである。井上大藏大臣の話聞き、又本を讀みて見て少しく話したいと思ふ。

歐洲戦争の始め、即ち大正三年の政府の収入は、七億三千万圓なりしが、大正十一年には二十一億に上り、實に六億以上の歳入超過を生ぜり。然るに大正九年の財界の反動となり、次いで十二年の大震災となりて、日本は非常なる打撃を受け、經濟界の状態一變せり。即ち大正十一年には二十一億の収入ありしものが、昭和四年に於ては九千一百万圓の公債収入を加へて、十七億七千万圓の歳入を計上して居る。換言すれば十六億七千万の収入なるに、約一億圓の借金をしながら十七億七千万圓の世帯を遣つて行かうと云ふ事である。之を一個人の収入に譬へれば、二千一百万圓の収入ありし大正十一年には千四百圓使うて、七百圓の餘裕を作りしが、其後段々収入が減じて今は千六百圓臺に下り、餘した金も使ひ果して、他より百圓の借金をなして一千七百七十圓の世帯を立てゝ居るのである。

然るに一方國債は段々嵩んで、約六十億に達せんとしてゐるから、個人の場合とすれば百圓の借金の外に六千圓の負債を負うて、その利子三百圓餘を返債する能力なきもので、遂には一萬圓の借金となるは明白である。或る人は日本の財政が今日の儘にて行かば、數年にして百億を突破するならんと云ふが誇張の言でないと思はる。國難に直面してゐる今にして國民が覺醒せずんば、國家の前途は何等の光明も認むることが出来ない。即ち、國民の總動員を叫ばるゝ所

以である。殷鑑遠からず、塙國は數年前財政の逼迫のため國家の破産を見んとした。吾々も今の中に大なる覺悟をなして、國家も個人も儉約と勤勉とを以て、經濟の立て直しを實行するでなくんば、前途寒心の至りと云はねばならぬ。

要するに一千六百圓の収入を以てして、一千七百圓の贅澤な生活をなすのである。即ち浮かれてゐるのである。

英國は戦争に由つて攪亂された經濟を立て直すべく、政府も國民も緊張したその結果、金貨本位の復歸を成就した。佛蘭西の財政の紊亂は甚だしいものなりき。余の在佛中一フランの價、平時は邦貨40錢なりしが、下落して12錢となつた。その後8錢位に落ちたが、ポアンカレ氏の非常なる緊縮政策によりて立直り、金解禁も出來た。獨逸の戦後の財政は殆んどお話にならなかつた。マッチ一個を買ふに百萬マルクを拂つた。マルクの價斯の如く暴落した爲に、百萬長者は乞食となつた。パンを買ふこと能はずして縊死する老婆など頻々と續出した。余のレストランに於ける經驗を語る。併しその後國民が緊張して儉約し、仕事に勤勉し、一方レンテン・マルク制度を布きて財政立て直しをしつゝある。吾々は政府の緊縮政策に共鳴して、お互に冗費を省き、堅實なる生活を辿るの覺悟を要します。殊に基督者として愛國者として力めたいものである。

1. 外國品を買はぬこと
 2. 贅澤をせぬこと
 3. 自然の恩恵に感謝すること
- 一僧の話、斷水の話

紀元節 昭和七年二月十一日

本年は神武天皇以來二千五百九十二年に當るのであるが、帝國として斯の如き長久の存在を全うしてゐる國は、世界の歴史に類のない珍らしき事で、之は人々のよく承知してゐるところで、日本國民たるものは、正に上天に對してその恩寵を感謝せざるを得ないところである。而も歴代の天皇は平和を重んぜられ、徒らに侵略の爲に兵を起されたことはないと云うても差支ない。明治天皇は神武天皇以來の聰明なる英主であらせられたが、日清・日露の二大戦役に於て國威を發揮せられ、日本をして世界列強の一となさしめられた。之も決して侵略のための戦でなく、清國と露國との朝鮮併合の政策が我が國の存在を危からしめた爲に、自衛の手段として、已むを得ず兵を起されたのであつた。明治天皇は和歌を御好みになつて、平生の御感懐を歌に寄せて御洩しになつたが、その數一萬數千首に上つたさうである。

井上通泰氏（宮中顧問官、御歌所寄人）が明治天皇の御事を物された本に、徳大寺侍從長の直話を載せてあるが、興味深いところがあるから話して見よう。帝は御製の世に洩れるのを好み給はず、或る時御歌所長高崎男爵を召されて、御注意あつた。然るに男はカナツンボでよく御言葉が聞へない。その上に面を上げず御前に俯伏したまゝ承るが故に、御氣色も判らず、今お咎めを蒙つてゐるといふことは一向氣が付かない。そこで、

「御製を世にお洩し申上げるといふことは、世道人心の上に誠に結構な事と存じて、畏れながら不肖取計つたことであります。

若し之に就いてお咎を蒙るやうな事あらば正風切腹して御申譯を致します」

と申上げ、おまけに手で腹を切るまねをして御覽に入れた。徳大寺公お側で見て居られて、をかしくて堪らないが笑ふにも笑はれず、ほとほと困り果てられたさうである。定めし大帝にもをかしく思召されたであらうが、重ねてその事に就いてはお咎は無く、そのまゝに遊ばされたといふことである。

米國大統領の感動

右の如く高崎男爵に依つて發表された御製を、帝大文學部の講師を勤めてゐた英人アーサー・ロイド氏が拜誦して嘆賞し、試に之を英譯して各國の君主、大統領に一部づゝ贈呈した。其の中の一首

四方の海みなはらからと思ふ世に

など浪風の立ちさわぐらむ

といふ御歌を、米國大統領ルーズヴェルト氏が拜誦して感動し、大帝が如何に平和を熱望し給ひ、博愛仁慈の心に富ませ給ふかに感激の極、自ら奮ひ起つて日露兩國の調停に當らんことを決心するに至つたと言ひ傳へられてゐる。

今上陛下は平生御祖父 明治天皇を理想とせらるゝ明天子であらせらる。時局に對しての御感想も亦正に御同様なるべしと拜察し奉る。

天長節の日 昭和七年四月廿九日

今日は 今上天皇陛下の三十一年の御誕生を祝する目出度き日なり。我等は國民として滿腔の誠意を以て祝するものなり。今や日本

は經濟方面に、思想方面に、外交方面に、最も多事なる時代にして、文字通り國歩艱難の時に際せり。此の難局に當らせらるる 陛下に對して吾々臣民として最も忠誠を念として吾人の事業に盡さざるべからず。吾人の最も御氣の毒に存じ上げることは 陛下は好戰國の君主なりと云ふ非難を受けらるゝことなり。日本は果して好戰國民なるや。歴史に徴せよ。

一、日本は三百年間鎖國主義を採りて桃源の夢を結び、未だ一度も外國を侵略する事なかりき。然るに1673年英船長崎に來り、之を檢閲するに多くの武器彈藥を搭載したるを以て、之を沒收して還らしめたり。1793年露船根室に來り北海を窺ひ、1828年英船ブロッソム小笠原島を占領したり。

以上の事柄は日本をして、西洋諸國が名を交易に借るも、其の眞意を疑はしめたり。然るに次の三事件は國民を震駭せしめたり。

其一、米國水師提督が1854年(安政元年)艦隊を率ひて浦賀に來り、開國を強要せり。國論二つに分れたるが、幸に開國論勝を制して條約を訂修する事となれり。併し彼時開國を拒絶せば、米艦は浦賀を砲撃する豫定なりし事が、後に提督の書類によりて發見せられたり。

其二、1863年(文久三年) 英艦鹿兒島を砲撃せり。之は一英人が生麥にて島津公の行列を横ぎりたるは、甚だ失禮なりとして殺された事が原因なりき。償金を拒絶したるを以て鹿兒島が砲撃されたり。

其三、1864年(元治元年) 英、佛、米、蘭の聯合艦隊が下關を砲撃して、之を完全に破壊せり。

以上の事實は日本をして武を講ぜざるを得ざらしめたり。

二、明治二十七、八年の日清戰爭ありき。その原因は支那が朝鮮を併合して、我邦の存在を脅かしたる事にありき。此の戦役に於て、日本は二十億の金と十萬の生靈を犠牲として勝を制し、遼東半島を完全に我有となしたり。然るに露國は佛、獨を語らひて、三國の力を合せて干涉し、遼東半島を日本の手より奪取せり。日本は恨を呑んで十年の間臥薪嘗膽の苦を経験し、遂に三十七、八年の日露戦役となれり。戦捷の結果として、再び遼東半島を我有とする事を得たりしものを、之を爲さずして半島を支那に還付し、僅に南滿鐵道の線と沿線數哩の土地を要求せるのみなりき。領土の野心なかりしなり。尤も滿州の資源を開拓するの權利を得たり。這般の滿州事件は、支那が一旦條約に於て我の獲得したる權利を無視して、暴力を以て取戻さんと試みたるに原因したる事は、諸君の能く認むるところなり。上海事件も全く茲にその由來を發せり。排日教育、排貨運動が嵩じて、平和なる日本人民を虐殺する事件となり、遂に已むを得ず三萬の日本居留民の生命、財産を保護するの必要に迫られて出兵したるなり。日本は支那の領土を侵略してその寸土をも私せんとするの意志なきは、昭々乎として明かなり。遂に英、佛、獨、伊の代表者も日本の立場を了解するに至り、停戦條約も近き内に締結せられんとするは、吾々の慶賀に堪へざるところなり。

英のカールストン伯は近刊の『明日の世界』に於て、西洋諸國が東洋に於てなせる行動が、日本を刺激せしめたり云々と述べたり。

荒海にもすそ洗はれ立つ嚴の

神代ながらのすがたたゝへん

米國の獨立戰爭 ワシントンの人物
 (文末欄外ノ覺書) 同 南北戰爭 リンコルンの人物

東郷元帥追悼の辭

◇ 世界の海戦史上最も有名なるものは、トラファルガーの海戦と對馬沖のそれである。即ちネルソンと東郷元帥とは、夫々その中心の人物として世界に喧傳せられる所以である。今回紐育タイムス紙は『對馬沖に於ける東郷元帥』と題する社説を掲げて、ネルソンと比較して東郷元帥が古今の名將でありしことを記してゐる由電報あり。先年日本海々戦の赫々たる勝利がたゞへられて、東郷提督はネルソン以上の人であると云はれし時、元帥は謙遜に之を抑止して、自分は平生ネルソン提督に學ばんとする者であると云へり。その戦略と大膽と敢行の勇氣に於て、ネルソンを學ばれたるところ多かりしならんと察せられるなれども、軍人以上に人格者として比較すれば、私は元帥は遙にネルソン卿に勝るとも劣らぬ名將であると思ふ。

◇ 國家に對する勳功の上よりすれば、英國のウエリントン公に比すべき武將であつた。奈翁が縦横の奇才を揮うて歐洲の大陸をその足下に蹂躪し去つて、今や英國を侵さんとする時に當りてウオーターラーの一戦克くナポレオンを撃破して、英國を泰山の安きに置きたるウエリントンに對照すべき大將であつた。テニソンはウエリントン公の國葬式の當時を次の如く歌つた。

Lo, the leader in these glorious wars

Now to glorious burial slowly borne,
 Followed by the brave of other lands,
 He on whom from both her open hands
 Lavish honour shower'd all her stars,
 And affluent fortune emptied all her horn.
 Yea, let all good things await
 Him who cares not to be great,
 But as he saves or serves the state.

◇ 米國の歴史に於て、ワシントン程尊敬を受くる人は稀である。蓋し當時の暴戾なる英國の政府に對して、天賦の人權を擁護し國家としての獨立を全うせしめたる恩人であり、又殆んど非難すべき缺點なき人格者でありし爲である。明治の文壇に於て一時名聲籍甚なりし山路愛山氏は、人間としてワシントンは最も完全に近き人格者なりと評した事がある。私は我が東郷元帥も亦、人として完全に近き一人として、ワシントンに比すべき名將と思ふのである。その友人に對する情誼、子供に對する愛撫、夫人に對するいたわり、僕婢に對する思ひ遣り、義務に對する忠實、長官として部下に對する同情、長者に對する恭謙、主君に對する忠誠、國家に對する犠牲的精神、皆悉く欽仰すべき人格の人であつた。

◇ 東郷夫人の爲人、その逸事を述べること。

保羅に就いて

〔昭和七年八月二十一日〕（宗教講演草稿、大形便箋、ペン書）

古代史上、保羅程に現代人に熟知せらるゝ人物はなからん。初代基督教史上、彼獨り活きたる人として吾等の前に現はる。

ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アポロ、バルナバに就きては、僅に斷片的に知るところあるのみ。ポーロは裸體像の如く吾等の前に現はるゝが故に、彼の短所も蔽ふところなし。ニーチェは彼を評して、人間中の最も偉大なる野心家といひ、最も憫むべき人物にして、己にも他人にも甚しく不快なる人間なりきといひたり。

ルナンは基督傳を書きたる批評家なるが、彼を評して醜き矮小なる猶太人と呼び、その人物を鑑識することも尊敬することも出来ざりき。

保羅の人物性格を研究して穩健なる判断を與ふるに至りたるは、現代の二十世紀なり。十九世紀には、彼は保羅神學と云ふ學問の爲に真相を蔽はれ、その書籍は組織神學の論文として研究せられたりき。彼は恰もオリヂェンやトーマス・アクイナスの如き神學者と同視せられて、贖罪論、信仰に由る義、恩寵に關する緻密なる理論の典據とせられたり。爲に保羅の名は、活きたる宗教と關係なきものゝ如くなれり。二十世紀の學者に至りて始めて、保羅の人物の真相を正解して、オリヂェン又はカルピンよりもジョン・ウエスレー又はジョージ・フォックスの如き人格にして、最も偉大なる宣教師にして開拓者なることを示せり。パウロ研究の資料次の如し。

(1) 新約聖書の批評的研究が吾々の眼を開いて之を示し (2) 小亞細亞の歴史地理の研究に依りて多くの光明が與へられたり。特に英國のラムゼイ卿と、獨逸の神學者にして旅行家なるダイスマン教授の著書が、大に與つて力あるものなり。(3) 第三の資料は、多くの碑文と書類にして、之等は概して二十世紀に入りて發見せられたるものなり。之等の資料に由りて、保羅の書翰と使徒行傳に對する興味は著しく増し加へられたり。

羅馬書、哥林多前後書、加拉太書、コロサイ等の書翰は、神學者の書きたる論文でもなく、セネカの書翰の如き文字上の作品でもなく、眞實の書翰なり。各書は夫々判明せる當時の事情に關聯して書かれたる手紙なりき。ポーロ自ら有りしならば、口頭を以て傳へたるに相違なき使命を述べたるものにして、後世まで保存せらるゝことは恐らく豫期せざりしならん。彼はその書翰が聖書の一部とならんとは、恐らく想像だもなさざりしならん。

(4) 第四のポーロ傳の資料は、使徒行傳なり。此の書の筆者は誰なりしや。作者の署名なく、又初めの數章を認めたる人は同一人ならざりし如しとは、學者等の一致するところなれども、大部分は第三福音書の筆者、即ちポーロの友人にして醫師たりしルカの作れるものたるは、疑なきところなり。

以上の史料に由りて綜合すれば、ポーロ又は名ソーロは、純乎たるイスラエルの子孫にて、ベンジヤミンの班に屬する生粹の猶太人にして、生れながら羅馬市民權を有せり。生地タルソはキリキアの平野に位し、今は海より約十哩の距離に在り。町の裏山は神戸地方

の如く丘陵蜿々として連なり、富裕者は別荘を彼處此處に設けあるを見るべし。希臘の植民は往昔よりタルソに來往し、之等の植民は勿論土着人と混じて、東洋的要素は希臘的要素を壓倒せり。然るにアレキサンダー大王の後繼者の時代となりて、希臘文化の勢力恢復したれども、行政は東洋式なりき。希臘人の外に商人として世界に潤歩せる猶太人の集團もあり。紀元第二世紀の初頃タルソを訪れたるデオン・クリソストムの記するところに依れば、其頃のタルソは全く東洋的の町にして、婦人等は深く顔蔽を掛け居りたることを知るべし。保羅が婦人のヴェールなくして禮拜に出席せるを排斥したるは、當時の風俗を無視せることを嫌ひしなるべし。併し希臘文化の機關として一の大學存在せり。勿論アゼンス又はアレキサンドリアの如き學者を網羅せざりしと雖も、タルソの人民の間には好學の氣風旺盛なりしと云へり。

ポーロは上流社會に屬せざりき。彼は天幕を造る職人なりき。加拉太書六章十一節に「視よ我れ手づから如何に大なる文字にて汝等
に書き贈るかを」といつてゐる。ダイスマンは之を解釋して、彼は學者でなく職人であつたから、書が下手であつたのだらうと云つてゐる。又大なる文字にて汝等
に書き贈ると云ふは、眼病のため細字を書く能はざりしことを示すやも知れず。『パウロ及ラクラ行傳』には彼を描いて、短軀禿頭にして、鼻は鈎の如く曲り、額は前方に突出せりとあり、所謂『でび』男なりき。容貌風采は上らざりしと雖も、現代の職人に比すれば遙に優れる教育を受けたり。

嚴格なる希伯來人の家庭に育ちたる彼は舊約聖書の大半を暗記し、

會堂附屬の學校に於て律法を誦せり。當時の生徒は筆記を許されず、悉く暗記法に由れり。故に彼等の記憶力は異常に發達せり。十四才にして少年はエルサレムの都に送られ、大なるラビの一人に就きて學ぶを常とせり。保羅はガマリエル師の許に奔り、有名なる律法家の塾に於て、祭司の職務、祭壇、神殿、律法に關係するあらゆる學問をなしたり。多分彼は自らエルサレムのラビの一人とならんと志したりしならん。何故かなれば、彼は結婚せざりき。而してユダヤ人はラビの外は、廿一才の時又はそれまでに妻を娶ることを常としたればなり。ポーロと相弟子なりしガマリエルの息シメオンが「學問よりも實行が肝要なり。知識と其の應用、實行の伴はざる者は、此の學校に入るを許されず」と云うてゐるところに、祖父ガマリエルの人格と、平素實行せる主義、主張なりが、推測せらる。

保羅の改宗とその動機

1. 彼の精神上の煩悶。ポーロはガマリエルの門下に在つて、一週二回の斷食、割禮の尊重、所得の十分の一の捧物、安息日や祭日等を嚴守せしと雖も、努力も奮闘も何の効果なかりき。熱情家なる彼は基督信者迫害運動の張本人として奔走中、屢々熱心なる信者に接近して、彼等を知る機會を得たり。而して接近するにつれて、彼の深刻なる靈的要求が、パリサイ宗の如き傳統的宗教には満足し得ざるを自覺せり。彼は正に精神的煩悶の苦闘に陥りたりき。ロマ書七章に曰く

「我は我が中に善の宿らぬを知る。善を欲すること我にあれど、之を行ふことなればなり。我が欲する所の善は之をなさず、反つ

て欲せぬ所の悪は之をなすなり……噫、われ惱める人なるかな云々」と。

此の煩悶が彼をキリストに導ける一步なりき。

2. ポーロの精神的革命を促したる第二の動機は、ステパノの殉教なりしと思はる。ステパノはエルサレム教會の七人の執事の一人なりしが、所謂信仰と聖靈とに満ちたる聖徒なりき。元來七人の執事を選擧せるは、ユダヤ的基督者とギリシヤ的基督者との分離の危機に對する、當面の救済策であつた。ステパノはギリシヤ語のユダヤ人にして、自然その説くところも自由なる傾向を有つてゐた。彼等は傳統的律法に對して精神的解釋を下し、祝祭の嚴守も極端には説かず、且つ割禮の廢止を主張した。ステパノを先鋒としたかうした自由主義は、漸次イエスの弟子達の間にも浸潤した。そこでステパノはイエスは神殿を破壊し、モーゼの習慣律法を變改する者なることを説けりといふので非難の目標となれり。彼の見解に依れば、律法はある限られたる時代のものにして、イエスがメシヤとして出現せる以上、律法の時代は終を告げたるものなることを主張した。(使行七章一節)併し極端に激昂せるサンヘドリンは、假借するところなく、終にステパノを石にて擊殺し、教團に解散を命じ、只律法を守る者として明に知られたる使徒達のみ留ることを許したり。

ポーロは、自由主義を主張するギリシヤ語のユダヤ人に對して、猛烈なる反感を有てり。即ち彼の中なるパリサイ的氣概が憤然として擡頭し、彼をしてクリスチャン迫害運動を起さしめたるなり。然るに彼等は、信仰の爲には敢て生命を惜むことなく、信仰に由つて

動かすべからざる精神を養ひ得たるなりき。彼は其の真相を認むるに至つて、内心畏れ居たり。是より先、ステパノの死せる時、その顔天使のそれの如く輝き、從容として天を仰ぎつゝ靈を渡せる有様を見て、胸を打たるゝものありしなり。

3. はダマスコ途上の體驗なりき。ポーロは大祭司の添書を携へて、ダマスコに往けり。之は男女に拘はらず基督者を捕へてエルサレムに曳かんためなりき。ダマスコに近づくや、彼は強き光に照され且つイエスの彼に近づくを看たり。イエス、ポーロに云ふ

「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」といふ聲を聞く。主よ、汝は誰ぞと答へしに「吾は汝が迫害するイエスなり」と云ひ給へり。偕にある者、光は見たれども、語る者の聲は聞かざりき。主よ、我何を爲すべきか」主曰く「ダマスコに往け。汝の爲すべき定りたる事は彼處にて悉く告げらるべし」彼は光の輝にて眼見えすなりたれば、偕に居る者に手を引かれてダマスコに入りたり。ポーロは三日の間目見えす、又飲食もせざりき。ダマスコにアナニヤと云ふ人居たり。彼、幻の中にイエスを見てその命を受け、ポーロを訪ね遂に之にバプテスマを施せり(使行九章十一十九)。

此後、彼はアラビヤの曠野に退きたるが、勿論過去の罪惡、殊に基督教徒を迫害せる兇暴なる行爲を清算し、祈念修養をなしたるに相違なし。やがて又ダマスコに歸り來れり。驚天動地の傳道の生涯が、之より始まりたり。

ポーロの性格の偉大なる點は、要するに不撓不屈の勇氣と、熱烈なる犠牲獻身の精神と、高遠なる神國の理想實現に對する忠義心な

りき。然し彼は一面に斯の如き英雄的性格を具へると共に、他の一面には温情に富み豊かなる愛の心を有せり。此の特色は彼の書翰を通じてよく現はれたり(テモテ書翰、哥林前十三章参照)。彼の宗教は純粹なる神秘主義なり。斯の如き信仰を基礎としたる活動家なりき。

婦人の高等教育に就て

[昭和八年八月十三日午前十時四十分放送] (原稿用紙、ペン書)

ナポレオンは一國の文化の程度をトせんとすれば、その國の婦人の教養を知るに勝るものがないと申しましたが、誠に至言であります。試に歐米先進國の婦人の教養を観察するに、中流以上の家庭の主婦たる人々は、大概大學教育を受けたる人々である。随つてその子女は中等學校を卒業すれば、夫々専門學校又は大學に學ぶのであります。あちらの大學に行つて見ますと、恵まれない家庭の若き女性でも、種々の労働に従事しながら、大學に學んでゐる者が仲々多いのであります。或は圖書館の本の貸出を手傳つたり、書庫の整理をしたり、又は食堂に於て學友の食卓の給仕を勤めたり、或は俱樂部の掃除を引受け、食事の世話をなしながら勉強すると云ふ有様であります。併し感心なことには、彼等は獨立自尊の精神強くして、恵まれたる家庭より來てゐる學友と交際して何等卑屈の態度なく、平氣で學生生活を營んで行きますが、これは労働神聖と云ふ思想を

以て、幼少の時から育てられてゐるからであります。

二

女性が高等教育を受くる能力ありや否やは、随分久しく問題とされてゐましたが、男女共學を主義とするシカゴ大學に於て、教授等が科學的方法を以て、精密に男女學生の能力を比較研究しての結果、女生は男生に比して少しも劣らないと云ふ結論に到達したのであります。私は二十有餘年男子の高等師範學校に教へた後、約六ケ年間女子の大學程度の學校に於て教育に従事した體驗から申せば、矢張日本の女性の能力は、男子のそれに比して何等の遜色を示してゐないことを斷言し得るのであります。尤も男女は先天的に夫々異つた性能を賦與されてゐますから、女子の選ぶ學科は男子と異なるところあるは當然の事柄であります。例へば女子は多く文學とか歴史とか、心理、教育學、社會學、美學、音樂を好み、男子の學生は政治、法律、經濟、工科、理科の學問を選ぶのであります。併し此頃では、女子も法律、經濟を學んで、學校を出で、後社會に認められて、或は辯護士となつて、セイクスピアの『ヴェニスの商人』に現はれるボルシヤ以上の手腕を發揮する婦人もあり、女の労働省大臣もあり、又は市長となるものもあり、全權大使となる人々もある世の中となりましたから、今後女性の發展は、目覺しいものがあらうと思ふので御座います。

三

日本に於て女子の高等教育を唱へ出したのは、歐米よりも遙かに後れてゐましたので、諷見のある婦人は、西洋に較ぶれば残念なが

ら未だ少いやうであります。官學に於ては兩高等師範學校と少數の専門學校位でありました。その他は基督教主義の學校が、早くより女子の高等教育を標榜して相當に有用なる人物を出したのに、社會は刺戟を受けたやうに思ふのであります。

四

今日の日本の男子は、結婚適齡期に達して妻君の選擇をする時に當つて、高等教育を受けた女性を避ける傾向があると申す人があります。若し事實なりとすれば、何がその原因でありませうか。女が學問をすれば生意氣になり、學問を鼻に掛けて威張つたり、甚しきは主人を尻の下に敷くやうな者があるから、主人としての自尊心を犯されるのが不愉快であると云ふのでありませうか。若し高等教育が左様の女性を造るならば、高等教育は失敗と申さねばなりません。それは男子の杞憂で、且つ誤解であります。成程偶には左様の女性もあるでせう。併しそれは學校の責任よりも婦人自身の責任でありまして、高等教育を受けなくても、矢張同じドラマを家庭で演ずるであらうと思ふのであります。高等教育とは女性に必要な、否、人間として必要な教養を授くるのが主眼でありますから、人格が出来上がることが第一要件であります。而して人格とは、識見と徳操とがその根柢となるものと存じます。此の意味に於て知育一偏の教育は、甚だ不十分であるばかりでなく、寧ろ危険性を含むものと思ふのであります。私は宗教的修養を以て、高等教育の根幹となすべきものと思ふのであります。何となれば謙遜、柔和、愛他、寛容、犠牲的精神は、宗教的修養より自然生れ來る美德であるから

であります。

五

只今日本に在る公私立の高等女學校の數は、生憎手許に統計表がありませんから、精確な數字は保證致しませんが、約八百四十校であります。男子の中學校は約六百五十校で、商業、工業其他の實業學校を加算すれば、矢張八百以上となりますから、男女の中等學校は殆んど平均を保つてゐるのであります。斯の如く女子の普通教育は、近年著しい進境を示してをります。而して女子の専門學校は、公私立合せて約六十校位もありませうかと存じます。女子教育界の要望は女子大學に在りまするから、やがてその實現を見るの日も遠き將來ではないと思はれるのであります。奈翁が今日蘇つて日本の女性に接したならば、日本國民の文化を如何に判斷するでありませうか。彼は人格的には吾々の尊敬に價せぬところ多々ありますが、ジョセヒンの教養に對しては敬慕の念切なるものがありました。

六

私は外遊中、數人の賢婦人の風采に接したことがありました。一人はシカゴの社會事業に従事して世界的の名聲を博してゐるゼーン・アダムス女史で、その人格の高潔にして識見の卓越することは、寔に欽仰すべきものがあります。丁度1910年の秋と思ひますが、第一世ルーズヴェルト大統領が、政治運動の爲にシカゴに参りました時、先づゼーン・アダムス女史に會見を乞うてその後援を求め、二人相伴ふて演説會に臨んで、一萬有餘の聽衆に話しかけました。その時の女史の人気は非常なもので、流石の大統領にも決して劣らぬ

ことを確めたことが御座います。他の一人は、イギリスの母の會の總裁たるパークレイ夫人である。之は四十萬の會員を有する彪大なる團體であります。大正十二年の春、劍橋の市會議事堂に於て開催せる母の會の總會に於て、その演説を聴きました。傍聴は男子に許さないのですが、幹事の周旋で入場したのであります。夫人の社會事業家としての識見、母としての青年に對する理解、同情など、敬服に堪えざるものがあつた。之等の女性に接するならば、何人も彼等の代表する國民の文化の程度を推定することが出来ると思ふのであります。

七

日本は今や世界五大強國の一として、一等國の班に列してゐるのであります。徒らに軍事、産業、機械文明に於てのみ一等國では、未だ眞の大國と評することは出来ません。精神文化に於ても、世界を指導するやうにならねばなりません。此の精神文化は、勿論婦人のみの分野ではないが、婦人の教養が豊かになつて始めて、國の文化が芳醇なる香りを放つやうになるものであります。之は婦人の教養が高く深くなつて、男子のそれと相俟つて成就するものと存するのであります。

八

御参考のために、母の會總會に於けるパークレイ夫人の演説の大意を御紹介して見ませう。夫人は當時五十歳位と見受けらるゝ長身の氣高さうに見ゆる婦人であります。片脚がわるいので杖を以て體を支へてをりましたが、徐ろに起つて口を開きて曰く、

今日は至るところ失望と嗟嘆の聲が充滿して居る。吾等が渴望してゐた平和は、尙未だ参りません。却つて利己主義が世界に遍く行はれてゐる。之はさうあつてはならぬ筈です。何となれば、世界の人類は天父を戴く同胞であるから、兄弟の交際を爲すべきであります。

吾々は神を畏るゝ國民であらねばならぬ。個人の心は國民の心である。(吾儕は先づ自分の心に吾は眞にキリストの弟子なるや如何と問ふて御覽なさい)。神は私共に爲すべき仕事を托し給ひました。今日多くの計畫が論議されてゐるが、併し最も緊要なる事は世界の闇黒を一掃するに在り。而してその暗雲を掃ふには、神の子の道を実践するより外にないと思ふのであります。吾々各自の持つ燈火が明かならざれば、いかで他人に神の子の光を示すことが出来ませうか。今や我が「母の會員」四十萬の人々が、朝夕同じ祈を神に捧げてゐる。白き母も、黄なる母も、黒き母も自分の嬰兒の爲に捧ぐる祈禱は、同じ祈であらねばなりません。

次に母の會の理想とする結婚は、一夫一婦の變らざる關係である。苟も文明を標榜する國民は、清き夫婦關係を持つところの國民であらねばならぬ。夫婦の關係正しからずば、家庭の紊るゝは當然のことで、随つて子女の教養は望むことは出来ない筈である。(聖書に教ふる如く夫婦は正に一體であらねばならぬ。)

英國イギリス國民の基礎は二重である。即ち一は聖書にして、二は英國紳士の二言なき眞實である。抑も英國の國家社會の状態は、その人民の母たる人々の人格の如何に依るものである。そして吾等に托せられたる子女の品性は、實に吾々が造るのであるから。殊に彼等が幼少なる時代に、その性格の訓練をなすべきである。子供の選擇力と自制の能力を訓練するは、當に母の責任であります。

最後に性の問題を考へて見たい。抑も性の本能は神よりの賜物であります。故に徒らに之を罪惡視することは大なる誤である。人間の性的本能を神聖なるものとして子供等に教ふる事が、母たるものゝ責務である。その本能を神の榮光となるやうに用ふるやう、教へるべきであります。教育は學校に於て行はれるけれども、實際は家庭に於て母の手に依つて始められねばなりません。然らざれば、學校の教育は眞の効果を擧げること出来ないのであります。云々。

以上はイギリスのパークレイ夫人の演説の要領であります。夫人に率いらるゝ多くの女性の中には、幾多の小パークレイ夫人が居て、夫人の理想と經綸とが着々實行されて行くのであることを、想像なさることが出来ませう。

九

一年有半英國に在留研究して後和蘭に渡り、アムステルダムを見物してヘイグに行き、例の有名な平和宮や女皇の宮殿を拜觀して伯林に入りまして、友人の紹介で、地質學者ドウベルス博士の未亡人、フラウ・ドウベルスの家に客として一ヶ月ばかり滞在しましたが、此の未亡人も亦、尋常の婦人でないことに氣付きました。實は私は大戰後英米國民の獨乙國民に對する反感が甚だひどいので、その感化を受けて獨逸人は鬼のやうな國民であるだらうと、竊に恐怖を抱いて入國したのでありますが、此の未亡人の家に厄介になつて、朝夕その二人の子息達の客に對する禮儀ある待遇と、未亡人の純情にして作爲のない親切な世話を受けて、私の獨乙人觀は全く一變いたしました。而して驚いたことは、此の夫人は未だ一度も外國に遊

んだことがないと云ふのに、私と會話するに當つて全く英語を用ひました。多少發音の不完全なところもありましたけれども、用を辨ずるには少しも不便ありません。或日私は夫人に向つて、奥様は何處で英語を學ばれしやと問ひたるに、學校時代に學べるのみである。併し英國の文學に興味を有つ故、イギリスの散文作家の書物を涉獵してをります、と答へられました。成程夫人の本棚をのぞきましたところ、獨乙の文獻と一緒に、英國の文學書が多く見當つたのであります。夫人は此の書棚より平生英書を亂抽して、讀書に親んでゐることが判りました。夫人の教養の床しいことが皆様にも判るであらませう。教養のある婦人がいかに外國人にまでも善い印象を與へて、知らず識らずの間に國民の文化を發揮するものであるかを、首肯せらるゝことゝ存じます。

十

次に此の夫人の斡旋によつて、伯林大學の英文學科の主任アロイス・ブランドル博士の家に一ヶ月餘滞留することゝなりました。博士はアングロ・サクソン文學の世界的權威でありまして、實に博覽強記の人であります。數年前セイクスピアの研究を發表して學界を駭かしましたが、その夫人も亦教養深い人であります。夫人は少年の頃父上に従つて英國に在留して教育を受けられたる由にて、英語に堪能なることすばらしいもので、全く英國婦人と交際する様な感を與へられました。當時博士は六十八歳で、夫人は六十歳位に見受けられました。博士夫妻が私に對して偽なき情誼を示され、特に日本の震災に就いて同胞も及ばぬ程の同情を寄せられたことは、今尙

記憶に鮮かなるところであります。教養ある婦人は國民の光榮であり冠であることを牢記せられて、婦人の高等教育がいかに我が國にも大切であるかを御承知ありたきものであります。

[逸題] (宗教講話草稿、便箋、ペン書)

我らの生命なるキリストの現はれ給ふ時汝らも之とともに榮光のうちに現れん。(コロサイ三〇四)

私の家内は昭和三年十月十四日、神の召に應じて永眠した。之より先、三年間乳癌を患つて、二回九大醫學部の三宅博士の執刀にて外科的治療を受けたが、一時は少康を得たけれども、遂に起たずして歸天した。永眠の少し前、私は獨り彼女の枕頭に座して看護してゐたが、俄に發言して云ふに、「マーあの壯嚴なる光景は何と申しませう。言葉には形容出来ません」と。惟ふに生命なるキリストの現はれて彼女を慰め給ひたるにあらずやと、私は敬虔なる心を以て黙禱した。彼女は學生時代より學べる聖書の句を暗誦したり、また以前の教師や同僚より時々送り來れる聖句を讀みながら、病苦を慰めてゐたのである。愈々最後の息を引取るに際して少しも恐るゝところなく、從容として長男夫妻を側近に招きて、後事を托してから逝いた。その有様は如何にも凱旋の戰士の如き趣があつた。其の後、私の家庭には三男が病み、長女が重患に罹り、私自身血壓昂進して内外憂患續出した。けれども絶望に陥らず平靜の態度を失ふことなく、難局を打開して來たのは、後妻の獻身的奉仕に俟つところ多く、

感謝に堪へぬところであるが、最初の家内の信者としての態度、その動かざる信念に學ぶところ大なるものあるを感ずるのである。彼女も主と共に榮光のうちに現はれるであらう。

余の體驗を語る [十一年七月二日]

(宗教講話草稿、ノートブックより引き裂いた用紙、ペン書)

1. 余の入信事情

自分の家庭——儒教的教育——

父は儒教信者にして祖先を尊崇したれども、神佛に對して冷淡なり。故に基督教に對しても同様なりき。早朝より大槻先生の家に行きて漢文を學び、向ふの家の老人に就いて四書を學び、又仙臺の儒石澤先生の塾に通學せり。

十三歳にして中學に入り、英語、普通學科を學ぶ(ウイルソン・リーダー)。中學を半途にして上京、成立學舎(豫備校)に入り一ヶ年在學、脚氣病に罹りて十七歳の夏甲府に行く。蓋し叔父に逢はんためなり。途中小佛、笹子の險を越えて難儀せり。

甲府の叔父の家を訪ねて百日間ばかり滞在。始めて宗教の雰圍氣に觸れ基督の福音を聽き、新島先生の回信事情とその事業に感動。洗禮を受けて歸京。麻布東洋英和學校に入る。飯塚、山路愛山、高木その他の友人と交遊。

2. 廣島に於ける二十年

3. 神戸來任以來家族の頻々たる不幸、病氣、自分の病氣、經濟上

- の困難。ヨブの話。
4. 廣島の前同僚昨年来訪して余を慰め、且つ前學長の同情と心配とを傳へらる。
 5. 余の平静なる態度に就きて意外の感をなす。何故に心の平静を得たるか。
 - (1) 家族等の死に臨める時の信仰と覺悟。
 - (2) 信仰なき同僚の妻君が臨終の悲惨なる有様に比して、信仰ある者の臨終の美はしきこと。
 - (4) 三男の日記、感想録を見てその信仰の實際を知りたること。
 6. 西洋の詩の話。
 7. エンプレス・オヴ・インデア號に乗りて航海した經驗談。
 8. 吾人に非常時の覺悟なかるべからず。ウエスレーの經驗。

STUDIES AND ESSAYS

Contents

	PAGE
Comte's Religion of Humanity and Its Criticism.....	1
The Main Features of the Japanese Problem.....	31
A Study of the Japanese Family.....	53
The Confession of a Japanese Christian.....	72
Editorials of "The Round Table".....	85
Addresses in Various Meetings.....	93
Letters.....	119
Essays on Christianity.....	126

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

Founded by John D. Rockefeller.

Comte's Religion of Humanity and Its Criticism.

A dissertation
submitted to the faculty
of the
Graduate Divinity School
in candidacy for the degree of

MASTER OF ARTS.

Department of Systematic Theology.

by
Heiji Hishinuma.

Chicago
June Convocation.
1911.

Contents

- I. General Interpretation of the Religion of Humanity.
- II. Criticism of Comte's Religious Ideas.
 - a. Altruism: Social-feeling Versus Self-love.
 - b. Religion, the Motive Power.
 - c. The Kind of Religion Needed.
 - d. Mr. Martineau on the Subject.
 - e. The Lack of a Central Personality.
 - f. Subjective Immortality: Its Deficiency.
 - g. Is the Religion of Humanity Superior to Christianity?
- III. The Merit of the Religion of Humanity.
 - a. Synthetic Conception of All Sciences.
 - b. Influence of the Idea of Humanity on Modern Christianity.
 - c. Influence of the Idea on Modern Philanthropy.
- IV. Conclusion.
The Religion of Humanity is not Religion, but Philosophy.

I. General Interpretation of the Religion of Humanity.

Auguste Comte was a pragmatist in modern terminology. He would not speculate on philosophical problems merely for his intellectual satisfaction. He was a utilitarian who always entertained an ideal of social betterment. He thought that political reformation and intellectual inventions would not amount to much, but a moral transformation must precede any real advance of society. The aim of life, both public and private, is to secure to the utmost degree the victory of social feeling over self-love; in other words, the triumph of altruism over egoism. Comte admires the teaching of Christian morality as given by the Catholic Church in the Middle Ages, — the love of fellow men. The positive philosophy uses the same language. "For anyone who has gone deeply into the study of humanity, universal love as Catholicism conceived it, is still more important than the intellect itself in the economy of our individual or social existence, because to the gain of each one and all, selfishness disfigures or paralyzes even the best dispositions."

Now what will be the best means for securing the preponderance of altruism? This must be found in the strongest element in human nature, which is nothing but Feel-

ing or Heart. Catholicism abused the supremacy of Feeling, and made the Intellect its slave. Protestantism which emphasized the freedom of private judgment was a revolt of Intellect against Sentiment. The business of the positive philosophy would be to bring back the Intellect into a state not of slavery, but of willing ministry to the Feeling.

This willing ministry of the Intellect to the Feeling will never be accomplished except by means of religion. The harmony between the two activities of human mind will be brought about only by the interceding angel. The characteristic of a religion is the existence of a Power without us, the authority of which shall be so great as to command the submission of our whole life.

Where is the basis of this religious submission to be found? Humanity has passed three stages of evolution, namely, the Theological, the Metaphysical and the Positive. The first stage is the necessary point of departure taken by human intelligence; the second is a stage of transition from the supernatural to the positive; and the third is the fixed and definite condition in which knowledge is alone capable of progressive development. In the Theological stage, the mind regards all effects as the productions of supernatural agents. Nature is animated by supernatural beings. Every unusual phenomenon is a sign of the pleasure or displeasure of some being adored as a God. The lowest condition of this age is

that of the savages, viz. Fetishism. The highest condition is when one being is submitted for many, as the cause of all phenomena. In the Metaphysical stage, the supernatural agents give place to abstract forces supposed to inhere in the various substances, and capable themselves of engendering phenomena. The highest condition of this stage is when all these forces are brought under one general force named Nature. In the Positive stage, the human mind, convinced of the uselessness of all inquiry into causes and essences, applies itself to the observation and classification of laws which regulate effects. The highest condition of this stage would be to represent all phenomena as the various particulars of one general view.

In this Positive stage of social evolution, the basis of religion is to be found in Humanity past, present, and to come, conceived as the Grand-Etre. Humanity is not simply the sum total of all the individuals or human groups present, past and future. For all men are necessarily born children of humanity; but all do not become her servants. Many remain in the condition of parasites. Those who have lived in the purely biological sense of the word will only have been part of humanity in a transitory manner. Those who have worked for a noble human end will always live in her. In each generation those who are worthy of the privilege of its serving as the substratum for the exercise of the superior human foundations are incorporated into humanity.

Humanity conceived as the Great Being is a kind of hypostasis of the function by which man tends to become distinguished from the animal. It is the progressive realization, through time, of the intellectual and moral potentialities contained in human nature. It is also its ideal impersonation. In this last sense it becomes an object of love and adoration. Thus, the positive religion leads to a commemoration of great men, the benefactors of humanity. On the other hand, the desire for immortality is very strong in the heart of man. Comte recognized a provisional value in all that arises spontaneously from human nature. The tendency of human nature urges man to desire to triumph over death. All kinds of religion in the human history have, more or less, tried to satisfy this tendency by means of their creeds and illusions, and they were successful to some extent. But these religions have become incompatible with the progress of our mental evolution. Positive philosophy does not deny this tendency, does not destroy it: it transforms it. Instead of the vulgar notion of objective immortality, positive religion gives the notion of subjective immortality.

Subjective immortality, that is to say, continuing to live in others, is the only mode of existence which we can hope for after death; but it is also the only one which we ought to desire, in view of the fact that what most constitutes ourselves in us lies not in the individual in the biological sense

of the word, but in the social and human element. He who has only lived for himself, has lost it; for death is the end of his all. He who has lived for others has found it; for he survives in others. Once incorporated in the Grand-Etre, the individual becomes inseparable from it. Being from that time withdrawn from the influence of all the physical laws, he only remains subjected to the higher laws which regulate directly the evolution of humanity. "To live with the dead," says Comte, "constitutes one of our most precious privileges." But, in the same way, the dead live with us. They live in us, and those who have made humanity better by the effort of their intellect and their will, are within us the best and most lasting part of ourselves. Plato as an individual person is dead for two thousand years, but he still lives today among many men as their best part. We shall also survive in the same measure in which we have contributed to the increase of this inheritance of humanity.

Comte compares his Positive religion with Christianity as follows:—

Both Art and Science participate in the regenerating influence which Positivism derives from its synthetic principle of Love. The one to contemplate, the other to glorify Humanity, in order that we may love and serve her more perfectly. One recognizes the immense value of the medieval attempt to form a complete synthesis, although the time was not yet ripe

for it. To renew the attempt upon a sounder basis is the object of those who found the religion of Humanity. Widely different as are their circumstances and the means they employ, they like to consider themselves as the successors of the great men who conducted the progressive movement of Catholicism.

Christianity satisfied no part of our nature fully except the affections. It rejected Imagination, it shrank from Reason. The aim which is set before men, being unreal and personal, was not social sympathy. From the nature of the system, opposition between these two principles — the supreme affection and true social feeling — was the rule, and harmony the exception; since the Love of God required in almost all cases the abandonment of every other passion. The moral value of such a synthesis consisted solely in the discipline of whatever kind is preferable to anarchy. In other words, the essential merit of the system lies in its first attempt to exercise systematic control over our moral nature. The discipline of Polytheism was usually confined to actions and habits, but never touched the affections, the fountain from which both habits and actions spring. Christianity was only successful in giving indirect encouragement to our higher feelings. Even this would have been impossible except for the wisdom of the priesthood, but at the close of the Middle Ages when the priesthood became retrograde, and lost their

morality and freedom, the doctrine became impotent, and degenerated till it became a pouring source of degradation and of discord.

But the synthesis based upon Love of Humanity has too deep a foundation in truth to be liable to similar decline; and its influence cannot but increase so long as the progress of our race endures. It is the only system which without artifice and without arbitrary restriction can establish the preponderance of Affection over Thought and Action. To live for others it holds to be the highest happiness. To become incorporate with Humanity, to sympathize with all her former phases, to foresee her destinies in the future, and to do what lies in us to forward them; this is what it puts before us as the constant aim of life. Self-love in the Positive system is regarded as the great infirmity of our nature. The degree to which this mastery over our own nature is attained is the truest standard of individual or social progress, since it has the closest relation to the existence of the Great Being, and to the happiness of the elements that compose it.

The Cultus of the Religion of Humanity.

It has an elaborate cultus, private and public. The former divides itself into personal and domestic worship, each of which has its special rites. The objects of personal worship are the "guardian angels of the family" — the mother, the wife, and daughter — respectively as the highest representa-

tives of Humanity. The existence of the Supreme Being is founded entirely on love, for love alone unites in a voluntary union its separable elements. Consequently the affective sex is naturally the most perfect representative of Humanity, and at the same time her principal minister. Nor will Art be able worthily to embody Humanity except in the form of woman. The three types—the mother, the wife, and daughter—bring before us, in private life, the ideal of Humanity. Worship is equally due to these types of the family, living or dead. Death only exalts the character of the worship, which then becomes subjective instead of objective.

Each man should pray to his angels three times a day—on getting up, before going to sleep, and in the midst of his daily work. The worship of Humanity raises prayer for the first time above the degrading influence of self-interest.

The domestic worship is embodied in seven sacraments under the successive names of Presentation, Initiation, Admission, Destination, Marriage, Maturity, Retirement, Transformation, and lastly Incorporation. The first gives a systematic consecration to every birth. The parents present the child to the priesthood, and come under solemn engagement to fit it for the service of Humanity. The second sacrament means the initiation into public life. At the age of fourteen the child passes from the training of its mother to that of the national priesthood. Seven years later comes the sacrament

of Admission, when preparatory priestly education is completed, and the life service of Humanity is opened to the youth. At the age of twenty-eight the sacrament of Destination sanctions the career which he has chosen. Then follows marriage which is one of the most significant of the sacraments. Men can only be admitted to it when they have completed their twenty-eighth year; women when they have reached the age of twenty-one. Marriage when once entered upon is indissoluble, save in one case, i. e., the condemnation of one of the married persons to loss of social position for an infamous offence. In no other case is divorce to be allowed. The full development of the human organism, which is fixed for the age of forty-two, is celebrated by the sacrament of Maturity. This is a critical epoch in the Positivist theory of life. Up to this time life is preparatory in character, and the faults into which we have fallen, even of a serious character, are not beyond reparation; but from this time forward we can hardly ever repair any faults we commit, either in reference to ourselves or others. Hence a solemn ceremony to be imposed upon the servant of Humanity at this grave stage of his career. At the age of sixty-three, comes the seventh sacrament of Retirement. Our active service to Humanity is then completed, we retire from the stage of public duty, nominating our successor, subject to the sanction of the priestly authority. Then comes the last sad rite known by the name of Trans-

formation. But the Religion of Humanity surrounds the dying with the sympathy of a just appreciation, and mingles the regrets of society with the tears of the family. The hope of subjective *incorporation*, too, is held out by the religion. The final sacrament comes seven years after death, when the finished life is free from all the accidents of temporary passion, and may be finally estimated justly according to its true value. If the priesthood pronounces for incorporation, it presides over the transfer with due pomp of the sanctified remains from the common burial-place in the sacred wood that surrounds the temple of Humanity. The incorporated dead are thenceforth glorified. They become subjective members of the sacred existence.

The public worship of Humanity bears some resemblance to the revolutionary worship of the Goddess of Reason. The symbol of the Positivist Deity is a woman of the age of thirty, with her son in her arms. Such a statue is to be fixed in each temple of Humanity and a painted representation of the same figure is to be carried on banners in solemn processions. In all parts of the earth temples of Humanity will arise, but they must all turn towards Paris as the metropolis of the sacred race.

The worship of Humanity has also its calendar. The year is so arranged as to present an incessant series of festivals in honour of all the great epochs and characteristics

of human life and history. The days of the week, as well as the names of the months, recall the most illustrious heroes of Humanity.

II. Criticism of Comte's Religious Ideas.

a) Altruism: Social-feeling Versus Self-love.

According to Nietzsche, everything is right that increases man's consciousness of power, his desire for power, and his power. Let the weaklings and unhealthy perish, and help them to perish. The strongest ought to rule, the weak obey. The anarchist and the Christian are made of the same stuff; they are both rooted in sympathy, and seek to hamper the progress of the individual. Altruism makes possible the survivals of the weak, of all individuals not fitted for their surroundings.

Such an extreme egoism would be a real menace to social life, because it will break asunder the tie that binds fellow human beings. It is the social instinct in animals which enables them to act together, and it is this tendency to cooperate which gives them advantage over other species. If men should live for their own individual interests alone regardless of the welfare of others, what would become of the race? The human race would not have reached its present state of civilization without the aid of sympathy and cooperation.

Again the history of human progress is in one sense a history of conflicts between individual interests and those of society. Where a reformation takes place, or where any advance is made either in politics or in morals, there is always behind it the sacrifice of individual interests. In the Russo-Japanese War, tens of thousands of the Mikado's subjects sacrificed their lives for their country whose welfare and safety had been threatened by the aggressive policy of the Russian Empire. The glory of the victory was not enjoyed by these victims; they gave up their homes, their happiness, their ambition, and finally their own lives. As the result of their sacrifice the foundations of the Japanese Empire has been laid on a firmer ground, and she is making progress in all departments of her national life. The same was true in the American Independence. Hundreds and thousands of the American forefathers sacrificed their lives willingly for the welfare of their future generations.

Comte was wise in perceiving the value of Altruism which ends in self-sacrifice, and making it the fundamental principle of his ethics and religion of humanity. "In spite of its pretensions," he says, "intellectual force is not at bottom more moral than material"; "in our nature there is nothing directly moral but love: it alone tends to give to social feeling the ascendancy over personal. He thought that the means of securing the preponderance of altruism over

self-love was found only in the heart, which is the strongest element in human nature, and that the subordination of the intellect to feeling would be effected only by religion.

b) Religion, the Motive Power.

Benjamin Kidd in his "Social Evolution" brings out this idea and attributes the motive power to religious beliefs. He says, "The distinguishing feature of human history is the social development the race is undergoing. But the characteristic and exceptional feature is the relationship of the individual to society. The interests of the individual and those of society are fundamentally irreconcilable." Then he goes on to say that the central feature of history is apparently the struggle which man, throughout the whole period of his social development, has carried on to effect the subordination of his own reason. The motive power in this struggle has undoubtedly been supplied by his religious beliefs. The conclusion towards which we are led is that the function of these religious beliefs in human evolution must be to provide a super-rational sanction for that large class of conduct in the individual, necessary to the maintenance of the development which is proceeding, but for which there can never be any rational sanction.

c) The Kind of Religion Needed.

So far Comte and Benjamin Kidd agree. But as to the kind of religion to be adopted, the two thinkers seem to be in different situations. Comte asserts that the age of super-rational religion is gone and the positive religion of humanity must take its place—a religion which naturally dwindles itself to the worship of men, who have distinguished themselves a little above the rank and file of people, and to the adoration of woman in whom Feeling is most prominently impersonated. On the other hand, Kidd thinks that the function of religious beliefs in human evolution must consist in providing a super-rational sanction for conduct in the individual, and that it is important for all religions to assert the divine or supernatural enactment of right and wrong. In other words, according to Kidd a super-rational religion is needed for social evolution. Doubtless Comte was wise in catching the principle underlying the social growth, viz. the law of self-sacrifice which was well expressed by Jesus when he said that a grain of wheat must fall to the ground before it grows. But Comte stripped of his religion which must serve as the motive power of altruistic inspiration the most characteristic element necessary to its efficiency in social evolution. Comte tried to make up this deficiency by introducing a grand unifying system of priesthood corresponding to that of the Roman Catholic

Church. He seems to have imagined that by so doing he could give his religion of humanity such dignity and authority as to command one's spiritual submission. It is like a scaffolding around a temple which is being erected on the sandstone. The temple foundation sinks and the scaffolding collapses. So it was with the Religion of Humanity.

d) Mr. Martineau on the Subject.

Comte's idea of religion contains many noble elements of ethical truths and discipline. The artificial scheme of ritualism or the hostile attitude taken towards earlier faiths and philosophies should not blind us from giving him due respect. In his "Types of Ethical Theory," Martineau says, "He truly teaches that religion is heart-worship, directed upon what is supreme in the universe; that for us the highest conceivable is represented by the affective, intellectual, and moral activity of man, perfected in disinterestedness and self-sacrifice; that this highest is realized in our nature, rising as the ages pass, but is the ideal destination of humanity; and that the admiring and venerating contemplation of transcending examples in history and life powerfully rebukes our own shortcomings and fosters the secret enthusiasm of heroic goodness. But these social and historical venerations, as he himself admits, are but subsidiary lines of approach, converging towards the central shrine where the adoration is

consummated; they are minor religions, exercised upon suggestive symbols, and keeping the mind in tune for the last act of utter homage and self-surrender to the All-Perfect. We cannot but ask our guide, then, to lift the veil from that 'holy of holies,' and show us that ultimate object, which gives significance to all the rest.

"What does he produce? Nothing but a looking-glass, in which we see the image of our own expectant looks and awe-struck thought! Only a phantom blind and dumb that knows us not, and is but a phenomenon of ourselves!"

e) The Lack of a Central Personality.

The secret of power of a religion is its mighty central object of adoration. Without this, no religion whatever can exert any influence over the mind of people. The fascinating power of Christianity is the life and personality of Jesus. Macaulay in his essay on Milton refers to this question as follows:—

"The history of the Jews is the record of a continual struggle between pure theism, supported by the most terrible sanctions, and the most strangely fascinating desire of having some visible and tangible object of adoration. Perhaps none of the secondary causes which Gibbon has assigned for the rapidity with which Christianity spread over the world, while Judaism scarcely ever acquired a proselyte, operated more

powerfully than this feeling. God, the uncreated and the incomprehensible, the invisible, attracted few worshippers. A philosopher might admire so noble a conception; but the crowd turned away in disgust from that which presented no image to their minds. It was before Deity, embodied in a human form, walking among men, partaking of their infirmities, leaning on their bosoms, weeping over their graves, slumbering on the manger, bleeding on the cross, that the prejudices of the Synagogue, and the doubts of the Portico, and the fasces of the Lictor, and the swords of the thirty legions were humbled in the dust."

Pantheistic Buddhism has not power enough to attract the millions of the Orient, if not by the great personality of Gautama. Practically he is the centre of adoration. He is the image of the Spirit of the Universe as Jesus is the Son of God. In Japan Buddhism is divided into eight different sects; and the most influential are those which emphasize the personal Buddha, and not abstract doctrines.

Comte regarded humanity as the Grand-Etre that commands man's adoration and worship, but this was too vague and indefinite as the object of homage and loyalty. Notwithstanding the fact that he taught to adore great men who contributed towards human progress, he was not able to single out one in whom the human nature is perfectly realized, and he himself was far from being an example. But he seems to

have faintly perceived the importance of this principle, for he finally produced as worthy object of adoration, woman, who should be regarded, according to him, as the impersonation of love and feeling. He might have more appropriately called his system Religion of "Chivalry" instead of Religion of Humanity.

f) Subjective Immortality: Its Deficiency.

As we have seen, Comte recognizes the strong tendency of human nature desiring immortality, and also the fact that all kinds of religion in the human history have more or less tried to satisfy this tendency by means of their creeds and illusions. But instead of objective immortality positive religion offers the notion of subjective immortality. Our question is whether, or no, human beings are satisfied with immortality in the form of subjective immortality? Will they be satisfied with continuing to live in others only by means of thoughts, works and influence which they leave with their offspring? But the truth is that the human soul craves for personal identity after death; he is not satisfied with mere subjective existence of self. Fear of death common to all mankind is a proof; stories of ghosts and spirits in the tradition and literature of every nation are another.

Again the fact that human dealing is not fair in this world, — innocence is often condemned, whereas injustice

prospers, — indicates the necessity of retribution in the future world at the tribunal of the Universe. Again, love, the noblest sentiment, demands eternal love for its complement. Is the love of a mother weeping for her only child who dropped like a rosebud before the heartless wind eternally lost? Immortality is deepest craving of the human nature, which will be eternally incomplete without it.

"It must be so — Plato, thou reasonest well! —
Else whence this pleasing hope, this fond desire,
This longing after immortality?
Or whence this secret dread, and inward horror,
Of fading into naught? Why shrinks the soul
Back on herself, and startles at destruction?
'Tis the divinity that stirs within us;
'Tis heaven itself, that points an hereafter,
And intimates eternity to man."

— Addison, *Cato*.

Wordsworth's poem "We are Seven," simple and plain as it is, also reveals the profound truth of immortality.

Several years ago, a pupil of mine was dying from dysentery in Japan. He was a bright and promising student. Sitting beside his death-bed, I noticed an unusual struggle presenting itself on his face. I quietly asked what was the matter with him. He replied, saying "O, I want to become perfect. How sinful I am!" His soul was yearning for the